

松原岩五郎編

新撰東洋歷史問答

東京 博文館藏版



緒言

事物を問答体に記するは、食物に庖丁を入るゝが如し、咀嚼に易からしめんが爲なり。方今學校の課目頗る廣汎にして、學生は常に是れが多食に勞れんとするの狀あり、課目を細控して消化に便ならしむるの必要是に於てか起る。東洋歴史問答即ち又其一なり。編者は東洋歴史の一大塊肉に向つて便宜之れが挫折を施し、個々の片鱗となして以て齒牙の幼稚なる學生の咀嚼に便ならしめんと欲す。さればこれが釘釘の際に當つてその肉理の切目正しかんぞ期するは勿論、成べく滋養に益なき不消化分子

2
 を棄て、有用の部分を探り以て聊か學生諸氏が夙夕の過
 勞を省かん事を專一となせり。

編者識

目 録

新撰東洋歴史問答目次

| | |
|--------------------------------------|-------|
| 目次 | 目 |
| (一) | |
| 東洋史總説 | 第一章 |
| | |
| 八問 | (一) |
| 古代史 | 第二章 |
| (夏、殷、周、春秋戰國) | |
| 四五問 | (六) |
| 中古史 | 第三章 |
| (秦、漢、南北朝、隋、東漢、三國) | |
| 一一四問 | (二九) |
| 近古史 | 第四章 |
| (唐、五代、後梁、後唐、後晉、後漢、後周、契丹、宋、西夏、遼、南宋、金) | |
| 八〇問 | (九六) |
| 近世史 | 第五章 |
| (元朝、明朝、清朝) | |
| 七六問 | (一三七) |
| 第六卷 | |

亞細亞各邦史

中央亞細亞——(蒙古各部の盛衰) 西部亞細亞——(阿富汗、波斯、土耳其等) 朝鮮、印度、後印度(暹羅、緬甸、安南)、歐人東漸史——(印度方面)、印度東漸史(中央亞細亞方面)

東亞最近史(日、清、韓關係)……………六七問……………(一七八)

東洋歷史年表

……………(一一七)

支那歷朝交替一覽表

……………(一一三)

最近官立學校入學試驗東洋歷史問題

……………(一一五)

三十三年度

一、第一高等學校

一、第二高等學校

一、第三高等學校

一、海軍兵學校

一、海軍機關學校

一、陸軍一年志願兵入學

一、東京美術學校

一、高等師範學校本科

三十四年度

一、商業師範學校官費專修科

一、郵便電信學校

一、陸軍士官候補生志願者

一、海軍兵學校

一、商船學校

一、外國語學校

一、高等師範學校官費專修科

一、第一高等學校

一、高等商業學校

一、東京美術學校

- 一、高等師範學校豫科
- 一、陸軍士官學校

新撰東洋歴史問題目次終

新撰東洋歴史問答

松原岩五郎編

第壹章

東洋史總說

一、東洋史とは何ぞ (東洋史の定義及び其類別を問ふ)

答 世界に二大歴史あり一を東洋史、一を西洋史といふ、歐羅巴、亞米利加、亞弗利加、及び濠洲を一般に西洋といふに對して大略亞細亞全洲を指して東洋といふ、而かも東洋史は西洋史に比して稍や狹義に解釋しアムール河水域以南及チグリシ、ユーフレーテス兩水域以東の亞細亞本部を解釋するを可とす、即ち支那本部、蒙古、西藏、印度、波斯朝鮮等其の範圍内に在り但し其の範圍は時に從ひ伸縮あるものとす、東洋史は即ち是等諸國に於ける種族の興亡盛衰等凡て我が人類社會に至大の影響を及ぼして以て今日の文

明を致したる過去事實の記録なり

二 東洋に於ける國民發生の地域を問ふ

答 亞細大陸に四個の大肥沃あり、是皆古代國民の發生せし地域にして其第一は太平洋方面に在り、即ち黄河及揚子江の水域にして所謂支那本部の一大肥沃是れ實に東洋文明の發源地とす、第二は印度洋方面にしてカンガ及印度の二水域とす、即ち上古印度の文明は此の所に於て開けたり、第三は波斯灣方面にしてチグリス、ユーフラテスの二水域、是れカルデア、及びバビロニアの起りし地域たり、第四は中央亞細亞の一方面にしてシール及アムール河(共にアラル海に入る)の二水域是れ支那史の所謂西域諸國と稱して古來興亡のありし所なり、

三 東洋史上に活動せし人種の重なる名稱を挙げよ

答 東洋史上の主動者は所謂黃色人種にして其重なる者は大略七種とす曰、△支那種、△西藏種、△印度支那種、△通古斯、△蒙古種、△土耳其種、及△韓種

四 東洋史上に活動せし人種の類別を問ふ

答 (一)支那種は一名漢人種と稱し自から夏人若しくは華人と稱す頗る文藝を尙び其始

めは黄河水域に繁殖し漸次他族(此の水域には元々苗族と稱するもの漢人種の以前に存在せしが漢人種の爲めに逐はれて今の雲南貴州の地方に退きたり)を逐ひて遂に支那全土に蔓延せしものなり但し支那歴朝の帝王中には此の種に屬せざる者も又尠からず、(二)西藏種は現時の西藏人、チベット人、ブータン人等にして古代の氐、羌、月氏、吐蕃、黨項等の諸族皆是に屬せり(三)印度支那種は當時の緬甸、暹羅、安南、東蒲塞、交趾、等に住せる人民にして古史に苗、貉、越等の名あるもの(四)通古斯種は滿州より露領西比利亞の南方地方に散在せる人民にして所謂滿州人種なるもの、支那史に肅慎、女眞、靺鞨、挹婁等の稱ある者皆是種に屬し今の清朝の祖又實に此の人種なり(五)蒙古種は内外蒙古、青海、及阿爾泰山の北部、バイカル湖以南の地に住し史に鮮卑、契丹、東胡、と稱するもの皆是に屬し、英雄鐵木眞、成吉思汗等は是の人種を以て興りたるものなり、(六)土耳其種は現時天山南路中央亞細亞、及土耳其斯坦地方に住し、史に罽賓、匈奴、柔然、突厥、黠戛斯と稱するもの皆此種屬たり(七)韓種は始め朝鮮半島の南部に住して馬韓、辰韓の三國を建てしが夙に漢人種と混じり又蒙古及び通古斯の一種族とも混じたり

五 東洋史上に顯はれたる人種と地域の關係は如何

答 (第一)太平洋方面の地域即ち支那本部の地は上古以來漢人種の占有せし所る有史以來五千年歴史上の興廢隆替最も頻繁を極め且つ域外の各人種即ち蒙古、土耳其、及通古

斯との争闘攻略を以て境土の消長伸縮を成し、東洋史中最も肝要なる部分なりとす、(第一) 印度洋方面の地域即ち今の前印度の地は安南暹羅、英領印度伯爾日斯坦、阿富汗斯坦の諸國を含むと雖も歴史上に注意すべきは専ら英領印度とす、英領印度の住民は歐弗大種印度支那種の外尙馬來、埃斯德羅利種ありと雖も東洋史上に關係あるは歐弗及印度支那種にして印度の歴史は即ち此の二種族の専有たり(第三) 中央亞細亞の方面即ち土耳其斯坦の地域は古代黃白二人種の發育地の如くに想像せられ秦漢以後此の地方に興廢せし諸國民は皆東洋史と密接なる關係を有するを以て頗る注意すべき所とす而已ならず此地方は古來亞細亞人種と歐弗人種(土耳其、亞拉比亞、埃及諸邦に擴がる各人種)との分争點にして、アリア種族部爾格種族、蒙古種族が互に境土を擴めんとして東西より相抗争せし所なり(第五) 波斯灣水域の地は歷史上西洋史に屬すべき者なるも古代アリア人種の繁榮せし波斯に於ては又印度及中央亞細亞の歴史と多少の關係を持つものと知るべし

六 東洋史の紀源及其の大別を問ふ

東洋史の紀源は決して西洋史に劣らず、有史以來今に至るまで凡そ五千年、此の間人類社會の發達は綿々として相連り曾て間斷ありし事なしと雖も、まづ時代の特性に従ひ大凡左の四期に區別せらる(一) 古代史、大古より東周の末路に至るまで(二) 中古

史、秦の始皇より六朝の終に至るまで(三) 近古史、唐より宋代の末路に至るまで(四) 近世史、蒙古の勃興より清朝に至るまで。

七 支那の東洋史に於ける地位は如何(何故に支那史を以て東洋史と稱するや)

東洋史は亞細亞諸國民の歴史なれども支那は世界中の最舊國にして其文明甚だ夙く、自餘の諸邦國及び諸蠻族に至るまで多少其の文明の風化を蒙らざるなく是れ支那が東洋史の中心たる所以なり。

第二章

古代史

夏、殷、周、(春秋戰國)

一、上古

一 支那文化の草創は如何

支那の文化を創めたるを漢人種とす、固き西方より來つて黄河の北に土着せる一種族なりしが當時は幾多の部落に分れて未だ一統の君主を戴かさざりしが如し、只古傳説に三皇五帝の號を設け人生利用の事悉く其の制作に出づることなしたり、要するに支那の文明は黄河及び揚子江の間に起り此の江河兩水の中間の地は地味豊腴にして百物産せざるなく氣候中和にして人類の生息に適合せしを以て大古一群の人類まづ此の所に居を定め一社會を形造りたるものなる事想像され得べきなり

二 三皇五帝の古傳説に就て其梗概を擧げよ

三皇とは燧人氏、伏羲氏、神農氏、燧人氏は食物の煮焼を始め、伏羲氏は八卦を劃し漁法を教へ、神農氏は農業を傳へ貿易を興す、五帝とは黄帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜なり、黄帝は諸民族を従へて廣く土地を開き以て黄河の河畔に大國を建て、舟車を製し、文字を定め、宮室を作り、曆法を創めたり、又堯は大型にして君徳高く無爲にして天下治る後世以て道徳の模範施政の龜鑑とす、舜は堯の時孝悌を以て知られ堯の爲めに用ゐられて政を行ひ大治績ありて遂に堯の讓を受けて帝位に登る舜も又聖徳あり、後世堯と併せ稱せらる舜又大に賢能の士を拔擢して庶政に參預せしめ中央行政地方治民の制度を定め、天子巡幸諸侯朝覲の禮義を興し、以て堂々帝國の體裁を完備せり又舜代の官制には司空、司徒、秩宗、士、共工、納言、后稷、虞典樂の九官ありて政務を分掌し、地方官には四岳、十二牧あり、刑法には墨、劓、剕、宮、大辟の五等あり、曆法も既に定りたるのみならず、象形文字も既に發明せられたり

三 禹の功績は如何

堯舜の世洪水氾濫せしかば舜は禹に命じて水土を治めしむ禹即ち土工に従事する事前後八年、道路を通じ水運を開き因りて以て九州の貢賦を定め五服の制を立て、功によりて百揆に擧られ遂に舜の禪を受けて帝位に登れり

四 禹工九州の名稱を擧げよ

答 曰く△雍州、△冀州、△兗州、△青州、△徐州、△揚州、△荊州、△豫州、△梁州、是なり梁州は今の四川省、荊州は湖南湖北の地、揚州は今の浙江、安徽、青州徐州は今の山東の地、又兗州冀州は今の直隸省の地、雍州は今の山西甘肅の地なり

五 夏后氏の興廢に就て其の梗概を擧げよ

答 禹土王を以て舜の禪を受けて帝位に即き安邑に都(山西省)し夏后氏と號し自ら儉素を守りたるを以て天下頗る平かなり、禹の子啓亦よく父王の業を守りしが啓の後に至りて國威次第に衰へ最後の王、桀に至り後宮の嬖妾末喜を寵して忠良を斥け淫樂に耽りしかば遂に湯王の爲めに滅されたり時に紀元前十八世紀にして夏后氏の國を保てる事實に十七世、四百餘年なりといふ、蓋し禹死してより聖賢相傳の舊例を廢し世襲的新法を立てたるものは夏后氏なり

六 殷の興廢に就て其梗概を擧げよ

答 湯王は姓を子といひ元々夏后氏の世に於ける一諸侯なりしが賢臣伊尹を擧げて相となし次第に衆望を得て遂に夏を伐ちて之に代れり、是れ蓋し支那三千載に於ける革命の

〇七 周の勃興を問ふ、(武王及文王の事蹟)

先例を示したるものなり。湯王は都を亳に定め(河南省)て國を商と號したり、湯王の後太甲位に登り伊尹心を盡して之を補佐し、天下平安なりしが太甲崩じてより國勢次第に衰へたりしが其の間七代の王に太戊あり二十代に武丁あり共に英明にして良佐を擧げ用ひしかば國勢一時振張して諸侯服従せしが二十五代の王武乙無道にして鬼神を恐れず野に獵し雷に撃たれて死せり、二十八代の王を紂といふ淫虐無道なり、民怨みて諸侯背き周侯發終に諸侯と紂を討つ、紂遂に燔死して殷の帝業は茲に滅亡を告げたり、實に紀元前千二百二十二年、殷の國を有てる事二十八世、凡六百餘年なりし

答 殷の十九代に當りて智者あり古公亶父と云ふ、初め西陲の豳地(蘄縣)に穴居せしが衆を率ゐて岐山(陝西省岐山縣)の下に移り始めて宮室を作り國を成して周と號し、其の孫を昌と云ふ、昌聖徳あり、殷王紂の政を佐けて西方の諸侯を管す、威望漸く熾なりしが終に天下を三分して其二を有つ昌の子を發といふ殷の紂王三十一年發東行して兵を孟津に觀す、諸侯の會するもの皆勸めて紂を討たしむれども聽かず、同三十三年遂に兵を出して之を伐ち殷を亡し以て天子の位に即き父を追尊して文王と稱す、發は即ち周の武王なり、周は姫姓にして其の始祖を嚳と云ひ唐虞の際后稷(稼穡を教ゆる官)となつて部(陝西省)に封ぜられしものなり

八 周の建國に就て重なる事項を記せよ

【答】 周の武王殷を伐つて帝位に即くや太公望、周公旦(武王の弟)共に輔佐の任にあり、先づ都を鎬(陝西省西安府即後の長安)に定め大に封建制度を立て、兄弟を封する事十五人、同姓を封する事三十八人、異姓(即ち先代の後裔)を封する十八人に及ぶ即ち太公望を齊に、周公旦を魯に、召公奭を燕に武庚(紂の子)を殷に又箕子を朝鮮に封じて王險(平壤)に都せしめたり、而して同姓諸侯は必ずす之を要地に分封し、異姓諸侯を其間に置き交錯制肘せしめ又新たに公、侯、伯、子、男、の五爵を設け以て純然たる封建の制度を建設せり。公侯の封土は方百里、之を大國と言ひ伯は七十里之を中國と言ひ、子、男は各五十里、之を小國とす、而して天子は甸服方千里を有し之を王畿と稱せり。

九 周の制度に就て重なるものを擧げよ

【答】 周室の制度は頗る完備せるものにて官制は大宗宰ありて天下の大政を總攬し、太司徒を置き農商教育警察を司らしめ、太宗伯ありて祭祀、朝聘を司り、太司馬ありて軍兵の事を司り太司寇ありて刑辟を治め、大司空ありて百工の事を管す、又各官の下に六十の官を置き別に三公三孤の職を置き天子輔翼の任に當らしめたり、以上は周の朝廷の官制なれども諸侯の官制も又之に法りて少しく節略あるのみ

一〇 周の田制を問ふ

【答】 由來田制には夏に貢法あり、殷に助法ありしが周は此の二法を通用して之を徹法と云ひたり、即ち一井を九百畝とし中百畝(凡我一町七反餘)に當るを公田とし餘は八家に於て各々百畝を受領し、八家は共に公田を耕し、公田の收穫を粟米の征と云ひ人民を役するを力役の征と云ひ絹布を貢せしむるを布縵の征と云へり、夏、殷、周三代の間税法は凡十の一を納れしむるの制なりしが周末干戈相連り國用多端に赴きしかば諸侯或は十の二を取り甚だしきは十の五を取るに至れり

一一 周の兵制を問ふ

【答】 兵制は田制に基き六十四井を一甸となし甸毎に戎馬四匹、兵車一乘、兵卒百人を出さしめ以て軍隊を編制し、一萬二千五百人を以て一軍となし之を師、旅、卒、兩、伍、に分ち、天子は六軍、大國は三軍、中國は二軍、小國は一軍を置く例とせり、當此甚だ兵農の區別なかりしが春秋戰國に至りては此の制又行はれず諸侯争ふて兵馬の盛強を耐るに至れり

一一 周室の盛衰を略記せよ

周の武王崩じて子成王誦立ちしが歳尚幼かりしを以て周公且召公奭は力を協せて幼主を輔翼し、武王の弟、管叔、蔡叔、霍叔の武庚と共に亂を作せるを征定し、奄徐夷淮夷の之に應ぜざるを平定し更に微子啓を宋に、王弟叔虞を唐に封じ又禮樂制度を制定して摸範を後世に垂れ、洛邑を建て、天下の諸侯を會しき、成王の子を庚王と云ふ、此の際國內安寧にして内入刑罰を用ゐざる四十年に及び外は肅慎、越裳氏等の來賀朝貢するありて周室は全盛に達したりき故に後世治を稱す、必らず成庚を云ふ庚王崩じて昭王瑕立つに至り周室稍々衰へて四夷交々侵入し來り、王は南巡して途に死し、穆王滿は犬戎を征して却て諸侯の心を失ひ王威又荒服の地に及びざりき尋て紀元前十世紀の半頃厲王胡、位に在りしが暴政甚だしかりしを以て人民蜂起して之を蕞(山西霍州)に逐ひ共和の政を爲す事十餘年、太子宣王靖位に即くに及び北は(獫狁、猃狁と同種)を征し南は淮夷荆蠻を平げ又能く賢良に任じて中興の業を成就せり。子幽王宮涅に至り褒似を寵して皇后申氏及太子宜臼を廢しければ外戚申侯大に怒り犬戎と謀を合せて王を驪山(陝西西安府)の下に弑せり是に於て晋の文公、衛の武公、秦の襄公等各々師を帥ひて來り救ひ犬戎を擊退して宜臼を迎へ立てぬ、時に紀元前七百七十年是を平王と云ふ、是歳平王は西都の戎に逼らるゝを以て徙りて洛邑に居り、岐豐の地を擧げて秦に與へぬ之を周の東遷と云ひ、是より以後を史家は稱して東周と云ひ以前を西周と云ふ

二、春秋時代

一三 春秋時代とは如何

周室の盛時に在つては王畿千里は固結して一大國と成り、異姓諸侯は四方に割據して藩屏となりしが其稍々衰ふるに及びて王命天下に行はれず、諸侯互に相呑噬して周の平王の時には百七十國を存せしもの其後弱國愈々亡び春秋の世に至つて強國の存するもの僅かに△魯、△衛、△晉、△鄭、△吳、△燕、△蔡、△曹、△齊、△宋、△楚、△越、△陳、△秦の十四國となれり、後幾くもなくして曹蔡滅び遂に春秋十二列國となれり。蓋し東周の世は凡五百二十年之を二分して前者を春秋の代後者を戰國の世とす、春秋の代は凡三百五十年なり

一四 諸侯の會盟とは何ぞ

東周の世は王室弱くして諸侯強く、諸侯の最も強きもの自から稱して覇者と云ふ、覇者は會盟の主長となり諸侯を指揮して王事に勤勞し蠻族の侵入を防ぎ、兼れて諸侯の和親を厚くする等を掌る

一五 春秋の代覇者の重なるものを擧げよ

答 覇者の尤も名ある者は齊の桓公晋の文公秦の穆公楚の荘公とす史家之に宋の襄公を加へて五霸と稱す、五霸を佐けたるものゝ中最も有名なるを管仲と云ふ、管仲は桓公の佐なり、桓公の起りたるは西紀前六百八十年なり

一六 齊の桓公の覇業を問ふ

答 齊の桓公は呂望の後裔なり、管仲の謀を用ゐて富國強兵を圖り始めて兵農の區別を立て諸侯を會して山戎北狄を討ち、又楚の成王の周室に貢せざるを責めて之を召陵に盟ぬ、其後桓公は更に諸侯を葵丘に會して列國の平和を期せしが、斯く桓公をして五霸の最たるを得せしめたるは全く管仲の力なりし、而れども其の卒するに及び五子立つ事を争ひ覇業忽ち衰へたり

一七 管仲は如何なる人物なりしぞ

答 齊の桓公英雄の資を以て駭然頭角を顯はし、内は諸侯を糾合して以て周室を翼戴し外は戎狄を排して以て中華を安んず、是を輔けて大業を成さしめたるものは實に管仲の力なりしなり管仲は一世の大政事家にして經濟に明かに治術に長ず桓公に遭遇せしより

一八 宋襄及晋文の覇業を問ふ

國家を以て自から任じ法度を明かにし紀律を嚴にし農政を擧げ商賈を通じ以て民業を振興し國力を富饒にし、兵備を盛にせしのみならず又意を教育風俗に留む内國既に治まり而して外役に従事す北は燕を救ひ、山戎を逐ひ南は衛を復して狄人を攘ひ當時の支那民族をして異族の侵害を免かれしめたるもの一に管仲の功與つて多きに居る。孔子嘗て其功を賛して曰く管仲微りせば吾れ其れ衽を右にせん

答 齊桓に繼で覇を圖りしもの之を宋の襄公とす然れども其國偏小にして又賢佐に乏しく治國の基礎未だ立たずして妄りに外に従事し徒らに宋襄の仁を爲して世の譏笑する所となれり、宋襄に次で覇を唱へしもの晋の文公とす、文公は宋襄に次で起り、覇業の盛なる一時管仲と相比す周の襄王赤狄の爲めに逐はれて鄭に走り難を諸侯に告げしかば文公まづ王を復して尊王攘夷の實を示し、次で齊宋秦の兵率ゐて楚軍を城濮に破り諸侯を踐土に會して之が盟主となり今の山西の全部及び直隸の南境河南の北境を領して終に都し以後百餘年間世に中國に覇たりき

一九 宋襄の仁とは何ぞ

答 宋の襄公楚を將に泓に戦はんことをせしに宋は既に陣を布きて列を成すも楚の兵未だ泓

を渡らざりし時に公子目夷の曰く彼は多く我は寡し請ふ楚人の未だ畢く濟らざるに乗じて之を敗らんよ襄公の曰く君子は人を阨に困めずさいへり我豈に小人を學ばんやと敢て聽かず楚人既に濟るも未だ列を成さず君子は列を成さざるに致たすよ又聽かず、楚の兵既に陣するに及び共に戦つて大に敗績せり故に世笑つて宋襄の仁となせり。

二〇 秦の穆公の覇業を問ふ

秦は紀元前十世紀の末始めて渭水の上流秦(甘肅秦州)に國せしが周室の東遷の際岐豊の地を得て漸く強大となり、襄公五世の孫穆公に至り百里奚、蹇叔、由余の徒を川を以て國政を増修し國を併する二十餘、地を拓く事千里に及び晋の文公と相對して西方に雄を稱せり、文公の卒後穆公は晋と隙を生じ秦に戦ひて敗れしが是より秦首兵を構ふる事七十年に及べり

二一 楚の莊公の覇業を問ふ

楚の成王の孫を莊王族と云ふ秦晋の争に乗じて南方に覇を稱し庸を滅し百濮、陸渾を伐ち遂に洛水の上に至りて兵を關の境上に觀しぬ蓋し周室を圖るに意ありしなり、次で陳を平げ鄭に克ち晋軍と鄭に戦ひて大に之を破り又宋を攻めて之に和を許し其の版圖は今の湖廣兩江及河南の東南境を奄有する一大國なりし

〇 二二 吳越の興亡を畧記せよ

吳は周の太王の長子太伯の後にして今の兩江の大半を占め平江(江蘇蘇州)に都せり、壽夢の時始めて晋に通じてより國勢稍々強大となりしが闔廬出づるに及び、伍子胥の計を用ゐて楚國を蹂躪せり、既にして秦は兵を出して楚を救ひ、越は新たに勃興して南方より吳を侵せしかば闔廬は兵を率ゐて國に歸り越王勾踐と稱し李に戦ひて傷き死せり時に紀元前四百九十六年なり、闔廬の子夫差繼いて立ち日夕父の仇を報ぜんよ欲し遂に越軍を破りて勾踐を會稽山(浙江省紹興城の東南)に圍みしも伍子胥の諫を納れずして之に和を許し次で齊の内亂あるに乗じて之を破り諸侯を黃地に會して始て覇を稱せり、是より先勾踐は范蠡の謀を用ゐて密かに回復を圖らんよ期せしが是に至り期熟せりよなし師を興し、數戰の後夫差を姑蘇山(蘇州府)に自殺せしめ吳を亡して其地を併せ北淮水を渡りて齊晋諸侯を徐州に會し、貢を周に致して伯となり、以て一時江淮の間に雄視せしが勾踐卒して後霸業また振ばすなりぬ

二三 會稽の恥とは何ぞ(臥薪嘗膽の故事)

吳王闔廬越と戦ひ劍を蒙りて死す子夫差父仇を復せんよ欲して朝夕薪中に臥し出入に人をして呼ばしめて曰く夫差汝越人の汝が父を殺せしを忘れたるかよ周の敬王の二十

六年夫差大に越を夫椒に敗る、越王勾踐餘兵を以て會稽山に棲み降を請ふて曰く、我は大王の臣ならん、妻は大王の妾に獻ぜん、伍子胥は之を不可させしも太宰伯嚭なるもの越の賄を受けて夫差に説き之を赦さしむ、勾踐國に反り膽を坐臥に懸け仰て之を嘗めて曰く汝會稽の恥を忘れたるか、國政を擧げて大夫種に屬し范蠡と兵を治め十年生聚し十年教訓し遂に兵を出して吳を伐ち三度戰つて三たび克ちたり

二四 范蠡の人物と其事歴を問ふ

范蠡は楚の人なり越王勾踐に事へて上將軍となり勾踐を佐けて吳を滅し以て會稽の恥を雪がしめ、功成り名遂げしめて仕を致して越を去れり、蠡去るに臨みて大夫種に書遣りて曰く越王の人となり長頸烏喙なり、俱に患難をすべきも俱に安樂を同ふすべからず子何ぞ去らざるを、種疾を稱して出でず、或人種を繞して曰く且に亂を爲すべしと劍を賜はりて死せり是に於て范蠡は其輕寶珠玉を裝ひ私從と共に舟を江湖に浮べ齊に出て姓名を變じて鴟夷子皮と云ひ父子産を治むるも數十萬に至る、齊人其賢を聞き以て相となせり、蠡喟然として歎して曰く、家に居つては千金を致し官に在つては卿相を致す、此れ布衣の極なり久しく尊名を受くるは不祥なりと乃ち相の印を解き盡く其の財を散じ重寶を懐ろにして間行し陶に至りて止まり、自から陶宋公と云ひ貨百萬を累れたり、魯人猗頓なるもの往いて其術を問ふ蠡の曰く五符を蓄へよと、乃ち大に牛羊を猗氏に畜ふ十

年の間畜繁殖して實王公に擬す故に宮を天下に稱するもの必ず陶宋猗頓を稱す

二五 春秋の代陪臣の跋扈せし事情は如何

春秋の世各諸侯は覇を中原に争ひて吞噬を事とせしが其末年に至りては却て其臣下の専横に苦しみ侵凌篡奪の禍に遭へる者少からず即ち魯には三桓あり、齊には田氏あり晋には六郷ありて各々驕暴を極めたるが如し、六郷中韓、魏、趙の三氏即ち三晋は諸侯に封ぜられしが次で晋を滅して其地を分ち趙は直隸の西南境及び山西の大牛を有ちて邯鄲に都し、韓は河南の半、及山西の東南境を有ちて陽翟に都し魏は山西の西南境及河南陝西の北境を有ちて安邑に都し尋て大梁に移り田氏は其君を遷して齊を領したり

三、 戰 國

二六 戰國とは何ぞや

春秋の末に至り文武周公の禮樂刑政は既に蕩然として地を掃ひ、攻伐闘争日に相尋きて詐力權謀公行して讓憚する處なく仁義禮樂の假面を脱して弱肉強食の眞面目を露出するに至りたる是を戰國の世といふ

加九

二七 戦國群雄割據の形勢は如何

戰國の世周室は益々微にして諸侯は肆まゝに兵を用ゐて強を争ふ諸侯の中強國は七國弱國は十有餘あり、七強國は△秦△楚△趙△魏△韓△齊△燕をいふ、而して秦は西方に在り、楚は南方に在り、趙、魏は天下の中央に國し東隅に據るものを齊とし東北隅に控ふるものを燕とす、地形を案するに西方は高く東するに従ひて稍々低し故に西方に國する者は戰守に利にして中原を統一するに便なりしが如し

二八 商鞅の人物を問ふ

戰國の始め賢明英達の君主は魏の文侯、齊の威公秦の孝公とす、孝公の位に即くや銳意治を勵み商鞅を擧げて國政を委任せしが商鞅井田の法を廢して耕作を自由にし、税制を更めて十が五を取り、度量衡を平にし分家の制を立て戸口を増し什伍の法を設けて民をして相糾察せしめぬ、秦之行ふ十年にして郷邑大に治り魏を伐ちて河西の地を略し都を咸陽に徙して勢威に日盛なりき

二九 合従連衡の説とは如何

秦商鞅の謀を用ゐて國勢日に益々盛強にして自餘の六國をして恐れしめたりしかば

蘇秦なる者出で合従の説を唱へり、合従は六國相合して以て秦に當るにあらざれば六國の生存上不利益なりといふに在り同時に張儀なる者あり連衡の説を唱へて合従の論を抗せり、連衡は六國相並びて秦に仕へ六國の中一國若し秦に仕へずば五國共に之を撃つといふに在り、其後諸侯或は合従し或は連衡して互に交戰を事とせり

三〇 蘇秦の畧歴を記せよ

蘇秦は洛陽の人なり鬼谷先生に師事して縱横の説を習ひぬ初め出遊して大に困みて歸る、妻機を下らず嫂爲めに炊かず是に於て發奮苦學して揣摩の説を出し秦の惠王に游説して用ゐられず、乃ち燕の文公に説きて趙と從親せしむ燕之に従ひ資して趙に至らしめ以て其説を成さしめたり、秦趙に至り侯説いて曰く諸侯の卒は秦に十倍せり今力を併せて西に何はと秦必ず破れん、大王の爲めに計るに六國從親して秦を斥くるに如かず侯之に資して以て諸侯に約せしむ、蘇秦鄙諺を以て説いて曰く寧ろ鶏口さなるも牛後さ成るなかれと遂に六國を説服せしめて、已れ從約の長となり且つ六國に併せて相となり洛陽を過ぎしに車騎輜重王者に擬せり、昆弟妻嫂目を側て、仰き視す俯伏して食を取る蘇秦笑ふて曰く何ぞ前には倨りて後には恭しきやと皆曰く季子の位高く金多きを見ればなりと秦喟然として嘆じて曰く此れ一人の身にして富貴なれば親戚之を畏敬し、貧賤なれば之を輕易す況んや衆人をや若し我をして洛陽貢部の田二頃あらしめば豈能く六國の

相印を佩びんやま是に於て千金を散じ以て宗族朋友に賜ふ肅侯秦の功を成して歸れるを喜び秦を封じて武安君となせり、後六國の從約破るに及んで秦遂に齊に走り殺さる

三一 田單と樂毅の事を記せよ

〔答〕 戰國の時燕は東方に孤立して退嬰自守するのみ、昭王の世に至り郭を得て之に師事し死を吊し老を問ひ辭を卑ふし幣を厚ふして賢者を招ぐ是に於て士争ふて燕に赴く既にして樂毅は魏より往く毅は良將なり、能く兵を用ゆ昭王之を以て齊を討たしむ、齊王出奔す、毅勝に乗じて六ヶ月にして齊の七十餘城を降す、此時に當り齊に王孫賓なるものあり幼主を輔翼し田單を推して主將となし以て燕を拒がしむ、田單武略あり自ら版罽を操りて士卒に苦樂を同ふし妻妾は行伍に編し是に於て反間を放ち樂毅を燕より退かしめ遂に火牛の奇策を用ゐて大に燕軍を撃破し七十餘城を恢復す世に之を燕齊の報復といふ

三二 戰國食客の輩出せし事情は如何

〔答〕 戰國亂離の世は唯人才を得るに急なるが故に苟も一技一能を有して國家を利するものあれば即ち貴賤を論せず親疎を問はず皆收めて君主の用に供せしより従つて一種の風習を生じ遂に食客の輩出を見るに至れり而して其食客は力士あり説士あり劍客あり雖も多くは政事に志を有する民間の政談家にして恒産を有せざる壯士輩なり而して是等

の壯士を養ふもの少きも四五十人より多きは數千人に至る、就中孟嘗君、平原君、信陵君、春申君の四公子の如き最も顯著なるものなりし

三三 孟嘗君の事蹟を擧げよ（鷄鳴狗盜の故事）

〔答〕 孟嘗君名を文と云ひ、靖郭君田嬰の子なり食客常に數千人あり、名聲諸侯に聞ゆ秦の昭王其の賢を聞き乃ち先づ質を齊に納れて見るを求む至れば則ち之を囚へて殺さんとす、孟嘗君人をして昭王の幸姫に抵り解く事を求めしめしに姫の曰く願はくは君の狐白裘を得んご、孟嘗君已に昭王に献ぜしを以て他の姫に贈るべき裘なし客によく狗盜を爲すものあり秦の藏中に入り裘を盗みて姫に献ぜり、姫爲めに王に言ひ、釋さるよとを得たり、孟嘗君即ち馳せ去り、姓名を變じて夜半に幽谷關に至る、關の法、鷄鳴にして方に客を出す孟嘗君秦王の後に悔めて逐はん事を恐る、客によく鷄鳴を爲すものあり、鷄盡く鳴く遂に傳を發するを得たり

三四 六國滅亡の原因を記せよ

〔答〕 戰國の世天下の形勢を視七國の動靜を察するに秦は主動にして攻撃を事とし、六國は從動にして時に或は相親めども其親毎に久しきを保たず離るれば即ち戦ひ戦へば則ち相弱くし以て自然に秦の利を爲す、六國を滅ばしたるは秦の強にきあらずして六國先づ

自から弱めたる結果なり

三五 戦國時代に輩出せし重なる人物を記せよ

答 戦國の代は人物輩出の時代なりまづ辯舌を以て名を著せし者には蘇秦張儀あり、兵法を以て聞へたる者に吳起、司馬、穰苴あり、法律刑名家に李悝、申不害、商鞅、韓非あり、尙將帥、宰相の器に孫臏、龐涓、廉頗、藺相如、郭隗、樂毅、田單の徒あり其他遊俠、刺客、等枚舉に遑あらず

四、周代の文化

三六 周代の學制は如何

答 周の世は教化盛に行はれて文學見るべきもの多し京師には大學を設け地方には小學を置き、諸侯の領土又大學小學あり、八歳より十四歳に至るまでの子弟小學に在りて學び洒掃應對の禮を習ひ、十五歳より二十歳に至るまでは禮樂、射、御、書、數所謂藝を講ず業を率へたるものは官吏に登用せらる授くるに處の典籍には詩、書、易、周禮、儀禮等の書なりき

三七 周代の祭祀は如何

答 祭祀は唐虞以來一定の制を生じ天子諸侯の祭る所を異にせり、天子の壇を國都の南郊に築き柴を燔きて天を祭り其祖を配食せしむるを郊祀と云ひ之に次ぐを社稷と云ふ、社は土神にして稷は穀神なり諸侯は社稷を立つるを得れども郊祀を行を得ず又天子は九州の名山大川を祭るを得れども諸侯は唯境内の山川を祭るに止れり、其他水旱日月の蝕等あれば必ず祭を爲すを例とせり

三八 周代の嫁娶は如何

答 周代女を嫁るは必ず異姓よりす、苟も同姓の國たれば民族既に別れ疏遠數十世に至るも雖も斷じて相通婚せず蓋し上世異姓を協和せんを欲して同姓間の嫁娶を禁じたるに原けるが如し

三九 周代の文書は如何なる有様なりしや

答 文字は已に三代以前より有り傳へて黃帝の世蒼頡の發明にかゝるをなす、當時未だ紙あらざりしを以て或は木或は竹に書し書籍の如きは大抵漆液を以て竹簡に書し、韋を以て之を編めり其の文字の形狀蝌蚪に類せるが故に後世之を蝌蚪文と稱す、周の宣王の時太史籒大篆を作り秦の李斯之を増損して小篆を作り程迺次で隸書を作れりといふ

四〇 周代學風の變動を記せよ

答 周の初世は典禮莊重にして學制最も完備せしが春秋戰國の代に至り思想言論の自由を生じてより學者一時に輩出して各自新説を唱導し儒、道、楊、墨、法、兵、縱橫等所謂諸子百家の稱ありき

四一 孔子の人物と其の事蹟を記せよ

答 儒家の祖とせる孔子は字は仲尼と云ひ紀元前五百五十一年を以て魯に生る、父を叔梁紇と云ふ、孔子兒たりし時嬉戯するに常に俎豆を陳れて禮容を設け長じて季氏の吏となりしが料量平かなりし周に適ひて禮を老子に問ひ、反りて弟子益々進む定公之を用ひて大司寇となしそれより登用して相の事を攝行せしむ、魯國大に治り齊人恐れて女樂を遣りて之を沮む孔子遂に魯を去り、之れより四方に流寓して具さに艱苦を嘗め、至る處る仁義を説き七十三歳の長齡を以て逝けり、孔子は聖人なり一代の間其の説く處る仁義を以て衆徳の宗とし恕を以て仁を求むるの方とし、詩書禮樂を以て徳を養ふの具とし常に曰く修身治國は其の道を二にせずと孔子周室の日々微弱に赴くを慨し列國を周遊して斯道を説きしも時勢然らしめざる所ろにや諸侯敢て容るゝ者なかりしかば終に故國に歸りて古典を修整し、又魯の史記春秋を筆削し遂に紀元前四百七十九年を以て卒しぬ、論

語は孔子の談論せし所ろを後人の輯録せしものなり弟子三千餘人ありて就中顔回尤も賢なりしといふ

四二 孔子の道統を擧げよ

答 孔子の孫に子思あり中庸を著はし、其の門より孟軻出で、孟子を撰び共に孔子を祖述し荀子の著者荀卿の説も又等しく孔子より出でしと雖も荀卿は孟軻に反して性惡説を唱へたり、後世儒學に入るもの詩、書、易、禮、春秋を五經と稱し、大學、中庸、論語、孟子を四書と稱し、四書、五經を以て聖典と稱せり

四三 老莊の説は如何

答 孔子と時を同ふして楚に老聃あり孔子の先王の道に由りて儒道を大成せるに反し無爲自然を勸めて道徳を禮義の外に求めんとし老子二篇を著はして異説の端を開けり次で莊周、列禦寇出で、各書を著はして老子を祖述す、後世老子の説は黄帝に本けりとして或は黃老の道とも云ひ之を率奉する者を道家と稱し儒家之相對して先秦學術の偉觀たり

四四 楊墨以下諸流の梗概を擧げよ

答 楊家は楊宋を祖として自愛を説き、墨家は墨翟を祖として兼愛節用を唱へ孫武、吳

超は兵法を論じて孫子吳子を著し、公孫龍は詭辨を弄し、鬼谷子は縦横家の祖にして陰謀權術を説き、法家は李悝を祖とし申不害商鞅、韓非の徒之に次げり、李悝は諸國の刑書を蒐めて法經を作り商鞅は之を傳へて法を律と改め、韓非は申商の意を併取して又自家の特説を述ぶ、蓋し戰國の世儒家の禮樂實際に用ゆる處なく却て慘刻深峭の刑法世に行はれたるが如し

四五 周代の文藝を摘記せよ

【答】孔子一が春秋を刪定するや公羊、穀梁、左氏各其傳を編みしが左氏最も詳しく國策、國語の二書と併見して東周二百五十年間の事蹟を知るに足れり、又孟子の言は雄偉明快にして諸子に冠たり、眞に文那二千載文章家の摸範たるべきも稍迂腐の見あり、莊子が十餘萬言は率の寓言にして其文極めて奇變なり、韓非子は偽峭刻直にして事に迂ならず孫子の文辭は簡なりと雖も精絶にして格言多く單に兵法と云はんよりは人間處世の秘訣を道破したる書なり、又楚の屈原が詠せる離騷は悽惋にして悚々人を動かす處あり以て後世辭賦の祖となれり、總て是等先秦の鴻文と稱す、先秦諸子の書は皆支那文籍の精華にして後の學者皆誦讀講究せざるなく推稱して秦漢以上の文字となす

第三章

中古史

秦、漢、東漢、三國、南北朝、隋、

一、秦

一 秦、漢、及三國の代は支那歴史上に於て如何なる

時代なるや

【答】秦、漢、及び三國の代は漢人種が始めて支那の内地より出で、域外の諸民族を服征する時代にして其の年間凡四百八十年なり

二 秦、漢、及三國の帝業は如何

【答】秦は咸陽に都し、天下を統一せること僅かに十六年間なり、然れども其の天下を統一するに至れるは遠く其の祖孝公の時に由來せり孝公は東周戰國の時に既に天下併呑の基を開きたる人物なり。又漢は前後の兩漢ありて前漢は長安に都して西漢と云ひ其間は二百九年なり、後漢は洛陽に都して東漢と云ひ其間凡百九十六年なり、又三國は蜀、

魏、吳の三國にして同時に鼎立し其の年間凡四十有餘年なりき

三 秦、漢、三國の治術及び帝業亡滅の狀況を問ふ

【答】 秦は威力暴力を以て天下を取り威力を以て天下を治む、前漢は文武の兩道を兼ね尙ひ後漢は盛に節義の人士を出せり而して三國相互に攻伐して天下統一せざりき、又其帝業の亡びしは秦は民亂に依つて倒れ、前漢は外戚に因て亡び、後漢は宦官に因て衰微し、權臣政柄を把り其の累に因て滅び、三國の中蜀は魏に亡され、魏は其の權臣司馬氏に亡ぼさる司馬氏國を立て、晋と云ふ、吳は又是が爲めに亡されたり

四 秦の始皇帝の帝業を記せよ

【答】 秦王政の六國を兼併するや王を更めて皇帝と爲し、誣法を廢して自から始皇帝と號し以て二世三世より萬代に傳へんと欲し、李斯の謀を用ゐて始めて郡縣の制を布き、諸郡の衆富を國都咸陽に集め民間の兵器を沒收し阿房宮を造營し、又屢々巡行して封禪を行ふ等力めて朝廷の尊嚴を示して人心を威壓せんを圖れり、而して始皇帝は又北は蒙恬を遣はして匈奴を伐たしめ、南は南越を畧して南海、桂林、象郡の三郡を置きしかば秦の版圖は東北は陰山遼東より朝鮮に及び西南は臨洮より交趾に接し分ちて三十六郡を置けり、此の如く未曾有の廣大版圖なるのみならず、上代八百年間の封建制度を一朝に

變じて郡縣となす等非常の改革をなせしかば當時の學者は皆擧げて新政を誹謗するに至れり、茲に於て始皇は李斯の議を納れ、醫藥、占筮、種樹の書を除き餘は悉く人民所藏の書を集めて之を焚き又儒生四百六十餘人を坑殺したり

五 始皇帝の書を焚き儒を抗にせし所以は如何

【答】 始皇の三十四年に丞相李斯奏して曰く今日天下既に定まり法令一途に出で百姓は農工を力め士は法令を習へり、而るに諸生徒ら古を學びて今を誹り、黔首を惑亂し一令の出づれば各其學を以て之を議し群下を率ゐて謗議をなせり、請ふ史官の秦の記にあらざるものは皆之を焚かん、詩書を偶語するものは市棄せん、古を以て今を誹るものは族せん、若し法令を學ばんと欲するものあれば吏を以て師となさん而已と始皇制して曰く可なり是に於て書を焚き儒を坑にせり、

六 始皇帝の長城を築きし所以は如何

【答】 匈奴は蒙古地方に遊牧せる土耳其種の一派にして其性極めて慍悍なり、殷周の際に種裔嚴竣と稱し戰國の代には常に燕趙秦の三國の患をなせしかば趙は代より陰山に沿ふて高關に至るまで、燕は造陽より襄平に至る間に又秦は隴西より北地上郡の北境に各々長城を築きて之に備へたり、始皇も又謂へらく秦を亡すものは北胡ならんと、蒙恬を

て兵三十萬を率ゐて匈奴を伐たしめ、先づ河南を收め、長城を修築して臨洮より遼東に達し延袤萬餘里、秦威大に振ひぬ是を萬里の長城といふ

七 始皇帝の功業を記せよ

答 始皇帝の事業は甚だ廣大にして影響を後世に及ぼすこと至つて深大なり、其内最も重要なものを擧ぐれば左の如し

- 一 封建の制度を打破して郡縣の制度を建設せし事
- 二 天下の度量衡軌を一にせし事
- 三 匈奴の支那内地に在るものを驅逐せし事
- 四 萬里の長城を修築して支那北方の守備を嚴にせし事
- 五 周代より傳へ來れる道德的の官制を廢して純然たる政治的の官制を採用せし事
- 六 天下の尊嚴を自覺して其の威權を高大にせし事

八 始皇帝の遺せし罪過とは如何

答 始皇帝の爲したる功業は規模雄大眞に後世を驚かすに足るものなきにあらざる然れども同時に又其の罪過も尠からざりし、まづ其重なるものは學者の政論を禁じて儒生を坑にせし事、天下の書籍を焚きし事、人民を治むるに道德に因らずして専ら刑法に因りし事

天下統一の功業に夸らんとして屢々巡遊封禪をなせし事、非常の土木を起せし事賦歛を重くし徭役已む時なからしめたる事等なり、要するに始皇帝の政治は其當時の人民に取りては苛酷殘忍なりしかば陳勝吳廣はまづ兵を斬に起し、次で各地の群雄相踵きて蜂起し王號を僭する者數人に下らざりしなり

九 秦の滅亡せる端緒は如何

答 始皇帝薨じて少子胡亥立つ之を二世皇帝といふ、其立つを得しは宦官趙高の奸策に由る、二世皇帝宰相李斯を疎んじ趙高を信じ、淫樂に耽りて政事を顧みず、朝政大に亂れ刑罰益々嚴なりしかば陳勝吳廣はまづ兵を斬に起し、次で各地の群雄相踵きて蜂起し王號を僭する者數人に下らざりしなり

一〇 陳勝吳廣の兵を起せし顛末を記せよ

答 二世皇帝宦者趙高の言を聽き法を嚴にし、刑を刻にし妄りに宗族大臣を殺し、暴戾恣睢至らざる所なし是に於て内外怨望し、四海騷然たり、咸陽の人陳勝嘗て人の爲めに傭畊す、耕を輟めて壟上に之を悵然として曰く苟も富貴ならは相忘るゝ事なけん傭者笑て曰く、汝人の爲めに傭耕す奚ぞ富貴なる事を得んぞ勝大息して曰く嗟呼燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんや、遂に吳廣と兵を斬に起す、時に勝廣の二人屯兵の長となり閭左を發して漁陽に戍せんと欲す、大雨に遭ふて道通せず、乃ち徒屬を集め謂つて曰く公等

期を失す、法斬に當れり、壯士死せざれば即ち止む、死せば即ち大名を擧げん。王侯將相寧ろ種あらんや。衆皆之に従ふ、即ち詐はりて公子扶蘇項燕を稱し、大楚を號せり、是に於て勝自立して將軍となり、廣都尉となる、諸郡縣の秦の苛政に苦しめるもの争ひ起りて長吏を殺し、以て勝に應ぜり、勝後ち其の御者莊賈の爲に殺されて其衆散ぜり

一一 秦末の紛亂を畧記せよ

陳勝吳廣に次で兵を起せしものに項梁及其姪項籍あり、兵を吳に擧げ、江を渡りて西進し、沛の人劉邦の兵を加へ范增の計を用ゐて楚の懷王の孫心を立て、懷王とし、都を盱眙に定めたり、是れ蓋し昔時懷王秦に客死して天下皆同情を表するを以てなり、秦の將に章邯あり能く兵を用ゐ、各地に轉戦して反亂を平け、項梁を破殺して進んで鉅鹿を圍みしかば項籍は懷王の命を奉じ大に秦軍を鉅鹿に戦ひ章邯を降して悉く河北の地を定めぬ、此間劉邦は懷王の命を受けて直ちに秦を衝かんを欲し連に今の河南の各地を陥れて西せしかば趙高は誅を恐れて二世皇帝を弑し帝の姪子嬰を立てしと雖も幾くもなくして却て子嬰の爲めに族せられぬ、已にして劉邦は秦軍を峽關に破り霸水の上に到りしかば子嬰は面縛して降を請ひ、秦は亡びぬ、時に紀元前二百〇六年なりき

一二 項羽の霸王となりし次第を問ふ

初め懷王諸將に約すらく先づ關中（東は函谷關より西は隴關に至るの間の地を總稱して關中と云ふ）を定むるものは之に王たるべしと因て劉邦は兵を遣はして函谷關を守り又悉く秦の苛法を除きて大に民心を收めたり、項羽は河北の地を定めて後函谷關を破りて劉邦と鴻門に會し次で咸陽に進み、横行を極めて東に歸り懷王を都に徙し陽に尊みて義帝となし後遂に之を弑しぬ而して項羽は自ら立ちて西楚の霸王を號し彭城に都して今の江蘇全部及び之に接近せる山東河南安徽の地を領し、劉邦を立て、漢王となし、巴蜀、漢中を與へ、又秦の降將三人を關中に封じて漢の路を塞がしめ、其他諸侯王を封ずる各々差ありき。

一三 漢楚の分争を記せよ

項羽既に懷王の約に背ひて自から立ちて霸王となる劉邦怒つて兵を擧げ之を戰はんとせしが、賢臣蕭何の諫を納れて國に就き、蕭何を擧げて丞相となし韓信を大將とし、張良を帷幕の臣として密に天下を圖れり、已にして楚將の王たるを得ざるを怒りて齊都臨淄に叛するものあり、項羽兵を率ゐて之を征討せんとして發せしかば、劉邦は時機到來せりと先づ關中を畧して洛陽に入り、遂に彭城を陥れて之に據る、項羽報を得て軍を旋へし彭城を復して大に漢軍を破り逃ぐるを追ふて滎陽を圍めり、此時に當り漢將韓信は西魏の各地を定め、將に東は齊を撃ち、南は楚の糧道を絶たんとし、九江、王贛布

は楚に背き楚の老臣范増は項羽を去り劉邦は一旦滎陽を遁れて黄河を渡りしも亦還りて廣武山に軍せり、次で項羽は兵食の乏しきを患ひ中國を二分し、鴻溝以西を漢と爲し以東を楚と爲すを約し兵を罷めて東に歸りしが劉邦の追撃を被りて垓下に圍まれ、遂に烏江に到りて自刎して死せり時に紀元前二百〇二年なりき

一四 秦末大亂の二首領を略記せよ (項羽と劉邦)

秦末に於ける亂民の諸首領中殊に拔で、大なるもの項籍及び劉邦あり、籍は楚の人字は羽、楚の下相の人なり季父項梁曾て人を殺し、籍は仇を避けて吳中に居る、籍少き時書を學びて成らず、去りて劍を學ぶも亦成ならず、梁之を怒る、籍曰く書は以て姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵なり學ぶに足らず、萬人の敵を學ばんこ梁乃ち籍に兵法を授く、籍大に喜び、畧々其の意を知るも又肯て深く究めず、秦の始皇帝會稽に遊して浙水を渡る時、梁籍と共に之を觀る、籍の曰く彼れ取りて代るべきなりと、梁其口を掩ふて曰く、妄言する勿れ事露はるれば族せられん、梁之に於て甚だ籍を奇せり籍身の丈八尺餘、力能く鼎を昂げ、才氣人に過ぐ、秦の二世元年梁會稽の守を殺し、其の印綬を佩び遂に吳中に兵を擧げ八千人を得たり籍其の裨將たりし時に年二十四、沛公劉邦は沛の人少にして大志あり家人の生産を事させず壯なるに及んで泗上の亭長となり。曾て咸陽に縣役して秦皇帝の遺簿を縱觀し、自から語りて曰く嗟呼大丈夫當るに

此の如くなるべしと後秦政亂れ天下の豪傑並び起るに及び縣の爲めに徒を驪山に送りしに徒多く道より逃ぐ、邦謂へらく驪山に達する頃悉く之を亡はんと、一夜大に飲み乃ち送る處ろの徒を解縱して曰く公等皆去れ、吾も又是より遁れんと、時に徒中の壯士從はんこ乞ふ者十餘人、依て夜半澤中を過ぐ、時に大蛇あり、徑に當る、劍を抜き之を斫つて過ぐ、衆皆其勇を稱し以て前途の祥瑞となし是より從ふ者日に益々畏敬す、

一五 鴻門の會の光景は如何

劉邦既に秦を破りて關中に入り兵士に命じて關門を守らしむ、項羽尋て諸侯の兵を率ゐて關門に至る入る能はず乃ち大に怒り之を攻め敗り進んで戲に至り明朝劉邦を撃たんとす、時に羽が兵四十萬鴻門に陣し、邦の兵十萬霸上に軍せり、羽の老臣范増の曰く沛公の山東に居るや財を貪り色を好み、今關中に入るを見るに財物取る處なく婦女幸する處なし、是れ其志小ならざるなり急に撃ちて失ふ勿れと、事直ちに劉邦の聞く處るとなり、帷幄の臣張良をして羽の季父項伯に説き甘言を以て羽を欺き、明日自ら鴻門に至り謝して曰く、臣將軍と力を併せて秦を攻め俱に患難を與にせり然るに意はざりき今小人の言を以て臣と將軍と隙あらしめん、羽乃ち沛公を止めて與に飲す、范増數々羽に目して劉を殺さん事を告ぐ、羽應せず増出で項莊をして入らしめ、壽を爲して劍を以て舞はしめ因りて劉を撃たんとす項伯其色を察し亦劍を抜き起て舞ひ常に身を以て劉を

翼蔽し莊をして撃たしめず張良事の急なるを見て出で、樊噲に告ぐ噲盾を擁して直ちに入り目を噴らして羽を視る、目皆悉く裂く、羽の曰く壯士なり之に卮酒を賜へこ、則ち斗卮酒を與ふ之に彘肩を賜へこ即ち生彘肩を與ふ、噲立所に之を飲み劍を抜いて肉を斫り切りて之を啖ふ羽が曰く能く復た飲まんか噲が曰く臣死だも猶且つ避けず況んや斗酒をや、沛公先づ秦を破り咸陽に入り勞苦して功高き事此の如し而るに將軍却て小人の言を聞き有功の人を誅せんこす此れ亡秦の續のみ切に將軍の爲めに取らざる處なりこ羽が曰く坐せよこ噲、良に従つて坐す、少傾にして劉起ちて厨に行き噲を招きて與に俱に間行し霸上の軍に趨る。

一六 垓下の役とは何ぞ

劉邦項羽を逐ふて固陵に至る、羽垓下に至りしに兵少く食盡きて又如何ともすべからざるに至る、韓信等はれに乗じて攻撃増々急なり、羽破れて壁に入る之を圍む事數重羽此夜漢軍の四面楚歌するを聞き大に驚て曰く漢已に楚を得たるか、何ぞ楚人の多きやこ起つて帳中に飲し、虞美人に命じて舞はしむ、悲歌慷慨涙數々下る。左右又皆泣く、敢て仰き視るものなし、羽即ち夜八百騎を從へて圍を潰して南に出で淮を渡らんとして道に迷ひ遂に大澤中に陥れり、漢兵追撃す、羽遁れて東城に至りしに餘兵僅かに二十八騎となる、羽其騎に謂て曰く、吾兵を起してより八歳七十餘戰の多きに及べとも未だ曾

て敗れざるなり、而して今卒に此に困む、之れ天我を亡すなり、戰の罪にあらず是に於て東の方烏江を渡らんこ欲せしに亭長船を饋して待て曰く江東小なりこ雖も亦以て王たるに足れり、願はくば急に渡れこ、羽曰く藉蕪に江東の子弟八千人こ江を渡りて西せり今一人の還るものなし假令江東の父兄我を憐んで王となすも、吾れ何の面目ありて復た面ゆる事を得んこ遂に自刎して死せり、項羽兵を起してより秦末の亂、項劉二氏の戰共通じて八年間なり。

一七 秦末の騷亂に現はれたる人物は如何

劉邦、項羽の外此の二首領の下に屬せし著名の人物は、曰く范增、項伯曰く蕭何、張良、韓信、陳平、酈食其、酈徹等はなり

二、漢

一八 漢室帝業の確立を記せよ

漢楚相争ふも五歳にして漢王劉邦遂に帝位に上り洛陽に都す、是を漢の高祖といふ、高祖其後都を長安に遷し、諸制多くは秦の舊に従ひしが深く秦の孤立に鑑みる處ありて封建郡縣の制を併用せり、即ち郡主を國守を各地に交錯せしめ又諸功臣を封するには

或は位次を高めて封戸を減じ、或は宗室同族を要地に分封して之を監視せしむる等川意頗る周到なりき。而して漢初異姓の諸侯として有名なる楚王韓臣、梁王彭越、淮南王黥布等の如き皆數年を出でずして或は廢せられ、或は誅せられ唯長沙の吳氏のみ久しく存するを得たり斯くて高祖の末年劉氏にして王たるもの九國に及び漢室は能く孤立の弊を免かれし難も未だ幾許ならずして諸王の跋扈を來し齊、代、吳、楚の四強國は各々數郡を有して東北に列峙し漢は僅かに十五郡を有するに過ぎざりき。

一九 高祖の用ゐし諸名臣の名を記せよ

答 漢の高祖は能く人傑を使用せり故に喜んで之が用をなせり、今其名を擧げん、先づ政事家には蕭何、曹參あり、謀略家には張良、陳平あり將軍には韓信、彭越、黥布あり勇士には樊噲、周勃、あり辨士には酈食其、隨何あり、就中蕭何、張良、韓信の三者を以て漢室創業の柱石とばなせり。

二〇 漢の初世に於ける匈奴の勢力は如何

答 匈奴は秦の末亂に乗じて漸く河南の地に侵入し來りしが冒頓單于出づるに及び東は蒙古種の東胡を滅し、西は西藏種の月氏を逐ひ、南は曩きに蒙恬が略せる地を悉く回復せり、時に中國は漢楚雄を争ひ、北顧の遑なかりしかば冒頓の勢力益々盛にして官職頗

る備はり、左右賢王、左右谷蠡王等を置き左部は穢貉、朝鮮に接し、右部は菴、氏に接し、而して單于の庭は代、雲中に直りき、漢初匈奴、馬邑を陥れ、更に南して晉陽に至しかば高祖は親ら軍に將として之を撃ちしも却て白登山に敵の重圍に陥り辛ふじて免かるゝを得たり其後匈奴數々漢を撃ちしかば高祖は遂に劉敬の策を用ゐ、宮人を公主と名けて單于に妻ばし歲毎に糒絮酒食を遣りて和親を結べり

二一 呂氏の難とは何ぞや

答 高祖の后を呂氏といふ、帝を微賤に起り患難を俱にせり是に依りて威權赫々將相大臣皆其駕御を受く、高祖崩じて孝惠帝立つ政府の大權全く呂后の手に在り既にして孝惠帝崩じて子なし太后宮人の子を取りて帝の子と稱し朝に臨みて政務を總攬す是に至り大に同姓を分封して王となし以て呂氏の根底を固む既にして帝を幽殺し其弟を立て、帝となし制を稱する故の如し后人となり雄斷果決頗る將相の畏服する處なる諸侯大臣敢て之に抗するものなし、后崩するに及び齊王主として兵を發し、諸侯に告げて呂氏を討つ既にして太尉周勃丞相陳平等と相謀りて諸呂を討し悉く呂氏を誅して代王を迎立す之を孝文帝とす

二二 孝文帝の治績を問ふ

【答】孝文帝は漢初の良王なり、漢の天下を鞏固にし民力を休養し漢の治績をして前後に炳燼するに至らしめたるもの全く帝の力に居る、帝は天縱聰明政務に練達し治術に熟巧せり其の内政に於ける務めて安寧を事とし、民をして實業を營ましめ、以て農事を誘導せしかば當時民力著るしく舒長して家々給人々足り後世能く及ぶなし、而して又意を刑律に用ぬ肉刑を廢し頗る前代の弊を洗除せり、且つ其の外交政略に於ける陸賈を遣はして南粵王を招降せしが唯匈奴に至つては民資未だ富まざるのみならず彼れが積年の餘威は容易に屈伏せしむる事能はざるの事情ありしかば暫く己れを屈して和を講し、將を擇み固く備へたり、斯の如く唯撫綏を以て施政の方針となし子孫に富庶の資を貽したり、他日武帝が遠略の雄圖蓋し此の孝文が豊富の後を受けしに由るなりと

二三 諸侯削弱の結果は如何

【答】漢の高祖が帝業を創めし際厚封して漢室の藩屏となしたる同族諸侯は其後年所を経るに隨ひて往々京師を凌ぐの風ありしかば文帝の時洛陽の人賈誼治安の策を奉りて諸侯の勢力を殺かん事を請へり文帝聞かず既にして文帝崩し惠帝代つて立つに至り晁錯なるものあり惠帝に建言して頗る諸侯を削るべきを説く帝遂に意を決して大に諸侯の領地を

削る、諸侯怒つて遂に反す即ち七國の亂なり

〇二四 七國の亂とは何ぞ

【答】惠帝晁錯の言を納れて諸侯の領地を削減するや吳王大に怒り、膠西、膠東、菑川、濟南、楚趙の六國與に兵を擧げて反せり其勢頗る猖獗にして抗すべからず是に於て周亞夫を大尉に任じ三十六將軍に將として往いて吳楚を討つ、而して朝議晁錯を非として斬罪に處し、父母妻子同産少長もなく皆棄市せらるる既にして周亞夫大に吳楚に克ちて諸侯皆平ぐ、亂後惠帝は諸侯王を京師に止めて其自治を許さず内史を派出して其の國を治めしが、子孝武徹の繼ぐに及び始めて年號を建て、建元と云ひ大に儒學を獎勵して人心の標準を一にし又推恩の令を下して諸侯王の子弟を分封するを許せしかば藩國の勢威自ら折れ王侯の稱ありと雖も郡縣の制全國に行れ漢民悉く一君の命に従ふに至れり

二五 漢の武帝の雄圖を記せよ

【答】漢の武帝は雄才大略あり外夷の屢々中國を煩はすを以て慨然として之を討平するの志あり蓋し漢室は文帝、惠帝以來勤儉の餘惠を受けて殷富なりしかば武帝は雄才大略の資を以て連年兵を用ゐて拓邊を務め、北は匈奴を征し、西は西域を服し南は南越甌閩を平げ、東は朝鮮を定め其の版圖の廣大なる前代未だ曾て有らざる所なりき、而かも晩年

心を政治に留め苛暴を禁して本農を力め又よく儒を愛せしかば董仲舒、孔安國、司馬遷（史記の撰者）等彬彬として輩出し經術文章粲然として見るべきものあり、史家の後世雄才を稱す、必らず先づ秦皇漢武を稱す、支那歴史三千歳中に傑出せる大人物なり

二六 武帝の外征は如何

是より先匈奴は屢々漢に寇し遂に上谷郡（直隸宣化府）に入りしかば武帝は衛青霍去病等の諸名將をして塞を出で之を撃退せしめ、河南の地を取りて朔方郡を置けり、是より單于（匈奴王）遠く遁れて漢南に王庭なきに至れり。武帝は匈奴を征する實に前後十五回に及び軍旅の多難前代に比なく後世の詩人をして漢代の外征難を歌はしむるに至れり

二七 南越の平定を記せよ

南越王趙佗孫胡の時に當り、閩越の勢強大きなり、或は南越を侵し或は東甌を攻め南越互に相争へり因て武帝は東甌を助けて閩越を伐ちしが閩越の其王を殺して罪を謝せしにより一旦之を許して新たに東越を立てたるも次で又南越を平げ遂に之を滅して其民を江淮の間に移したりき

二八 朝鮮の平定を記せよ

周の初め箕子朝鮮に封せられ子孫世々王險に都し四十代九百餘年を歴て箕準に至りしが時に燕人衛滿なる者衆を率ゐて亡命し來り遂に箕準を逐ひて自立して自ら朝鮮王となりぬ其孫右渠の時邊吏を殺せしかば爲めに楊僕等の征討を被り衛氏茲に亡び、全國を分ちて四郡となし爾後五十年間全く漢の版圖に歸せり。

二九 西域諸國との交通は如何

支那史に所謂西域とは今の新疆及び回疆伊犁地方なり、秦漢の際北に匈奴あり西北に月氏あり、又其西北に孫あり所謂西域三十六國是なり、匈奴の盛なるに當つて西月氏を撃ちて之を破る、月氏西に走る、茲に於て匈奴益々強盛其威西北に振ふ烏孫及西域の諸國皆其服屬する處りとなる、武帝兵を匈奴と交ゆるに及びて夙に西域諸國を招撫し以て匈奴の應援を絶たんと欲し是に於て張騫を遣はして西域に赴かしむ、悉匈奴の爲に捕へられ歸るを得ざるもの十餘年、其後間を得て逃れ歸り後再び西域諸國に使し西は波斯より南は印度に至りて歸れり是より西域始めて漢に通ずるに至る、武帝乃ち縁を烏孫に結び、車師（トルハン）に屯田を設け都護を置きて以て匈奴の威を遠けり是より西域の諸國大率漢に服屬し使聘の往來常に絶へずといふ。

三〇 孝宣帝の治績を問ふ

答 孝宣帝は武帝の曾孫なり、乃祖の如き雄才なしと雖も賢相良臣並び起りて之を扶け時運に乗じて能く兵を用ゐしかば内治の盛なる又前代無比の稱ありき、匈奴西域に向いても又國威を輝す事を得たりき。

三一 霍光の攝政は如何

答 武帝崩じて光昭帝繼ぐや霍光遺詔を受けて政を攝し専ら民力の休養を謀り又は兵を出して益州の亂を平げ樓蘭新王を擁立して國名を部善と改め烏桓を征して大に之を破りき、霍氏政柄を取る事二十餘年に及びしが霍光の卒後叛を謀りて誅滅せられたり

三二 蘇武の匈奴に使せし事實を擧げよ

答 武帝中郎將蘇武を以て使者となし匈奴に遣る、匈奴之を屈服せしめんを欲す武肯んせず因て之を大窖中に置き飯食を絶ちて之を苦しむ、武雪と旃毛とを齧み數日間死せざるを得たり、匈奴以て神となし武を北海上無人の地に徙し羝を牧はしめて曰く羝乳せば乃ち歸るを得せしめん、武野風を掘り、草實を取りて之を食ひ、起臥漢節を放たず時に孝陵降りて匈奴に在り、武に説て曰く人生は朝露の如し何ぞ自ら苦しむ事此の如きや

〇三三 漢末宦官の跋扈せし状態を記せよ

と、陵と衛律は共に匈奴に降りて富貴なると此如しと、武終に肯んぜず之を久ふして漢の使者匈奴に至り蘇武等を求む匈奴詐りて曰く武已に死せりと後漢の使者亦至る、時に常惠なる者又降りて匈奴に在りしが密かに漢使に見へ使へて曰く、天下上林苑中に射て雁を獲たり、足に帛書あり、云ふ武大澤の中に在り、漢使匈奴に遣ひ常惠の教へし如くに言ひしに匈奴隱す事能はず武をして歸る事を得せしむ、武匈奴に留まる事十九年、始め強壯を以て國を出でしが還るに及び鬚髮悉く白かりしといふ。

〇三四 漢末外戚の專横なりし状態は如何

答 漢室に於ける宦官專横の端を開きたるは實に宣帝の時に在り、宣帝の時宦者弘恭石顯の徒久しく樞機を掌る、宣帝薨じて孝元帝立つ弘恭等遂に政事に與り事大小みな顯によりて決せざるなし、百僚皆顯に倣事す、顯巧慧にして事に習へり、外は忠義を飾りて人主を逢迎し、内深賊を持して忠良を中傷す外戚史丹と相表裏し遂に之を危害す、之より宦官の威權日に熾にして宣帝中興の業是に至つて衰へり

答 成帝の時宦者勢力を失し外戚政を取るに至り后族王鳳大將軍となり頗る威權あり兄弟五人同時に關内侯に封せられ、世に之を五侯といふ、後王莽に至つて最も權勢あり百

官已を總て之に聽く孝平帝の時に至り安漢侯となり九錫を賜はり諸公王の上に位し遂に毒を進めて帝を弑し、宣帝の玄孫嬰を以て皇太子となし莽自ら攝に居り祚を踐み遂に篡奪して帝を稱するに至る

三六 王莽の新政は如何

答 王莽の位に即くや宗族を分封して列侯となし天下の田を收めて悉く王田となし以て井田の法を復し官名を易置し州郡を更定し又數々貨幣を改鑄し、其意蓋し虞周の古制に倣ひて人心を收攬せんとするに在りしかば法令煩多にして賦歛苛重なりしかば却て人心の動搖を招きぬ、又當時朝鮮半島の北部には扶餘の新に建てたる高句麗國あり、東北挹婁沃沮を攘ひ西北鮮卑と遼東の地に戦ひ國勢日に盛なりければ王莽は之に命じて匈奴を伐たしめんせしも其拒絕する所となり是に於て西域諸國は皆叛して匈奴に屬し都護を殺して漢と絶てり

三七 王莽の敗滅を記せよ

答 以上の如く王莽の内治外交は共に失敗に歸せしを以て所謂赤眉の賊の山東に起れるを初めとして群盜並び起り諸豪割據の勢力をなせり、時に漢の宗室劉秀兄弟は兵を春陵に擧げて傍近の叛徒を糾合し諸將と共に同族劉玄を擁立し王莽の軍と昆陽に戦ひて

大に之を破り遂に長安を陥れたり。

三八 劉秀の兵を起せし次第は如何

答 劉秀字は文叔、長州の定王發の後裔、南頓の令欽の子なり、先世侯に封ぜられ、南陽の白水郷を以て春陵となし宗族往々家せり、其生るゝや、嘉禾一莖に九穗の瑞あり、故に秀と名けたり、是れより先き、氣を望むものあり、春陵を望んで曰く、氣佳なる哉、鬱々葱々然たりと、王莽貨を改めて貨泉と曰ふ、人其字を以て白水の真人と爲せしが、劉秀竟ひに白水より起れり、隆準にして日角あり、尙書を受けて大義に通ず、嘗て蔡少公に過ぎる、少公圖讖を善くす、言ふ秀劉當きに天子となるべしと、或人曰く國師公劉秀と、秀戯れて曰く何に由りて僕にあらざるを知れりやと、王莽漢を篡ひ、新市平林の兵起るに及び南陽騒動す、宛人季通秀を迎へて兵を起す、秀が兄を演といふ、慷慨にして大節あり、常に憤然として社稷を復せんを欲し、平居家人の生産を事とせず、身を傾け産を破り、天下の英俊に交結す、是に至りて親客を分遣し、諸縣の兵を發し、演自ら春陵の子弟を發す、子弟皆恐懼して亡げ匿れ、曰く、伯升我を殺す、秀が縫衣大冠せるを見るに及び驚て曰く、謹厚なるもの又復た之を爲すかと、乃ち自ら安んず、乃ち賓客を部署し、諸師を招致す、新市平林、下江の兵皆來り會す、兵多くして統一する所なし、是に於て劉氏を立て、人望に従はんを欲す、下江の將士常績を立てんを欲せしに、新市平林

の將帥其の威名を憚り、遂に更姓を立つ、續を以て大司徒となし秀をば將軍となせり

三、西漢

三九 光武の中興を記せよ

王莽が漢祚を奪ふに當り四方の群雄蜂の如くに起る、時に劉秀は群雄中に秀挺して英武の材を具備し、新市平林の兵を率ゐて昆陽、定陽の諸郡を徇へ遂に莽が大兵を昆陽に擊破し、而して關中を定め其後鄧禹、馮異の良將を得て大に四方を經營し、王郎を邯鄲に攻めて之を斬り廣阿上谷の地方を定め銅馬の諸賊を征し河北を定め、尤來大槍の諸豪を征し燕趙を徇へ威名日に盛なり、是に於て遂に帝位に即南に即き光武皇帝と稱せり、是より赤眉を長安に攻めて之を降し張歩を齊に破りて之を畧し、其他隗囂公孫述等の諸豪を伐ちて隴蜀の地を平げ遂に大亂を戡定し漢室を中興す實に一生の英主と稱すべし。

四〇 昆陽の戦を擧げよ

劉秀の昆陽、定陽、鄆を徇へて皆是れを下すや、王莽之を聞き、王邑、王尋をして大兵を發して山東を平げしむ、且つ長人巨無霸を以て蝘尉となし、處豹犀象の騎を驅り、

以て兵勢を助け、百餘萬と號す、旌旗千里絶へず、諸將兵勢の甚だ盛んなるを見、皆走りて昆陽に入り、將さに散じ去らんせり、秀鄆、定陽に至り、悉く諸營の兵を發し、自ら歩騎千餘に將として前鋒となる、尋邑兵數千をして之と合戦せしむ、秀迎へうちて之を走らしめ、首を斬る事數十級なりし。諸將の曰く、劉將軍平生は小敵を見るも怯るに、今大敵に遭ふて甚だ勇めるは怪しむべし、と尋邑が兵退却す、諸部の兵共に之を見て進撃し、連りに克ちて前進し、一騎を以て敵の百に當る、尋で秀は敢死の兵三千人を撰み之を以て敵の中堅を衝く、尋邑の陣大に亂る、漢兵勝に乗じて之を破り遂に尋を昆陽に殺す、城中守るもの又亦鼓譟して出で、中外勢を合せて攻撃す、呼聲天地に震ひ莽が兵大に潰ゆ走る者相踐み、伏屍百餘里に狼藉たり、會々大雷風あり、屋瓦皆飛ぶ、雨の下ると注ぐが如し、虎豹皆戰栗し、濁川に溺死するもの萬を以て數ふ、關中之を聞いて震恐し、海内の豪傑響の如くに應じ皆莽が牧守を殺して自から將軍と牧し、漢の年號を用ゆもの旬月にして天下に遍れかりし。

四一 赤眉の賊を討平せし次第は如何

赤眉の賊は、瑯琊の樊崇等の率ゆる處ろの兵を言ふなり、何によりて赤眉といふやと云ふに、王莽の兵と混亂せん事を憂ひ、皆其の眉を朱にして區別し易からしめしを以てなり、樊崇等漢の宗室劉盆子を立て、帝となして、西の方長安を攻めしに、光武は

將軍鄧禹等が兵に命じて關中に入りて之を拒かしめしに、赤眉も亦入り來り、禹と共に戦ひて利あらず、徴されて京師に歸へり、馮異をして更に關中に入らしめらる、禹功なきを耻ぢ異を擁して共に赤眉を攻め大に回溪に戦ひて敗績せしが、異散卒を收めて壁を堅ふし、後赤眉と崤底に戦ひて大に之を破れり、是に於て光武馮異に璽書を賜賞して曰く始め翅を回溪に垂るゝと雖も終に能く翼を濕地に奪ふ、之を東隅に失して更らに桑榆に收むといふべしと、赤眉の餘衆東の方宜陽に向ひしも、光武の軍勢の盛んなるを見、敵する事能はざるを悟り、樊崇、劉盆子、丞相徐宣等を率ぬ、肉袒して降れり、光武軍馬を陳し、盆子の君臣に觀せしめ、謂ふて曰く、降を悔ゆるもなきを得んやと、宜叩頭して曰く、虎口を去り慈母に歸す、誠歡誠喜極りなすと、光武の曰く、卿は所謂鐵中の錐々庸中の狡々たるものなりと

四一 東漢の由來を問ふ

漢軍王莽を殺し、劉玄長安に都するに及び劉秀は馮異等を用ひて河北河南、燕趙の地を定めしめしか諸將に勸められて鄴に即位す、(鄴は今の直隸省趙州相輝縣の北なり)是を後漢の世祖光武帝といふ、帝尋て都を洛陽に遷しければ史に之を東漢と稱し長安に都せる前漢を西漢と稱して區別の便とせり、又帝即位以來王莽の諸政を改めて漢の舊に復し務めて外國との交渉を避け、大學を起して儒學を獎勵し又能く功臣を保全して海内の太平を致したり

の太平を致したり

四二 隴を得て蜀を望むとは如何なる事を曰ふや

光武四方の賊を征討して餘す處は唯隴蜀と公孫述との二人のみ、蜀は成器の人にして天水といふ所に據り西州の上將軍と稱せり、孫述は茂陵の人にて蜀に據りて帝と稱せり、蜀は馬援といふものに命じて蜀の成都に往きて公孫述の人となりを見せしめたりし時馬援歸りて報告して曰く公孫述は見識狹隘にして井底の蛙のみ、されば我公は意を東方に専らにするに如かずと、贊尋て又援に命じて書を洛陽の光武に致しむ、光武岸幘して自から出で迎へ笑ふて曰く卿は二帝の間に遊遊す、今卿を見るに人をして大に慚ぢしむと援頓首して曰く當今の事唯に君の臣を擇ぶのみにあらず、臣も又君を擇べり、臣公孫述と同縣なり、少ふして相善かりし而るに臣前きに蜀に至りしに陛戟して後ち臣を迎へたり(陛戟とは宮殿の陛下に衛兵を置いて警衛せしめたる事なり)然るに臣今遠く來る何ぞ刺客姦人にあらざるを知りて簡易なる事此の如くなるや(光武は馬援を迎ふるに公孫述との陛戟したるを反對にして洒々落落たる便服を以て迎へたり故に曰ふ)帝笑ふて曰く卿は刺客にあらず願ふに説客ならんのみと援の曰く天下反覆、名字を盜むもの數ふるに違あらず、今陛下を見るに恢廓大度、符を高祖に同ふす、乃ち帝王の自ら眞あるもを知るなりと、援歸りて蜀に謂ふて曰く帝才明勇畧、にして人の敵にあらず、且つ心を

閉き誠を見はし、隠伏する處なし、開達にして大節多し粗々高祖と同じ經學博覽、政治文辯、前世比する所るなしと、嘗曰く卿が謂ふ所の高帝とは如何ぞやと、援曰く如何なるなり、高帝は可もなく不可もなし、今光武は吏事を好み、動く事法度の如く又飲酒を喜ばずと驚揮びずして卿が言の如くんば却て勝れるに非ずやと、後遂に公孫述に臣たり、光武軍を進めて蜀を攻めしに蜀終に西域に奔り、窮蹙して憤死せり、子純下りて壠右悉く平げり、光武是に於て軍を蜀に移し公孫述を攻めんとして人に謂て曰く人は自ら足るさせざるを苦しむ、是れ此語の出所なり。

四四 後漢の西域と絶ちたる事情如何

西域諸國は王莽の時より匈奴に服屬せしが、其重斂に苦しみ、皆漢に屬して都護を置かれん事を請へり、然るに光武帝の邊端を啓くを厭ひて之を許さざりしに乘じ、莎車王賢は詐りて大都護を稱し、西域諸國を兼併せんとしてたりければ善善車師等十八國は各々質子を漢に遣はして再び都護を得んとを請ひしも成らず、而して莎車王の驕横は益々甚しかりしかば、車師鄯善等は已むを得ずして復匈奴に附隨したり。

四五 匈奴の分裂せし事情は如何

初め匈奴は漢の冷遇を怒りて屢々南侵せしが、其後凶歳ありて人畜多く死亡し且つ

烏桓の侵襲を蒙りて國勢大に衰へたり、呼韓耶の孫日逐王比の蒲奴單于と隙を生じ自立して南單于となり、漢に内附せしより匈奴は南北に分れ互に相攻伐して國勢愈々微なりしが、光武の南單于を西河郡の美稜（内蒙古鄂爾多斯左翼中旗の東南）に徙し、兵を派して之を護らしむるに及び、北匈奴も又使を遣はして和親を請へり

四六 班超が西域に使したる次第を問ふ

光武の子光明帝莊に至り北匈奴の叛服常ならざりしかば帝は耿秉竇固等をして涼州に屯せしめ、又班超をして西域に赴かしめぬ、蓋し武帝が西域に通じて匈奴の右臂を絶てる、策に倣へるなり、其後耿秉等北匈奴を撃ちてバルクル（甘肅省鎮西府の西北）に至り伊吾盧（甘肅省鎮西縣）の地を取りて屯田を置き次で車師を撃ちて其前後西部を平げ復都護及戊己校尉を置けり、此間班超は南道より先づ鄯善に達して匈奴と交を絶たしめ、千眞に到りて其王を降し又疏勒の王を更立せしかば諸國又質子を出し、西域又通ずるに至れり、然るに明帝の末年に當り、焉耆、龜茲の都護を殺し北匈奴の戊己校尉を圍みしかば孝章帝桓の位に即くに及び都護戊己校尉を廢したれども、班超のみは其請によりて之を召還せざりき。

四七 西域五十餘ヶ國の後漢に内屬したる時の形勢は如何

【答】光明帝の時北匈奴は西域諸國の爲めに侵寇されて全く衰耗したりしが孝和帝の代賓憲之を征して大勝を博すると二回鮮卑遂に其地に徙り據りて勢漸く盛なりき是より先き班超は西域平げんを欲し、上書して兵を請ひ、先づ疏勒の叛を定め次で干賓諸國の兵を發して焉耆大月氏を破り又部下甘英をして大秦（シリア近傍）に抵らしめんをせしかば、條支（チグリス河域）に到り遂に達するを得ずして歸りき是に於てや西域五十餘國は悉く質を納れて漢に内屬せしかば漢威又大に裏海の濱に振へり、然るに任尙代りて都護となるに及び邊境騷擾し孝安帝祐の時竟に都護を廢して西域を棄てたり。

四八 後漢の羅馬帝國に通せし事蹟を擧げよ

【答】後漢が西域諸國を内屬せしめたる時に當歐羅巴に於ては羅馬帝國の勢ひ盛大にして其の東境は亞細亞部のシリアを保有せり、此の如くして東西に於ける二大帝國の將に相接せんとして而かも未だ通する能はざるは安息國人の其の中間にありて之れが妨害を試むるに由れり、元來支那は絹の産地にして其名歐洲に高く、羅馬帝マルクス、アウリウスアントニウスは使節を派して路を南洋に取り日南（廣南）の徼外より漢に入らしめしさいふ是れ實に後漢光桓帝志の延熹九年にして西歷百六十六年に當れり、始め光武

の世、交趾の一女子亂を作せしが馬援の爲めに平げられ爾後百五十年間南越の故地は平穩無事なりし

四九 後漢の世尙勾麗との交通並に高句麗の事情は如何

【答】高句麗は地支那と接せしを以て其の交渉最も頻繁なりき、鄒牟王の子孺留王は都を國內城（現時の興京廳即ち懷仁縣の東）に定め漢と好を通ぜしが、孺留の孫太祖王宮に及び數々漢と地を争ひて互に勝敗あり是より先鄒牟王の少子溫祚は兄孺留王と和せず南に走りて慰禮城（忠清道稷山縣）に據り國を建て、百濟と號し、都を漢山に定め（京畿道廣州府）箕氏を亡して馬韓の地を定めたり、而して百濟と共に概ね三韓の故地を領せるものを新羅とし其始祖を朴赫居世とす、も辰韓の故地に起り金城（慶尙道慶州府）に都して弁韓を威服したり、時に紀元年五十七年なりき以上の三國即ち高句麗、百濟、新羅を亦三韓と稱せり

〇五〇 日本と朝鮮及び支那との交通の開始は如何

【答】日本と朝鮮との交通は國初より既に久しく垂仁帝は弁韓の故地に起れる大駕洛國に任那の名を賜へり、大駕洛國の始祖を首露王と言ひ今の慶尙道金海府に國し五伽耶とて同族の五小國を統率せしが、新羅と争ひて遂に日本に内屬するに至りしなり、而して日

本と支那との交通に倭人耶馬臺國（ヤマトの國）の名稱の漢書、後漢書の如き古史に見へ又光武帝の委奴國（筑前怡土郡）の使者に印綬を與へたることあるを以て其大概を想見すべきなり。

五一 後漢の世外戚宦官の専權なりし所以は如何

〔答〕 後漢和帝の時帝幼冲にして位に即きしが外戚竇黨なるもの皇后の兄を以て大將軍となり、事を用ゆ、父子兄弟並に卿相となり、族黨宮中に充滿せり、遂に逆謀あらんことを帝之を知り宦者鄭衆と議し兵を勅し迫りて自殺せしめ因て衆を率ひ以て大長秋となし、以て政に參せしむ、宦者の權を用ゆる是れより始まる、尋で孝順帝の時宦者定策の功を以て封ぜられて列侯となるもの十九人に至る、既にして梁冀后族を以て大將軍となり、兇恣いよく甚だしく遂に孝質帝を弑す、孝桓帝繼で立ち宦者單超等と謀りて兵を勅して冀が印綬を收め逼りて自殺せしめ其族少長もなく皆棄市す、宦官功を以て侯となるもの五人、是より宦官は益々盛んに生殺其の手に在り斯の如くして後漢の世は又前漢の轍を踏み、宦官外戚と相表裏して帝室を削弱せしめたり、因にいふ宦官は官中の奥向に仕ゆる宦人の稱なり。

〇五二 後漢の世黨人の獄とは如何なる事なりや

〔答〕 桓帝以來天下の政權宦官の掌握に歸せしより賢人名士進んで朝に容れられず、苟くも廉耻を知り名節を重んずるの士は刑餘の宦官に媚事するを以て終身の耻辱となし、是に於て李膺、范滂等を始めとして大學の諸生に至るまで相與に風勵して政論を持し隱然政黨の姿をなす、公卿以下其貶議を畏れざるはなし是に於て相率ひて荐りに宦官を抑損す、宦官冤を訴ふ帝皆之を罪に處す、陳蕃之を争ふ帝聽かず宦官却つて之を帝に譖し李膺等が大學の遊士を養ひ政黨をなして朝廷を誹謗し風俗を惑亂することを謂ふ帝大に怒り郡國に下だし黨人を逮捕し膺等を北寺の獄に下す、辭杜密、陳寔、范滂等二百餘人に連なる使者の追捕四方に出づ、蕃亦極諫す帝之を策免す朝廷震慄し敢て復た黨人の爲めに言ふものなし賈彪皇后の父竇武に訛て上疏して之を解く宦官も又却つて罪の己れに及ばん事を恐れ上に曰ふして黨人二百餘人を赦して田里に歸らしめ其名を三府に書して終身を禁錮せり、其後又靈帝の時、竇武大將軍となり陳蕃太傅となり天下の名賢を徵す、李膺、杜密等皆朝に列す天下太平想望す、是に於て與に議し、曹節王甫等を誅し、宦官を除かんことを謀る宦官の黨却て武等を收めて陳蕃を殺す、曹節有司を諷して諸鉤黨を奏せしめ、膺等を訟獄に下して老死す、黨人死するもの百人、其死徒癘死するもの介七百人、是に於て天下正義の士多く死滅す。

五三 董卓の篡奪を記せよ

【答】後漢の第十世靈帝崩じ子辨立つ、年尚幼冲なるを以て何太后朝に臨み、政を攝す、時に袁紹なるもの太后の兄何進に勸めて宦官を誅せしむ、太后未だ肯んせず紹畫策して四方の猛將を率ゐて京に向はしめ遂に將軍董卓の兵を召す、卓未だ至らずして進宦官の爲めに殺さる、紹兵を勸して諸宦官を捕へて少長さなく皆之を殺す凡そ二千人卓遂に辨を廢して孝獻帝を立つ、是に於て關東の州郡卓の不法を怒り兵を起して卓を討じ袁紹を推して盟主となす卓洛陽の宮室を焼き都を長安に遷す是時に當り長沙の大守孫堅兵を起し袁術と兵を合せて又卓を討つ、時に司徒王允なるものあり、呂布と結び謀りて卓を殺す、此時に當り、劉備は瑯郡に據り、孫策は富春に據り、袁紹は南陽に據り、袁術は冀、洲に據り各々相攻伐す既にして袁紹、袁術皆死して曹操、劉備、孫策の三傑各々精兵を擁して一方に雄視し、漢の天下是に於てか三分す之を三國の世といふ、光武が漢室を中興せしより是に至る十一世、百七十五年なり。

五、漢代の文化

五四 漢代の中央官制を擧げよ

【答】漢の三公九卿の制は大畧秦制に法れり、大司馬は兵事を主どり、大司徒は百僚を總

べ、大司空は大司徒を輔けぬ、是れ三公なり、太常寺は宗廟儀禮を掌り、光祿寺は宮殿掖門戸を掌り、衛尉寺は宮門屯衛兵を掌り、宗正寺は皇室を掌り、太僕寺は輿馬を掌り、大理寺は元と延尉と云ひて刑獄を掌り、鴻臚寺は賓客を掌り司農は園圃米穀を掌り太府寺は藏市を掌り、以上を九寺と稱し、九寺の卿を稱して九卿とば言へり、後漢に至り太傅一人を上公とし太尉、司徒、司空を三公と稱し、九卿を分設せしめたり。

五五 漢代の地方官制を擧げよ

【答】秦の始皇海内を分ちて三十六郡となし、郡毎に守尉監を置き守は民を治め尉は兵を掌り、監は監察を爲せり、漢は秦の滅亡に鑑み、封建と郡縣の制を混用したれども七國の叛後諸侯の勢衰へて武帝は新たに十二州を置き、洲毎に刺史を設けて郡主を總轄せしめたり。

五六 漢代の田制及税法を記せよ

【答】秦の商鞅井田の法を廢してより、貧富の懸隔甚だしく貧人は富人の田を耕して其收穫十分の五を地主に輸するに至りしかば、漢は創業以來頻りに税率を減せしと雖も徒らに富者を利するに過ぎりき、但し武帝の時は監稅緡錢の稅、舟車の稅、等の新たに制定せらるゝにありて、人民大に苦しめり、王莽漢祚を移すに及び周制に復したるも幾くも

なくして天下潰亂し、光武中興の業を成して漢初の制に復し以て三國に至れり。

五七 漢代の兵制を記せよ

【答】漢初の兵制は京師に南北軍あり、郡國に輕車、騎士、材官、樓船等の兵あり、地勢に隨ひて配置せらる、人民年二十三より六十五までを正卒とし、一年は京師に赴きて南軍の兵となり、一年は郡國に於て兵役に服し、餘は田里に歸住し、徵發を待ちて番上せり、武帝の代、北軍を八校に分ち羽林、期門の屬を置きて世襲の兵となし、又謫吏、謫民を以て兵に充てたりしが、後漢に至り、郡國の兵先づ廢れて京師の兵備之に次ぎ、錢穀を納れて南北軍の兵となるものあり、宦者の兵權を専らにするありて遂に漢室の衰亡を來せり

五八 漢代の貨幣制度は如何

【答】秦の時通貨二種あり、一は金貨にして其重さ十兩ありて價格二十兩なり、一は銅貨にして其重さ半兩ありて其價格も又半兩なりき、漢の世に至り文帝の時再び半兩を造りしが其重量四銖なりき、其後武帝の世に至り五銖錢を作る、後世此の錢を以て貨幣の本位となせり、武帝の世内は荐りに土木を起し、外は屢々外夷の征伐を事せしかば府帑空亡を告げ國用を辨する事能はず是に於て代用の紙幣を造れり、稱して皮幣といふ、皮

幣の外亦更らに三種の奇異なる代用貨幣を鑄造せり其一は圓形にして龍の文あり、其重さ八兩、一は方形にして馬の文あり其重さ六兩、又一は方形にして龜甲の文あり、其重さ前者は輕るし、王莽漢祚を移すに及び錯刀、契刀を鑄造す、後故ありて之を廢し金銀、龜介、錢布の新貨を造れり、總て二十八兩稱して寶貨六錢と謂ふ、光武の中興に及び馬援の説を用ゐ、再び五銖錢を發行す、其後靈帝の中平三年四出文錢を鑄造す三國の時に至り、魏の時に至り魏の文帝五銖錢を鑄造し劉備直百五銖を鑄る、其後孫權大貨五百銖を鑄る

五九 漢代の衣食住は如何なりし

【答】衣服は其制を明かにせず雖も上代の如く上下貴賤の別秩然として序ありしことなきが如し、然れども祭服の如きは畧一定の制ありて亦華美を極めしが如し、秦の時祭服は衮を以てし、冕旒は前後途延を用ゐ、漢秦の故を襲ふて更革する所るなし、然れども六冕の制を改め衮冠絳衣を用ひたり、後漢の世に及び天子の冕は前後旒眞白玉珠を用ゐたりしも三國の世に至り明帝代るに珊瑚珠を以てせり
又食物の調理は上代に比して進歩せし雖も秦漢以來牧畜の衰へしより肉食の風も亦從つて衰へしが如し、酒類は一般に改良を加へ竹葉、青狀、元紅の如き當時尤も美醜なるものとす、葡萄酒の如きも亦武帝の西域の交通開けしより漢土に於て之を用ゆるに至れり

と云ふ、茶は上代既に用られ秦漢以來益流行を極むるに至れり。又建築の術は秦漢以來頗る進歩し、住居の如き最も發達するに至れり、當時瓦の如き既に發明せられ有名なる萬里の長城の如き皆之より構造られし其堅牢なる儼然として今に存在す、其佗上林苑の朝宮阿房の前殿の如き規模の宏壯なる以て天下の奇觀とするに足れり、其後武帝の時亦盛んに土木を興し、宮殿の美麗なる亦古今に冠絶す其後三國の時魏の武帝銅雀臺を作る、金を鑄め、石を刻す、殿廊燦然として瑤瑰日に輝けりといふ、斯の如く朝廷の宮殿官吏の邸宅は一般に美を盡したれども庶人の家屋は白茅を以て屋を葺き門牆の如きも大率荆竹を以て之修造せりといふ

六〇 漢代の儒學を記せよ

〔答〕 漢初以來黄老の學漸く行はれ儒學獨り振はす、孝武帝の時董仲舒なるものあり上書して大學を興し、天下の士を養ひ、六藝の科、孔子の術にあらざるものは悉く其學を絶つを請へり、武帝其の言を納れ大學を再興し、五教博士の官を設け詩書、易禮、春秋の教授を掌せらしむ、又吏民の儒術に習ふものを徵し博士の弟子五十人を置き以て官に任せしめたり、吏一藝に通ずるものを撰び以て右職に輔す、是より官吏に任用する一に儒學を以て策試し爾來因襲今日に至りて衰へず、蓋し儒學を一定するは後來支那開化に至大の影響を及ぼせしもの遂に學術の競争力を制止し人心をして一方に偏着せしめ

是より儒學孤立して更に發明する所あるを見ず是漢以來の文化と漢以後の文化と大に其性質を異にする處以なり、其後東漢の世に至り、儒學は益々偏固に流れ馬融鄭玄の輩ありと雖も訓詁、註疏の間に止まりて句を摘み章を尋ねるに過ぎず、其能く斬新の説を出し發明する所あるもの蓋し稀れなり

六一 漢代學風の變動を記せよ

〔答〕 漢初以來黄老の學獨り盛なりしが、武帝の董舒の策を用ゐて大學を起し、五經博士を設け、吏民儒術に習ふものを徵せしより儒學漸く勃興し、爾來今日に至るまで官吏の任用は一に儒學を以て策試するとなれり、王莽は辟雍を起し、光武は五經博士を置き大學を修め次で明帝も又篤く儒學を獎勵したりしかば匈奴の子弟にして遠く洛陽に遊學するものあるに至れり、紀元第二世紀の半頃には遊學増盛して三萬餘人に上りしといふ。

六二 漢代儒學の道統を記せよ

〔答〕 戦國の時儒學既に數家に岐れ、一經を專攻して皆自ら孔子の遺志を得たりとせしが、漢起りてより諸儒この得る處を傳へ、師徒相授受して以て守舊拘古の弊を來しぬ即ち詩には、魯、齊、韓、毛の四家あり、田何の易は分れて施、孟、梁丘の三氏となり、

又別に京費兩民の易あり、伏勝の尙書は分れて歐陽、大、小夏侯氏となり、孔安國は別に古文尙書を傳へ、高堂の禮は后氏に傳へり、后氏は分れて慶氏、大、小戴氏となり又春秋には公羊傳、穀梁傳左氏傳ありき。

六三 漢代典籍を問ふ

答 秦火以來支那の學術は一時世上に跡を絶せしも漢の世に至り挾書の禁を解きてより先秦の學術漸く頭角を顯はすに至れり、孝武帝の世に至り大學を再興し、大に學士を養成せり、帝の兄獻王頗る古學を好み、金帛を以て遺書を搜索せりしが降つて成帝の世に至り、劉向に命じて書籍目錄を編輯せしむ所謂七畧なるものは是れなり先秦の書籍今に存するもの實に漢の遺徳といへし、是より學者漸く輩出し、孔安國の尙書傳、劉向の新書、司馬遷の史記、班固の漢書等の傑著あるに至れり、是より先き秦の蒙恬は毛筆の制を精し、後漢の蔡倫は樹皮幣布を用ゐて紙を造り、楷、行、草の三體は紀元前一世紀の牛頓を以て作り長く常用の書となれり。

六四 支那に於ける歴史學の開創者を問ふ

答 漢以前既に歴史學ありしと雖も、是れ唯經術的に人事を叙述するに過ぎざりし、而して其初めて眞成なる歴史學を開創せるものは實に漢の司馬遷に在り、司馬遷奇才あり四

方を周遊し、武帝の時史記を作る、上は黃帝より下は漢の景帝に至るまで十二本記、十表、八書、三十世家、七十列傳、凡そ百三十篇あり、文簡にして勁拔、疎にして超逸、頗る論するに足るのみならず、叙事明晰にして凡そ上古二千年間の歴史、炳然として見るべく實に支那に於ける史學の鼻祖となすに足るべし。司馬遷の後、東漢の世に至り班固なるものあり、史記に繼で前漢書を著はす、其の軀裁頗る史記の故を襲へり、班固書を著はす未だ成らず、罪ありて、獄に投ぜらる、妹昭文才あり、繼で之を成す、後世史を談するもの司馬遷班固の二氏を推すといふ、其後史を編するもの大率二氏を摸倣せるが故に是より一種支那流の歴史を生ずるに至れり。

六五 漢代の詩賦學を記せよ

答 支那は太古より音樂の發達に伴ひ詩賦の發達せしを見る、然れども上代に行はれたるものは後代のものと異なり、俚しく韻字を用ゐしと雖も其字句は一定せず、或は四言なるあり、或は五言なるあり、戰國の際更に一種の新体起れり、之を楚辭といふ、然れども楚の土音を其中に含有せるを以て一般に行はるゝに至らざりければ此類の今日に存するもの甚だ少く、漢に至り又新体の詩を生ぜり、五言古詩、七言古詩と稱するもの是なり、是等は字句皆五言、或は七言に限りたり、而して古詩の今日に存するもの合せて十九詩、五言古詩は香陵が蘇武の事を咏ぜしを以て最も古しとす、七言古詩は柏梁祖の

詩を以て最も古しとす、共に漢の武帝の時の詩なり、古詩に繼で此時代に創まりたるもの之を賦とす、賦は韻を有せざるも其字句一定し往々四六相對するを常とす、當時鄒陽枚乘、司馬相如の徒其最も巧妙を極めたるものにして後來是を以て四六駢儷の鼻祖となせり。

六六 漢代の音楽は如何

支那に於て漢以前に行はれたる音楽は、黄帝の時印度より傳來せるものにして漢以後に行はれたるものは第二の傳來に基けり、武帝の時張翥の印度に至るや、歸るに及びて樂曲を齎らせしといふ、張翥歸朝の後幾ばくもなく武帝樂府を置きて大に音樂の振興を謀りたりといふ、支那の音樂實に是を以て中興とす、且つ樂器の如きも其製愈々巧みに琴瑟、琵琶楚の如き頗る精巧を極めたりといふ、而して司馬相如が綠綺琴、蔡是が焦桐琴の如き其最も著明なるものにして其他部曲の製作も亦從つて起り昭君怨の曲の如き頗る後世人口に膾炙する所たり。

六七 漢代に於ける書畫を記せよ

漢代は文字に變動を生じ且つ美術的の傾向を生ずるに至れり、秦の時李斯籀文を増益して小篆を作くる、其後獄吏、程邈なるもの隸書を作る、降りて漢の世に至り元帝の時上谷の王次中なるもの始めて八分を作り、史遊なるもの草書を作れり、楷書の始まりたるも又此の時代にして爾來楷行草の三体長く日用の文字となる、王莽の時甄鄒なるもの古文を改定し始めて六書の別あり、其後東漢の世に及び曹喜なるもの篆書を能くするを以て名あり、其後蔡邕あり飛白を始む、邕の女、蔡淡なるもの父に繼で亦書名あり其後崔瑗、崔寔、羅叔京、趙元嗣、張芝の徒あり皆書を能くするを以て著はる、而して張芝は最も草書に絶妙なり世に是を草聖と稱せり、其門に田彦和、梁孔達等あり皆能書を以て著はる其後劉德昇あり行書を以て名あり、三國の時には魏の文帝最も書を能くせり、而して畫は上古より既に行はれしが故に中古の時代に至りても又必らず功妙なる畫手も出でしなるべくも惜むらくは記録の傳はるものなし、

六八 漢代の織緯學とは何ぞ

織緯學とは一種の陰陽學にして後漢の成帝の頃より甘忠可、夏加良等の徒始めて之を作り、王莽の時に至りては既に完全なる圖織書の著ありし、王莽殊に之を尙びしかば時人其旨を希ひ争つて織文を上つりしといふ、後漢の始め蔡の少公亦此の學を以て名あり、蓋し此等の學たる上代より既に其端を開き、其の説く處るは皆は筮に類し、我未來紀の如きものなり、光武帝位に即くに及び深く又圖織の學を信じ、人才を登用し、議論を裁決する皆圖織の學に因る、是れより此學大に世に行はれ、儒學と相徑緯して名けて七緯と

いふ、後來支那に改命ある毎に野心ある英雄の輩是を以て民心を籠絡するの具となし、自己に利益ある圖織を作るものあるに至れり。

〇六九 漢代に於ける宗教の梗概を擧げよ

答 漢代に於ける宗教は佛教と道教なり（佛教東漸の事は後章に詳かなり）佛教は秦の時代に於て既に漢土に知られたり、當時秦の始皇が捕へたる沙門室利房なるものは實に佛教の傳道者ならんといふ、其後前漢光武帝の世霍去病の匈奴を討つや一木像を携帯せりといふ、蓋し佛像なり、其後趙桓の印度に於て歸るや印度（當時天竺と稱す）に淨居の教ありと奏せり、以て佛教の中國に知れたる由來の久しきを見るべし、傳へいふ後漢の明帝夢に金人其身の長一丈六尺なるもの頸に日輪を掛けて空中を飛行し、宮殿の前に止まり中庭爲めに晝の如くなりしと、既にして覺めて群臣を召集し、告ぐるに其事を以てす、傳説なるもの答へて曰く周の成王の時西域聖人を生ず、其名を佛といふ、其容貌陛下の夢みたる金人に似たりと明帝之を奇とし蔡愔を遣はして天竺に行かしめ書及び沙門架葉騰竺法蘭等を携へて歸る、明帝大に喜び白馬寺を洛陽に建立し大に佛法を信ぜり、其後桓帝又大に佛を信じ三國の時に至り魏の二國又大に之を信奉せりといふ、次に道教は道學の哲理を基礎として立てる一種の宗教にして種々の儀式禮法を備へたり、戰國の末に至りて始まれるものにして當時道教を奉ずるの士は之を道士と稱せり、

秦の始皇大に之を信じ方士除市の爲めに欺かれ、蓬萊方丈瀛洲の仙人及び不死の藥を求めんとせり、漢以來道士の神の仙説を唱ふるもの漸く多く武帝又大に其説を信じ方士を遣はして蓬萊の安期生が屬を求めしめたり、是より海上の燕齊迂怪の士争ひ來りて神仙の事を言ふ、是に於て四方を巡遊し至る所を祠祀を崇び、或は宮觀を興すこと概ね虚説なく、當時方士の寵遇頗る厚く、列侯に封ぜらるものさいあるに至れり、然れども武帝の後漸く衰へ以て五代の世に至れり。

七〇 支那中古に發明せられたる著明の事物を擧げよ

答 支那の發明にして最も著明の事物なるものは火藥の創造にあり、支那にては歴山帝の印度を征服せし以前に於て既に火藥の使用ありしと歐洲の歴史家は言へり。是れ紀元前三百二十七年にして周の顯王四十二年に該當す、故に火藥の發明は秦以前に在りしならん秦漢以來軍事上火藥を應用する事稍く滋く三國の際には諸葛孔明は之を用ゐて屢々奇計を出せりといふ、又石炭は三國の末既に發明せられ南北の時代は民間盛に之を應用して燃料に供せりといふ、毛筆の如きは秦以前に於て既に發明せられ、其後始皇の時蒙恬北邊に赴き中山の兔毛を得て毛筆の製を改良せしといふ、其後後漢の世宦官蔡倫なるもの楮紙を製する事を創め、是より文書の便益開くるに至れり民間使用の器具も秦漢以來發明せられたるもの漸く多く、水車の如きも魏の時代より行はれ、其他碁及び奕棋の

類も秦漢以前既に行はれ、又鞦韆の如き運動遊戯の具も實に漢の武帝の時より生まれり
さいふ。

六、三 國

七一 後漢の末路を畧記せよ

答 後漢の末路は外戚と宦官との軋轢を以て充てり、外戚は東漢の中世より漸く政に與
りしが其後皇統屢々絶へて政權女主に歸し、外より立つもの五帝、朝に臨むもの六后に及
び、皆事を父兄に委れ、幼孩を擁して其の權を専らにし又宦官は光武帝以來中常侍に任
用せられ常に機密の文書の傳達を掌りて漸く勢を得しが宦者鄭衆の孝和帝を助けて外
戚竇氏を除き、孫程の外戚閹氏を斥けて孝順帝保を擁立し、單超の孝桓帝を助けて外戚
梁氏を滅せし等の功ありしが爲めに權威益々重く天下の政治は皆擧げて宦官の手に歸し
是に於て名節を重んずるの士隱然政黨の姿を爲して朝政を誹議し相率ゐて存りに宦官を
抑損せしかば宦者は怒つて帝に上書し清流の士二百餘人を獄に下したり、是れ漢末黨人
獄の端緒にして其後靈帝の世陳蕃なるもの大傅となりて又宦者を除かんせしが謀事洩
れ却つて宦者の爲めに禍せられ、黨人の獄に下るもの六七百人爲めに刑死せしもの百餘
人に上る後漢の政權は全く是等宦官の爲めに紊亂せられぬ

〇七二 黄巾の賊とは如何なるものぞ

答 靈帝の時鉅鹿の張角なるもの妖術を以て衆を教授す、太平道を號す、弟子を四方に
遣はして相誑誘す、十餘年の間徒衆數十萬あり三十六方を置く大方は萬餘、小方六七千、
各々渠師を立て、一時俱に起る、皆黄巾を着く所在燔燒せられ、旬月の間天下響の如く
に應ず、蓋し支那の歴世革命の際には必ず是等無賴の黨與相起りて諸在を剽掠するの
例なり、勿論黄巾の賊は幾許もなくして平ぎしも是より盜賊四方に蜂起して群雄割據の
勢を爲せり

七三 三國の始群雄割據の狀況は如何

答 東漢の末路に至り袁紹は冀、青、幽、辨の四州を領して鄴に居り、曹操は兗、豫の
二州を領して鄴に居り、袁術は楊州を領して壽春に居り、劉表は荊州を領して襄陽に居
り、劉備呂布は徐州に、公孫度は遼東に據り、孫策は壽春に起りて連に江東の各地を陥れ
たり

七四 魏の曹操の事蹟を畧記せよ

答 曹操字は孟德、人となり聰明にして權畧に富む、靈帝の時黄巾賊を平げて功あり董

卓の廢立を行ふに及び群雄を率ゐて卓を討し還りて兗州に入り其の牧さなる、獻帝の洛陽に入るや操入朝して自から大將軍となり武平侯に封ぜられ尋で帝を許に遷す、是より政權曹氏に歸し天子は空位を守るに過ぎざりし、是に於て帝を擁して四方に號令し、張魯を關中に征し呂布を下邳に殺し、袁術を壽春に破り袁紹を官渡に破り劉表を荊州に討ち遂に軍を進めて劉備を追撃せしも赤壁に於て大に其の敗る處りとなれり、其後屢々兵を吳に加へたれども克つ事能はず後丞相となり冀州の牧を領し魏公に封ぜられ銅雀臺を鄴に作り已にして爵を進めて王となり天子の車服を用ひ出入警蹕す、曹操の子丕立つて王太子となるや問もなく操卒し丕遂に獻帝に逼りて位を譲らしめ操を追尊して太祖武皇帝と成す。

〇七五 吳の孫策及孫堅の事蹟を記せよ

吳の孫堅、曹操劉備と與に起りしも不幸にして早く死せり、孫策幼にして父の遺業を繼ぎ年十七にして往いて袁術に見へ父の餘兵を得たり、舒の人周瑜なるものあり策と同年なり亦材畧あり、策に従つて起る是に於て東して江を渡り、轉戦す、向ふ處る敵なく、遂に江東を畧し訴を發せんとし、刺客の爲めに殺さる、弟權代りて其衆を領せしが權亦頗る機畧あり、時に曹操大軍を進めて劉備を追撃して東に下る、備救を孫權に請ふ、權は周瑜の說に聞きて之に應じ其策を用ひ、大に曹操が大軍を赤壁に破る、其後劉備の

將關羽を破り、荊州の地を定む、劉備大に怒り、自ら將として權を討つ、權是に於て魏に通す、權の時に陸遜なるものあり、能く兵を用ひ、屢々備の兵を破る、其後魏と絶ちて専ら漢と連和し、遂に自ら皇帝と稱し堅を追尊して武烈皇帝となし、都を建業に移す、權卒して吳遂に振はず。

〇七六 蜀の劉備の事蹟を畧記せよ

蜀の照烈帝劉備字は玄德、亦曹操と同時に起る、夙に大志あり好んで天下の豪傑に結ぶ、河東の關羽琢郡の張飛、と相善し、共に備に従つて起る備始め勢微弱なり、屢々曹操の苦しむる處さなる既にして諸葛亮を廬山に得たり、亮は奇才の士、赤壁の捷の如きは實に亮が力多きに居る、又龐統を用ひ、統も亦策士なり、備に勸めて益州を取らしむ備因て關羽を留めて荊州を守らしめ巴より蜀に入り遂に劉璋を襲ひ益州を得たり、益州の地は民殷にして國富む、備是れより身を置くの地を得、是に於て蜀より漢中を取り遂に帝位に即く、既にして備卒す諡して照烈皇帝といふ、子禪繼で立つ諸葛亮遺詔を受けて政を助け、屢々魏を征す、遂に軍中に卒す、亮は兵法に精しく曾て八陣の圖を作る、亮卒して蜀の威俄かに衰ふ姜維なるもの亮に代りて其衆を領し屢々魏と戦ふ、然れども遂に勝たず、後魏の亡ぼす處りとなれり。

七七 何故に三國時代と稱するや

三國とは蜀の劉備、魏の曹操、吳の孫權の三人が各々一方に割據して天下を統一せんを欲し互に雄雌を争ひし時代なりしを以てなり而して劉備は魏の曹操が篡立して獻帝の害に遭ひしを聞くや、同時に裏を發し、服を創し獻帝に諡して孝愍皇帝と云ひ遂に帝位に即き天下に大赦して章武と改元し諸葛亮以下の諸將を用ゐて一意専心漢室の興復を聲言して其地蜀漢に偏在せしを以て終に天下を統一する能はずして卒せり

七九 司馬氏の篡奪を記せよ

魏の曹操の子を丕と云ふ魏の位を踐み明帝と稱せり、帝司馬懿を任用す、懿沈毅にして權數に富めり、遂に政に預り漸く擅なり既にして明帝崩じ其子芳立つ、曹爽之を補佐し頗る威權を擅にす懿其子師、昭等と謀り兵を勅して爽等を收め誣ゆるに謀叛を以てし、其黨與を合せて三族を夷し、自ら丞相となる、懿卒して師大將軍となる、時に李豐なるものあり、數々芳の爲めに召さる、師其の已れを議するかを疑ひ、之を殺す、魏主芳頗る以て平かならず左右の臣共に師を誅せんを勸めしも帝躊躇して容易に決せざりし間に師遂に帝を廢して、文帝の孫髦を迎て立つ、既にして師卒し、弟昭大將軍となり遂に相國に進み晋王に封せらる、晋王の威權獨り盛んなり、髦遂に安んずる能はず、窺か

に昭を誅せんを謀る、謀漏れ、却て其の黨の殺す所となる、昭因て曹の孫璜を立つ、既にして昭卒し炎嗣ぎ遂に魏主に迫りて位を禪らしむ、之を西晋の世祖武帝となす、曹丕より此に至る五世四十六年にして亡べり、

七九 吳、蜀の滅亡を畧記せよ

魏の明帝の崩後司馬懿其子子師、昭は相次で政を擅にし恣に廢立を行ふ、扱て蜀は諸葛亮の歿後力を内治に用ゐて敢て兵端を啓かざりしが姜維の事を用ふるに當り、才武を負ふて屢々魏を犯しければ司馬昭は二道より兵を進めて蜀を討ち遂に成都を陥れたり、又吳は大帝既に崩じ三傳して孫皓に至りぬ、是より先交州は孫權の時吳に服屬せしも其後反亂屢々起り、蜀滅亡の歳を以て遂に吳に背きて魏に通じ魏亡びぬ、又晋に通ぜり加ふるに吳帝皓驕暴にして刑罰放濫なりしかば晋の武帝は機乘すべしとて兵を三道より進め建業を(吳都)陥れて皓を降したり、

七、五 胡

八〇 西晋の一統を記せよ

司馬炎魏の禪を受けて國を建て晋と號し河南洛陽に都す之を世祖武帝となす、帝

大に四方を經營せんと圖る、時に三國の内吳獨り南方に在りて猶餘勇あり晋帝是に於て杜預を大將軍となし荊州の軍事を督せしめ遂に大舉して吳を伐つに決す杜預江陵より出でて王濬巴蜀を下る、是に於て諸軍並び進み戊卒百萬舟を並ぶ百里、直に吳都建業を指し鼓噪して石頭城に入る、吳主面縛して降る、吳は大帝より是に至る四世。帝を稱す五十二年にして滅ぶ、孫策江東を定めしより以來通じて八十餘年是に至りて中原始めて西晋の一統する處となる。

八一 西晋の内憂外患を記せよ

答 晋の世祖武帝は魏の孤立して夙く亡びたるに鑑み大に同族を封じて帝室の藩屏とせしが、其結果は却て他日諸王の跋扈を招くに至れり、武帝崩するに臨み汝南王亮は遺命して太子を補佐すべきを以てせしが外戚楊駿なるもの遺命を矯めて政を擅にし汝南王は楊駿を殺して自ら太宰となりしが、惠帝の后賈氏女南王を殺し、趙王倫なるもの又賈后を誅し、遂に惠帝に迫りて位を譲らしめたり、是に於て齊王冏、長沙王又、河南王頊、成都王穎、東海王越等の諸王交々起つて相争ひ宗室互に殄滅して晋國分裂し、五胡並び起りて中原に跋扈するに至れり。五胡とは塞外の蠻夷の中原に雜居したるものにして一に匈奴、二に羯、三に羌、四に氏、五に鮮卑史に之を五胡といふ

〇八二 五胡の亂を記せよ

答 五胡大亂の時尤も強大なるを匈奴とす、初め魏の曹操南匈奴の酋長呼厨泉を鄴に留め、其衆を五部に分ちて朔州の境内に居らしむ、劉豹なるもの其一部に長たりしが劉豹の子劉淵なるもの晋の武帝の時父の職を嗣ぎしが後晋室の骨肉相殘して四海鼎沸するに乘じ左國城に據つて自から大單于と稱し國號を立て、漢と稱す、蓋し其先漢室の婿たりしを以てなり、淵聰明絶倫にして武略あり、其臣に石勒なるものあり驍勇比なく、是に於て匈奴の勢日に盛なり、蓋し淵が父の職に嗣ぎしは晋の武帝即位の六年にして五胡の禍亂の端は實の茲に發せり、又鮮卑に在りては慕容廆なるもの自から鮮卑の大單于と稱し、東は扶餘を平げ、南は遼西に寇し、其別部素頭に在りては猗猗なるもの又大單于と稱し代郡に據り漢を渡りて北巡して西方諸國を畧せり次に羌に在りては姚弋仲なるもの扶風公と稱し、氏に在りては蒲洪なるもの畧陽公と稱し羯に在りては匈奴の劉淵が臣石勒晋軍を敗り後に後趙王の稱せり。

八三 五胡の來歴を擧げよ

答 鮮卑は始め域、外の東方に在る小民族なりしが東漢の時匈奴南北に分れて衰ふるに及び漸く西して其地を畧し終に強盛を致せり、三國の時其諸部は遼東より河西の間に散

在せり又羌は初め青海の地方に住み氏は其の東南の地方より巴蜀に至る間に棲む、東漢の時此二種關中河東の地に移住す、羯は匈奴の別部なり、巴氏は巴に住する氏をいふなり、

八四 西晋の滅亡を記せよ

答 晋の惠帝は在位十七年にして毒殺に遭ひ其弟懷帝嗣ぎしが懷帝の五年變夷へ匈奴大單于劉淵の子聰の爲め帝都洛陽を攻められ洛陽陥りて懷帝夷の爲めに殺されしが其翌年武帝の孫愍帝立つて長安に都せしも即位の四年に至り又もや蠻夷の爲めに攻められ長安陥りて愍帝降り是に於て西晋は亡びぬ。世祖より凡四世、五十二年なり。

八、南北朝

八五 南北兩朝の對立せし由來を記せよ

答 晋の八王の亂後中原の地に割據して相攘奪するもの凡そ十五姓十九國、百餘年間に亘れり、而して此内漢之前趙は一姓相承けしを以て其實一國と見るべく、又冉魏西燕は建國極めて短きを以て之を省き、二趙、四燕、三秦、五涼、成夏を稱して史に五胡十六國といへり、然れども前涼、西涼、北燕の三國は皆漢人の建つ所にして成は巴氏、實

は巴蠻の建つる所なりき、魏の太武帝出づるに及び僭偽の小國始めて蹤を絶ち漢土分れて宋魏の二大國となり、今の漢江淮河を以て大畧の境界となし、兩主各々至尊と稱して相下らざりし

八六 南朝歴代の國祖を記せよ

答 南朝は宋、齊、梁、陳の四代にして宋の祖は劉裕、齊の祖は蕭道成、梁の祖は蕭衍、陳の祖は陳霸先といふ。

八七 南朝四代間に於ける重大なる事變を舉よ

答 一南北兩朝の交戦。二道佛二教の惑溺。三、篡弒の頻繁。四、荒淫の惡風。五、饑景の亂等なり。

八八 南北兩朝の交戦を舉よ

答 南北の交戦は一に宋と魏との間、二に南齊と魏との間、三に梁と魏との間、四に梁と東魏との間、五に梁と西魏との間、六に梁と北齊との間、七に陳と隋との間に在り、

八九 宋の滅亡を記せよ

答 南北の第一衝突後宋に文帝位に即き魏に使聘を通じて兩國事なきこと二十餘年、に亘りしも魏の柔然を征するに乘じ大兵を出して南下し江北の宋地を蹂躪し江に臨みて還れり、是より宋は稍く衰へ蕭道成遂に宋室を篡して帝位に即けり即ち齊の太祖なり。

九〇 齊の滅亡を記せよ

答 齊宋室を篡して高帝の位に即きて以來子孫相繼ぎしが率れ暗弱にして篡弒相次ぎ蕭衍遂に兵を襄陽に起し、一旦和帝寶融を擁立せしも尋て之を廢して自から帝位に登れり是を梁の高祖となす

九一 兩魏と梁との交戦を擧げよ

答 魏は宣武帝恪の代數々梁と邊境の地を争ひしが魏の爾朱榮なるもの亂をなすに及び魏の北海王暉に走る、梁納れて魏に帝たらしめんとを計りて成らず、尋て魏は大に亂れ終に兩分して東西となる、梁東魏の叛臣侯景を納れ之れと共に東魏を伐つ、東魏の軍大に梁軍を敗り梁の將貞陽侯を捕ふ、其後梁室の諸王争奪の時西魏の宰相宇文泰なるもの其所立の梁王を立て、梁主となすを計れり。

九二 侯景の事蹟を擧げよ

答 侯景は跋にして六馬に長ぜざれども謀略に富みて大志あり、東魏の宰相高歡なるもの能く之を養ひ十萬の兵を率ゐて河南の地を畧せしむ、高歡死して侯景東魏に叛きて西魏に下る、幾くもなく又西魏に叛きて梁に降る、侯景梁の兵と共に東魏を伐ちて勝たす罪せらるるとなし、梁が東魏と相和するに及び侯景は前敗の罪を得んことを疑ひ、遂に反す、梁の都城陥り、梁主蕭衍憂憤疾を爲して死す侯景新主を弒し自立して魏帝と稱す、義兵併ひ起りて侯景を討つ、侯景遂に誅に伏せり

九三 北朝歴代の事蹟を擧げよ

答 魏は固く夷種なり孝文帝の位に即くや民田を均一にし、戸籍を制し、學校を興し、禮樂祭祀を定め又諸王の爲めに中華の名族を娶る等力めて漢種の文化を採用し以て鮮卑固有の風習を改革せんを企てたり、帝の如きは實に南北百餘年間屈指の英主とす、尋て八代孝明帝の時太后胡氏淫亂にして權を専らにし帝を毒殺して幼主を立つ、時に高歡と稱する英傑あり、將軍爾朱榮なるものに説きて君側を清めしむ爾朱等更に新主を立て胡太后と其幼主とを河に沈め王公以下二千人を殺せり、尋て魏大に亂れ終に東西に兩分し、高歡の擁する處ろを東魏と云ひ、宇文泰の擁立するを西魏と云ふ、高歡宇文泰共に英傑

にして遠謀機畧あり、其の施設する所る夏殷周の三代に擬す、商鞅の子南洋東魏を亡ぼして自から帝と稱し國を齊と號し又宇文泰の子、覺西魏を亡ぼして自ら帝と稱し國を周と號せり、周は齊を亡せしが幾くもなくして其權臣楊堅自立して帝と稱し國號を隋と云ふ、是於て魏即ち拓拔氏の族を全く滅亡せり、

九四 隋の天下を統一せし次第を記せ

隋は西紀後五百八十八年に興り天下を統一し制度を改革し以て大に人文の更始を計り、然れども年を享くる事久しからずして亡べり、隋の高祖文帝は後漢の名臣楊震の後裔なり、父楊忠は魏末の亂に乗じ宇文泰に従つて起り、西魏と周とに仕へ功を以て隋公の爵を受く、楊忠の子堅（即文帝）の女は周主宣帝の后なり、宣帝死して嗣猶幼冲なり、楊堅乃ち入りて政を執る、尋て禪を受けて皇帝になれり

九五 隋の文帝の事業を畧記せよ

隋の文帝は天資嚴峻、勵精治を圖り、財に吝なるも賞功は敢て惜む處ろなく自から奉ずる事頗る儉薄にして百姓を愛撫せしかば天下大に治まり民戸の繁殖するもの四百萬より八百萬に至れり其一代事業中重なるものけまづ陳を滅し、域外の突厥、吐谷渾其他の諸蠻を降伏せしめし事、官制及財政を改革して大に綱紀を張り民戸を賑せし事兵器を

收殺せし事等なり、蓋し六朝の弊政を革めんとして田租を薄くし刑罰を寛にし、文學を奨励したる等は其功業の著るしきものたり

九六 隋の煬帝の事蹟を擧げよ

隋の煬帝奢にして無用の土木を喜びしが如きも又大に有用利世の工事を起し以て民庶に益せしも其の少からず、即ち盛に運河工事を起し、黄河と揚子江とを疎通せしめ以て後世の人米穀貨物漕運の使に供したるが如き其一なり。然れども奢侈を事とし巡遊を恣まふにし、徒らに功名を貪り林邑、杜谷渾其他の諸蠻を伐ち琉球、高麗の絶域を征したりしが、是等巡遊と外征の爲めに人民疲弊して叛亂各地に起り遂に又天下大亂の因を爲せり。

九七 隋朝の前後に於ける突厥を記せよ

六朝の終より隋朝の前に當りて猖獗なりし域外の蠻族は突厥なり、突厥は匈奴の一支部にして姓を阿史那と稱し世々金山（甘肅の北境）の南に居りて柔然に仕へしが伊利可汗の出づるに及び始めて柔然と絶ちて之を擊破し其子木杆可汗に至り遂に柔然を滅して居を都斤山（外蒙古の地）に卜し西は颯達を破り東は契丹を走らし、周齊二國は之と婚を結び、且つ府庫を傾けて其の甘心を買へり、隋初木桿の姪沙鉢畧可汗立つや木桿の

子阿波可汗と別れて東西二國となり、東突厥は和を隋に求めたり

九八 隋朝に於ける三韓を記せよ

隋朝の初め三韓は皆使を遣はして隋に入貢せしが、高麗王元の鞅鞫を率ゐて遼西を浸すや文帝は水陸三十萬の兵を派して之を伐らしも利あらず、尋て高麗は恐れて和を請ひしも煬帝之を許さず更に百十三萬の大兵を發し、自ら遼東城を攻めて抜く能はず却て高麗將の奇計に陥りて大敗せり、然れども其後高麗を討つ事二回にして漸く之を降せり（因みにいふ煬帝の時日本推古帝の小野妹子を使として隋に通聘せり蓋し日本と支那と國書進獻の始めなり）

九九 隋末の大亂を記せよ

煬帝の末路盜賊所在に起り、豪傑諸方に割據せり、就中李淵を以て其の巨擘とす李淵兵を太原に起し長安に入り新主を立て、煬帝を上皇とす、時に煬帝は江部に在り中原の方に亂るゝを見て北歸の心なく遂に江都に都せんとす、從駕の諸臣は皆關中の人なり是を以て北歸の念甚だしく遂に煬帝を弑して又別に新主を立てたり、尋て李淵は己れ自立つる處ろの新主（恭帝）より讓を受けて自ら唐帝と稱せり、當時李淵と同じく自立して帝と稱するもの宇文、化及、王世充等あり。而して其他の豪傑皆其割據の地に於て尊稱を

僭用せり而して隋朝三代三十八年にして滅亡せり。

九、六朝の文化

一〇〇 六朝の官制を記せよ

晉初より隋の一統に至る凡そ百七十年間歴代の交迭君主の廢立、瀕繁を極め従つて官制の如きも亦頗る錯雜し、一綱を曳て以て全綱を擧ぐるを得ず、之を畧叙するに晉は漢の故に仍りて大宰大傅、大保を以て上公となし、大司馬、大將軍、大尉、司徒、司空を置く後魏北齊皆其舊に依り多少改號増減する所あるのみ、後周に至り蘇綽宇文泰を輔けて周禮を酌酌し六官を更定せり其他の官職亦秦漢の制を折衷し大に整備する所あるを見る隋の一統に至り此制を廢し漢魏に據る煬帝に至り大に古制を酌酌して大業三年初めて新官制を組織せり、蓋し漢以來官制の整頓せる隋朝より始まる、當時煬帝文帝豊宮の後を受け上下和靜衣冠文物實に其盛を極むるに至れり。

一〇一 六朝の法制を記せよ

三國以來戰亂相繼ぎ君主は大率に武斷を以て政治を宰し従つて法制の如きも亦頗る嚴格を極め或は部族を擧げて誅殺せらるゝものあり或は宗族少長となく殺さるゝものあり

り政刑の紊亂する未だ之時より甚だしきものはあらず、唯梁の武帝佛法を尊信し殺生を喜ばず爲めに法制の如き亦頗る簡單を極めたり、是より公卿大臣、咸な鞠獄を以て意をなさざるに至れり、大監二年始めて新律を制定して大に前代の弊を洗除せしものと遂に之を實行するに至らず、後周の時蘇綽なるもの亦法制を改定せりしが降つて隋の文帝に至り有司に命じて魏晉以來の律を採擇して五刑を定めたり、即ち笞、杖、徒、流、死是れなり、後世多く之を適用せり、

1011 六朝の幣制を記せよ

答 晉は魏の舊に依り新に改鑄する所なかりし其の後貨幣の用大に加はるに至りければ大始年中始めて帛を裂きて貨幣に代用するに至れり、其後前涼張軌の時に至り流通する所の布帛を標準として五銖錢を鑄造せり南北朝時代に至り宗の文帝四銖錢を鑄り、武帝又四銖錢を鑄り其後廢帝景和二銖錢を鑄る厚さ甚だ薄くして水に投ずるも沈まず手に隨つて破碎す、稱して驚眼錢といふ、梁は始め鐵錢を用ゐたりしも未だ幾くならずして流通せず陳の高祖に至り再び五銖錢を復し、又新たに六銖錢を鑄す、北朝は魏の時五銖錢の鑄造あるを見るのみ當時外國錢も又西域地方より入りて河西の諸郡に行はれたり而して是等の錢は如何なるものなるや、知るべからず雖も背面に人面あるを傳ふれば歐洲若しくは西南亞細亞地方の通貨たりし事疑ひなかるべし蓋し是等の通貨の西域に行は

れしは遠く漢時代に在りしが如し、

1013 六朝の儒學は如何

答 支那の文學は自から南北に分れ、北方は實質にして經學を尙び、南方は浮華にして詞賦を尙べりされば魏の時王肅の悉く諸經に註して鄭玄を護誣し、又王弼何晏の老莊の意を交へて一は易註を作り一は論語集解を造り又晉初杜預の在傳註解を造るありしが東晉南朝に至りては僅に范甯の穀梁集解あるに過ぎず之に反して北朝には名儒を出す事稍々多く後魏の徐遵明、周末より隋に至りては劉焯劉炫の如き一代の鴻儒たり、

1014 六朝の學制は如何

答 魏晉以來歷朝兵戈を事とし禮樂刑制の具蕩然として地を拂ひ後魏の拓跋氏起るに及び始めて五經博士を置き以て儒學を振興せしむ、然れども未だ其功を見るに及ばずして廢止せり、孝文帝立つに及び禮を制し樂を作し干戈の際蔚然として太平の氣象を呈せり、其後梁の時州郡の學を興さしむ、當時南北朝の間に於て梁獨り文學の淵藪たり其滅亡の時及びて梁主か古今の圖書十四萬卷を焚き慨嘆するを見るも又其盛なるを知るべし、其後隋に至り國子監の官を置き天下の學政を監せしむ又進士科を立て、人才を登用せり支那文學の再興する實に隋唐の時代より生まれり、

一〇五 六朝の租税制度は如何

【答】 三國以來干戈瀕年熄む時なく歷朝大率に國帑を空竭して賦歛を重くせり、魏の時に至り最も甚だしく豫め六年の租調を徵集して尙足らず遂に市に入る者に税を課し人每一錢を徵せりといふ、横征暴斂の甚だしき以て察すべし、是より降つて隋の世に至り文帝税制を改正し賦役を輕減せり、然れども彼の有名なる煬帝の時に至り土木兵興荐りに起り賦歛漸く滋く民心遂に離畔して群盜蜂起し隋の天下は之を爲めに敗滅するに至れり、

一〇六 六朝の詩賦は如何

【答】 魏晉以來學術中最も隆盛を極めしもの之を詩學となす、所謂六朝の詩學なり、詩賦は典雅にして風神に富めるもの多く、五言の詩は長妙の域に達し、排律も亦此時に始まれり、魏に建安の七子あり武帝文帝又善く詩を賦す、晉の始め陸機濟岳の徒ありて排偶駢麗の一體を創め次で左思郭璞之に反して健勁拔を主としたりしが、晉末に至り彼の有名なる陶潛（淵明）出で、南北兩朝の絶唱と稱せられたり、同時又謝靈運あり、陶潛は冲澹、靈運は旨とし靈運は専ら綺麗巧練なりし、

一〇七 六朝の文章は如何

【答】 東漢より魏晉南北朝を経て隋に至るまで文章は益々浮華に流れて巧みに駢麗を作り所謂八代の衰をなせり、此の間に見るべきものは唯東漢の班固が漢書、蜀の孔明が出師表、晉の陳壽が三國志等あるのみなりし

一〇八 六朝の歴史學は如何

【答】 晉の初め一大史家を出せり、陳壽といふ、三國志を撰ぶ、叙事簡樸にして司馬遷班固以來の好史たり、東晉の初め杜預亦史才あり、春秋の歴史に委しく左傳を註釋せり其後宋の范曄は後漢書を、梁の沈約は宋書を、又北齊の魏收は後魏書を編纂せり以上は皆史記漢書に次ぎて支那の正史と稱せらるゝものなり。

一〇九 六朝の書畫は如何

【答】 晉の時に當り最も進歩せるものは書なり、晉の始め王羲之、王獻之あり、頗る書法に詳く後世之を二王と稱せり、以て書を學ぶ者の宗師となす、羲之字は右軍最も艸書に巧みなり、章草の體は實に王羲之の創むる所なりといふ、庾翼又羲之の時を同ふして起り又草隸に巧みなり、畫は三國の時吳に曹弗興あり晉の時に衛協あり顧愷之あり、而して顧愷之尤も著はる

一一〇 六朝の音楽を記せよ

答 音楽は三國以降久しく聞く所なりしが魏の孝文帝の時に至り始めて樂章を定むるを見る、且又當時佛法の隆盛を極めし時代なれば音楽も又佛事に隨伴して印度西域の風韻を注入せしもの、如く其後齊の世に至り魚龍山車の戲あり稱して之を散樂といふ、其後漸く流行し隋の時に至り盛に民間に行はれたり、煬帝富樂を以て諸蕃に誇らんを欲し、四方の散樂を徵するや至るもの八千に近し亦以て其盛なるを知るべし、散樂の外音楽の此時代に制定せらるるもの亦多く清夜遊の如きは頗る巧妙を極めしといふ。

一一一 六朝の佛教の盛大なりし事蹟を擧げよ

答 三國以後隋に至る四百年間は支那歴史中佛法の隆盛を極めたる時代なりし、蓋し東晋の始め印度の高僧佛圖澄(フットテヤンカ)なるものあり傳教の爲めに支那に來り、石勒の信向する處となり大に佛法を擴張せり、其後幾くもなくして支道、惠道、道安の碩德輩出して佛教頗る熾なりき、就中道安は符堅の信任を得て大に佛教の傳道に盡力せりが姚秦の時鳩摩羅四維(ケモラジュウ)なるもの支那に來り三論字を傳へ、且つ大に佛典を翻譯したり秦王姚興頗る之を信じ待つに國師の禮を以てせり、羅什の弟子に道瑒道生、道肇の徒あり羅什と共に經論三百餘卷を新譯して支那佛教史上に一新時期を畫し

たりしが、其頃支那僧の印度に赴きて道を訴ふ者頗る多く中にも法顯は流沙河を渡り、蔥嶺を踰へて印度に入り三十餘國を歴遊して大に經律を得、ランカ國より商舶に乗じて東に還り青州に漂着し佛國記を著はして其行を記せり宣武帝の時に至り印度僧の洛陽に來りて住するもの三千餘人の多きに至る、其後梁の武帝又頗る佛法を信じ寶誌傳大士の如き皆當時の名僧とす

一二二 菩提達磨の事蹟を擧げよ

答 達磨は南印度の人なり、支那に來り佛教を説けり、梁の武帝之を聞き梁都南京に徵して共に佛談を試みたりしも帝の語るに足らざるを知り、辭して北魏に至り。嵩山の小林寺に入り、坐禪の法を修せり、後光律師菩提流支の忌害する所となり、端居して成佛せり、達磨の支那に來るや始めて見姓成佛の説を唱へ、以て支那禪宗の第一祖となれり、達磨の後に慧可あり、慧可の後に道琛あり、皆達磨の統を傳へて陳隋の間に顯はれたり。

一二三 六朝の清談及道學の流行を記せよ

答 三國以降殺伐流行して道義擾亂せしより志あるの士は身を山林泉石の間に退き世事を度外視するの流風起り従つて一種の清談學なるものを生ずるに至れり、而して此學た

るや老莊虛無の哲學（即ち道教）を崇尚して政治を輕蔑し放曠洒落殆んど諧謔に類するの學派たり武帝の時竹林の七賢の如き其最も著名なるものなりき、降つて惠帝の時に至り清談の學者漸く輩出し清談の流風一時朝野の間に行はれたり、其後東晉の謝安等亦之を能くせりといふ。

一一四 六朝の風俗を畧叙せよ

晉以降五胡の民族漢土に侵入して陸續國を立てしが故に當時支那社會の風俗は著るしく其影響を受け従つて衣服の如きも其製法又多少改易する處ありし、魏の孝文帝が其人民に詔して胡服を禁じたるを見ても其大率を知るに足るべし。梁の武帝の時制服を改正し降りて隋に至り、煬帝又大に服制を定め五種の服色を設けて貴賤尊卑に従ひ之を區別せりといふ次に佛法の隆盛に伴ひ食物の如きも又南北朝の時代に於て著るしく影響を受けしものゝ如く梁の武帝が其の飯膳に悉く肉食を廢し祭祀に大宰を用ゆるを禁じたるは直接佛教の影響にして殺生は佛の法戒として嚴禁する處なりしを以て自然肉食の國風を矯めたるの事實として見るべし。次に又建築は是亦佛教傳來の影響として堂塔寺院の建設此の時に創まり、西域印度風の建築物を以て多少人民の住居にも改良する處ありしならん、當時各僧智識の士、西域より印度より來る者多かりしが故に建築上自から西域印度の風韻を傳へしや知るべく、隋の煬帝は江嶺の奇材異石を發し洛陽の顯仁宮を營

み、其他晉陽汾陽の二宮を營作せり、臺觀殿閣皆華麗を極めたりといふ、又當時遊幸に供せし龍舟の如きは高さ四十五尺長さ二百尺四重にして上層は正殿、内殿、朝堂を設け、中層二重百二十房を有し下層は悉く内侍の居に備へたりといふ。



第四章 近古史

唐、五代(後梁)、(後唐)、(後晋)、(後漢)、(後周)、(契丹)
宋(西夏)、(遼) 南宋(金)

一、唐

一 支那歴史中に於ける唐代は如何

唐は隋の後を承けて天下を統一し、文物制度を改革し大に威武を萬邦に輝し其盛大なりし事は漢の以後未だ曾て有らざる所なり蓋し唐代は漢人種が大に威を振ひ、支那域外の諸民族を服従したるの時代にして其の帝業は凡そ三百年なり。

二 唐朝の起源を畧叙せよ

唐の高祖李淵は隋の代に在りて一地方の鎮將たり、群盜起るに及び主命に依り山西河東の群盜を討伐し、突厥の邊境を寇するに及び又之を撃退せり、李淵衆を御する寛

簡にして多く士の心を得しかば討伐皆其功を奏せり、李淵の次子世民は聰明にして識量あり、父に謀りて大事を挙げしむ、蓋し高祖の終に能く群盜を滅して天下を定むるに至りしは實に世民の英武絶倫なりし其の據る處るの要害の宜しきに依るなり。

三 唐の太祖の治蹟を擧げよ

唐の太祖は高祖の二子李世民なり位に即くや勵精治を圖り、奢侈を去り、刑辟を寛にし、賦徭を軽くし、武備を整へ、又儒學を崇び雅樂を獎勵せり、その弘文館を置きて四部の書二十餘萬卷を集め、國子監を擴張して大に名儒を徵し、學生にして一經以上に明かなるものは皆官に補するを得せしむるや四方の學者京師に雲集し、高麗、百濟、新羅、吐蕃に至るまで皆子弟を遣にして入學を請へり。

四 唐の太祖の人物及び其功臣を擧げよ

唐の太祖李世民は懿達大度文武の兩道に通じ亂を除きて治を致し安に居て危を思ひ賢能を擧げて諫言を納れ大に制度を改め盛に學藝を興す、實に千載の名主なり、而して其補翼の臣に李靖、李世勣、長孫、無忌、房玄齡、杜如晦、魏徵あり、皆一代の大人物なり、當時諸蕃相踵て降伏し、西域並に北方の諸國入貢する者其數を知らず獨り高麗入貢せず太祖乃ち之を親征せり。

五 玄武門の變とは何ぞや

唐の高祖に三子あり建成、世民、元吉といふ、高祖の帝位に即くに及び建成を皇太子とす、初め高祖の業を成すや世民の力なり、故に高祖は世民を立て、儲嗣とせんを欲す、然るに世民固辭す、建成即ち嗣となる、天下定りて後建成元吉自から疑ひ世民を除かんを謀る、世民之に先んじて發し二人を撃ちて之を殺す、是れ所謂玄武門の變なり是に於て高祖世民を立て、皇太子とす。

六 則天武后とは何ぞ

則天武后は太宗の子高宗の皇后なり、武后は元と太宗の才人なりしが高宗の立つに及びて昭義となり尋て后位に進み國政に參與して權を専らにせり其性奸惡殘忍、古今に亘つて其數少し高宗崩じて中宗立つに及び武后は直ちに之を廢して其弟睿宗を立て朝に臨みて制を稱し唐の宗室貴戚數百人を殺して自ら聖神皇帝と號し、國號を周と改め以て一時唐祚を絶つに至る、武后は人心の服せざるを知り、酷吏を任用して大獄を起し、以て大に國人を箝制せり。然れども又權畧に富みて善く人材を籠絡し、狄仁傑、姚崇等の名相前後輩出して國政を執れり、武后老ゆるに及び嬖人事を用ゐて朝政を執りしかば國政大に紊亂せり、後狄仁傑等宮中に入り武后に迫りて位を中宗に譲らしめたり、武后時

に年八十二歳

七 玄宗皇帝の事蹟を記せよ

玄宗は唐六代の主なり、即位の始め大に治を圖り、宰相に姚宗、宋璟、張九齡等の賢臣あり後世治を稱して開元の治といふ、然れども其晩年に至り聲色に荒み土木を起し、奢侈を肆まゝにし、小人を用ゐ、宦官を信じ、三子を殺し、倫常を亂し遂に播遷の禍に罹り、國家をして大亂の災を被らしむるに至れり。

八 玄宗の亂を記せよ

玄宗帝の後年奸人李林甫宰相たり妖婦楊貴妃寵せらる、小人楊國忠は楊貴妃の從祖先なり、楊貴妃官に入るや玄宗胡人安祿山を寵用し遂に以て將帥となす、安祿山始め罪ありしが、赦されて朝に入る、人となり狡黠多智にして才勇あり、朝に入りて楊貴妃に媚び玄宗の信を固ふし、軍に在りては胡人を養ふて腹心となし以て異日の用に供せり、
祿山平盧 范陽 河東の三鎮に將帥となす、及び日、驍恣に起り、
李林甫の在世の時に方ては其術數を恐れて未だ敢て發せず李林甫死し楊國忠代りて相となるに及び爲めに激せられて終に反せり、之を天寶の亂とす、實に西曆紀元後七百五十六年なり、安祿山其部下の兵と胡族奚、契丹の兵と凡十五萬を率ゐて范陽（即ち今日の北京）

を尊し、南進して洛陽を陥れ、更に進んで關に入り國都長安に迫る。玄宗驚きて蜀に出奔す。行きて馬嵬驛に至れば從駕の將士敢て進まず、曰く禍亂の因は楊國忠と楊貴妃とに在り。必ず之を殺して後に進まんと。玄宗止むを得ずして二人を殺す。將士乃ち發す。父老道を遮りて留らんことを乞ふ。玄宗聽かず。父老太子を擁して亦行くを得ざらしむ。玄宗即ち太子を留めて發す。太子遂に御に即く之れを七代肅宗とす。天寶大亂の際忠節を著したるもの顔真卿、顏泉明、郭子儀、李光弼、張巡、許遠等あり。

九 唐朝の衰運を來したる原因を擧げよ

唐の七代肅宗は良將郭子儀、李光弼を用ゐて回紇、西域の兵を藉りて大亂を鎮定し、上皇を迎還せり、實に中興の英主と稱すべし、然れども後年女色に感ひ宦官を宰相又は監軍となし、藩鎮をして恣に其の將帥を立てしめ以て姑息偷安の政治を行ふ、安祿山の子安祿緒父を殺して自立す、安祿緒郭子儀等に討たるゝに及び安祿山の故將史思明なるもの之を救ひしが西曆紀元後七百五十九年安祿緒を殺して自立す、其後二年史思明的乎史朝義父を殺して自立す、其後二年史朝義の將之を殺して下る、此に於て安氏の亂は平げり然れども朝廷其の故將をして其據る處の地に鎮將たらしむ、是れ藩鎮跋扈の初めなり尋て八代の主代宗以後唐の祚衰運に屬し、朝命稍く下に行はれず、災禍相踵きて暴發し、終に國家大亂して滅亡するに至れり。

一〇 兩税法と藩鎮の撲滅策を採りし次第を記せよ

代宗崩じて僦宗立つに及び楊炎の建議を納れて兩税の法を作り、又藩鎮世襲の弊を除かんとして兵を用ゐたり、兩税とは夏秋二季に徵收するものにして、毎歲州縣費用とその上供との數を量り、資産の多寡に應じて課するをいふ、此の法は最も能く時勢に適し五代を経て宋明に至るまで産に隨て賦を制するの原則は常に行はれたり、然れども一方の藩鎮撲滅策は遂に出敗に歸し、出師の費多くして怨怒の聲遠近に盈てり、已にして憲宗立ち西川、鎮海、淮西、平盧等を滅して諸鎮稍々定りしが其反服猶止まず、宦官の患と相表裏して遂に唐室を衰亡せしむるに至れり。

十一 唐代宦官の跋扈せし次第を記せよ

宦官は玄宗の時高力士の太平公主を誅する功ありしを以て右監門將軍となり、内侍省の事を知りしより漸く盛んなりしが、次で魚朝恩の専ら禁兵を典り、又監軍となりて出征軍に従ふに及び、勢威中外を壓し、憲宗以後は天子の廢立一に其手中に在りき、是を以てし玄宗は之が誅伐の機を講じしも事遂に成らず却て宦官の氣焰を熾ならしめ、國事皆内侍省に決し宰相は唯文書を行ふに過ぎざりし。

一一 唐朝衰亡の四大因を記せよ

答 唐は八代代宗の世に至り稍々衰亡の運を開きぬ、其原因凡そ四あり、一に藩鎮の跋扈、二に宦官の専横、三に朝臣の朋黨、四に外夷の入寇是なり。

一二 藩鎮の跋扈を記せよ

答 藩鎮とは將軍府にして管下の兵事と民事とを司る。玄宗帝の時始めて邊境に十藩鎮を置き之を十節度使と稱せり、安氏の亂後藩鎮世襲の弊を生じ、反覆常なく跋扈を極むる事凡そ六十年間にして五代を経たり。

一三 朝廷朋黨の争を記せよ

答 朋黨の争は所謂李牛の争なるものなり、文宗の時李德裕なるもの宰相たり、其仇家李宗閔、牛僧孺相合して之れを斥け代りて兩人宰相となる、後二人罷められしが德裕は復官せり、德裕固より宦官と相善からず故に幾くも無くして復た罷めらる、十五代武宗に至り復た德裕を相とす、德裕藩鎮の處置に關して功あり益々寵用を得たれば威權を專にし、宗閔、僧孺を遠竄す十六代宣宗其專横を惡み、之れを罷む、德裕尋て死す、宗閔僧孺も亦尋て死す、此に於て其争始めて止む、其争ふこ四十餘年始終宦官に干渉せられき斯く朝政の紊亂。藩鎮跋扈の患あるが上に胡族の入寇に遭へり

れき斯く朝政の紊亂。藩鎮跋扈の患あるが上に胡族の入寇に遭へり

一四 唐末胡族の跋扈を記せよ

答 胡族は唐の依りて利せし所にして又た害を被むりし所なり。突厥は高祖太宗を援けて帝業を成さしめし、其の後、屢々入寇し、吐蕃奚、契丹、南詔、亦た皆邊患をなせり、七代肅宗は回紇の援を得て恢復の業を成し沙陀（突厥の一部）の酋長李國昌は十七代懿宗の爲めに賊を討ちて功あり、其の子李克用といふ、是れ後に後唐の祖となりしものなり。

一六 唐末の反亂を記せよ

答 唐末懿宗、僖宗の時朝廷の奢侈日に甚だしく賦歛愈々急にして水旱頻に至る、人民訴ふるに所なく相聚りて盜をなす、僖宗の時濮州の人王仙芝興り、曹州の人黃、巢之に應ず、窮民來り歸するこ數月間に數萬に及ぶ、仙芝は早く敗死せしか、巢は勢甚だ盛にして終に洛陽を取り長安に入り僖宗を走らし僭號して大齊皇帝といふ能く是れを破りしは李克用と沙陀の兵となり、之より先き巢の將朱全忠は既に官軍に降れり全忠事によりて克用を襲ふ、克用之を奏訴す僖宗顧みず、克用悦ばず、遂に叛す、僖宗死し十九代昭宗立つ時に近畿大に亂る、全忠の勢日に加はり終に昭宗を挾みて號令を下す、其後悉く

く宦官を殺し多く朝臣を害し都を洛陽に遷し昭宗を弑し、全忠自立して遂に帝と稱す梁の太祖即ち是なり之に至つて唐は遂に亡ぶ。

一七 唐末渤海及日本との交通を記せよ

【答】渤海は太祚榮の子武曠に至り益々疆域を擴め率れ今の平安、咸鏡、吉林、盛京の諸地を有し子欽茂の代肅慎の故地に移り五京、六府、六十二州を設け、其東境は罽夷に毘連し、屢々日本へ朝貢せり、斯く渤海の日本に恭順なるに反し、新羅は反覆常なく奈良朝の末に當り其賊船屢々對馬筑紫に寇せり、此際に方り日本と唐との交通絶えず遣唐學生は代々往復して唐土の文明を傳へ、吉備眞備、安部仲麿の如きは最も才學の名を顯はせり、然れども光仁桓武の代に至り、我國の制度大備はり復彼に需むる所なく加ふるに當時操舟の術未だ委しからず、渡唐の船舶屢々漂没しければ仁明帝以來使聘絶ゆる五十餘年宇多帝に至り、唐末擾亂せしかば菅原道眞上書して遂に遣唐使を廢したりき。

二、唐代の文化

一八 唐代の官制を略記せよ

【答】唐は隋の禪を受け亂賊を平定して後始めて官制を定めたり大總官を以て大冢督府

なし大尉、司徒、司宗を以て三公となし、次に尙書、門下、中書、秘書、殿中、内侍を以て六省となす、尙書には戸部、吏部、禮部、工部、兵部、刑部の別あり、稱して六曹尙書といふ概れ現代の制度は之に則れるもの、如し、次に御史臺あり、次に大常光祿、衛尉、大僕、大理、司農、大府の九寺あり、其他國子監、將作監、少府監、天作、上將府あり、次に左右衛左右金吾衛、左右領衛等十四衛あり以上稱して京職事官となす即ち中央政府の官僚なり、次に州縣鎮戍は稱して外職事官となす、即ち地方官なり其制は全國を區劃して十道六百三十四府となし、府に一人の觀察使を置く、府更に區別して之を縣となし、縣に刺史を置く、邊要の地に特に節度使を置く而して觀察使の得失を察し、兵馬行政の權を掌握す、縣の下に町村制あり、戶數百戸を里とし、里に里正を置き、里百を郷となし、郷に郷長を置く、邑居するもの之を坊と稱し、坊に坊正を置く、野居するもの之を村と稱し、村に村正を置く、村正坊正、里正は三年毎に管轄區域の戶籍を調査するを掌る、而して當時官は文武を區別し文は稱して文散官といひ、武は稱して武散官といふ、文散官位階二十八、武散官位階三十二、特に武散官は勳位十二等を立て、以て勳功を表章せり、支那官制の備はるこゝ中古時代唐を以て最もとす、以上の官制は唐の初世より玄宗皇帝の時に至る間盛に行はれ衣冠文物共に燦然として盛美を極めしも玄宗以後に至つては藩鎮稍々勢を得て隱然諸侯を爲し、遂に封建の有様をなし、政府の威力を制する事能はず降りて五代に至り官制頗る紛更せり

一九 唐代の兵制を略記せよ

唐の太宗天下を定め府兵を置くこと六百三十四關、内二百六十一は皆諸營及東宮六卒に隸せり、上府の兵凡そ千二百人、小府千人、下府八百人、三百人を團となし、團に校尉あり、五千人を隊となし、隊に正あり十人を火とし火に長あり、人毎に兵甲、糧、裝各數あり平時は之を庫に藏め征行は之を給するの定めなりし、二十歳にして兵となり、六十歳にして免除さる、兵中能く騎射するものを越騎となし、其餘を歩兵となし指令統軍を折衝都府といひ、之に屬する長吏兵曹又若干あり歳季毎に折衝都尉戰を教ゆ馬を給すべきものには官より直を與へて之を買はしめ、宿直すべきものは蕃とす、兵部遠近を以て蕃を給し、遠は疎に近は屢々にして皆一月にして交代せり、其後玄宗の時此に至り制を變交し壯士を招募して諸衛に分隸し、更番上下せしむ是に於て府兵の制全く破ぶれ兵農之より分るゝに至る、而して其の衛佐兵は大率假人にして六軍の宿衛も亦無賴漢の團隊となる之に反して要害の地に屯在する藩兵は皆相團結して藩鎮となり、彼是氣脈を通じて勢力を逞ふするに至る唐の天下の衰亂するや一に府兵の改革にありといふべく、其弊延て五代に至り七十年間兵馬財政の權全く軍人の掌握に歸し天子の廢立亦其意志に決するに至り殆んど軍人政治の有様となすに至れり。

二〇 唐代の貨幣制の梗概を記せよ

唐の高祖始めて開元通寶を鑄造せり、是より先き漢の武帝五銖錢を鑄造し普く天下に通用せしめたりしが唐に至るまで八百年開元通寶出づること共に五銖錢を廢止せり、後ち肅宗の時に至り乾元重寶を鑄る、憲宗の時に至り錢乏しく一時紙幣を發行し銅器を用ゆるを禁じたり當時商沽の京都に至る者錢を諸路の進奏院及び諸郡諸使の富家に委託し以て輕裝して四方に赴き合卷を以て是を取る、稱して飛貨といふ、後京兆斐武請ふて之を禁ず、といふ。

二一 唐代の租稅制を記せよ

唐の時丁中（壯丁の民）に田一項を給す、若し篤疾あれば十分の六を減じ、其人若し寡婦なれば十分の七を減するの定めたり、田を分つて二等となし、一を世業と言ひ、一を口分といふ、世業とは代々其家に傳ふるものにして口分とは家族の活計に準するものなり。又壯丁毎に年々租粟二石を上納せしむるの定めなり、其外調といふあり、其の土地に産する適宜の物産を以て納めしむ、又毎年二十日間の公役あり、若し事故ありて役せざる時は、調を代用として納む、其標準に即ち一日に紵布三尺の定めなり、又事故ありて公役を加ふる時は十五日間にして調の納稅義務を免除す、若し三十日に及ぶ時は

租と調と兩方の納税義務を免除するもの定めなり、而して又水災、旱災、蟲害、霜害等の如き天災ありて十中の四以上を減じたる時は租を免じ、十分の六以上を損じたる時は調を免じ、七以上を損するに至れば課役共に免ぜらるるに至るの定めなり、玄宗皇帝の天寶年間唐に於て歳入の最も多額に達したる代にして當時の歳入計算に依れば錢二百萬緡、粟千九百八十萬石、絹七百八十四匹、布千〇三十五萬端、綿百八十萬屯の巨額に達したり、其後兵事存りに起り國用多端なりしかば代宗の時鹽税を課し、德宗の時酒税、茶、漆税を課するに至れり、五代に至り税制紊亂一定する處なかりし。

二二 唐代の法制を記せよ

唐は隋律に基いて法律を制定せり、其刑律は五刑十二律にして左の如し

- 笞、杖、徒、流、死 (以上刑)
- 名例律、衛禁律、職制律、戶婚律、廩庫律、擅興律、盜賊律、闘訟律、詐僞律、捕
- 亡律、斷獄律、雜律、(以上律)

抑も唐律は支那中古紀中に於ける最も完備せる法律にして日本の大寶令の如きも實に此の唐律を採擷參酌したるものなりし。

二三 唐代の詩學は如何

唐朝は支那に於て學術の最も進歩發達したる時代なりし、蓋し漢魏以來世は争亂の甚なる天下の文獻大卒四散五逸せしも唐代に至るに及んで弘文館を置き經書、史書、子類、文集の書二十萬卷を聚め文學の士を擧拔して、盛に學術を講究せしより諸般の學術蔚然として盛を致せり、而して其尤も隆盛を極めたるものを詩學とす、勿論唐初の詩文は猶六朝の弊を受けて纖弱を脱せざりしも玄宗に至りて全く一變し、開元天寶の頃より李太白、杜、子美、白樂天、高適、王維、孟浩然の如き詩人相尋て輩出し、空前、絶後の隆盛を見るに至れり、實に唐代は支那文學の歴史中詩の時代ともいふべきものなりし、就中李白、杜甫の詩は倚俚にして彫琢の工を假らず、古風、近體其妙に詣らざるなく後世詩を言ふもの皆是を以て宗となす

二四 唐代の文章は如何

唐代は詩學の隆盛と共に又文章に於て頗る發達せり、蓋し漢魏以來文章は詩賦の体を混じ四六駢體の体を崇重せしも唐代に至り韓退之の起るに及び遂に弊風を一變し文章之より達意の散文を用ゆるに至れり、韓退之は實に八代の陋習を一洗し秦漢以上古樸の風に復らしめたる一代の巨匠にして孟子以來の大文章家を稱せり、韓退之と同時に柳宗元あり、其文雄深雅健にして晷漢の司馬遷に類し韓愈を併せて後文家の規矩となれり、又白樂天は樂府に長じ平易通俗の語を用ゐて巧みに曲折を叙し夙に我國人の朗吟吟誦す

る處さなれり、以上は盛唐時代の文章なれどもそれより以前徳宗の世に陸宣公あり、其の論策奏議は眞意執干實に又一代の巨手たりき。尋て晩唐に至りて杜牧之あり、又文章を能くす、彼の阿房宮の賦の如き實に千古の絶誦たり、

二五 唐代の儒學を記せよ

儒學は漢魏以來大率斬新の説を出すものなく、其研究多くは訓詁句讀の上に止まりしが故に未だ性理上の研究をなすものあらず、是故た經書に就て解釋を下すもの人によりて其說を異にし、往々歸着する所なきに至れり、唐の世に至り太宗其の弊を除かんを欲し孔穎達に命じて五經の疏を定めしむ之を正義といふ、其後韓退之出づるに及び荐りに老佛を排し、儒學を振興する事に力めたり

二六 唐代の史學を記せよ

唐代正史の編述せられたるもの頗る多く、姚思廉に梁書陳書あり李百藥に北齊書あり、狐德勣に周書あり、魏徵に隋書あり房喬に晉書の編述あり、此の中晋書は多く小説を材料としせるが故に往々信すべからざる事あり、又李延壽は南史、北史を撰して南北諸朝の正史の煩を去り劉知幾は史通を著はして頗る斬新の説を爲せり

二七 唐代の書畫を記せよ

唐代は文章詩賦共に璨然として前代無比の盛況を示せしが之と同じく書畫の如きも又名家を出せり、歐陽詢、虞世南の如き皆王羲之より出で、共に能書を以て名あり、又顔眞卿、李陽冰、釋の懷素、柳宗元、劉禹錫の如き亦書を能くするを以て著はる、而して顔眞卿李陽冰は楷書に通じ、徐商、韓鄴は草書に巧みて形魏仲犀は草隸を能くせし、懷素は新たに破体を創めたり。而して繪畫は唐の始めに當り閻立本あるありて頗る人物を畫くに長じ凌煙閣の功臣の像を描きたるものは蓋し此の人なりし其後乙僧、吳道子、杜庭陸等の諸名家あり而して吳道子最も寫生に長じ後吉以て北字畫祖と稱せり、其他王維あり、摩詰と稱す、山水巖石風雲を畫くに長ず即ち所謂文人畫にして後世以て南宗畫の祖となすものは是れなり。

二八 唐代に於ける佛教の概畧を記せよ

唐は南北兩朝の文化を融合せるのみならず、更に之に一段の進歩を加へ其學術文章は兩漢に拮抗し諸宗教も又大に興りしが就中佛教は隆盛を極め玄奘義淨の徒は印度に赴きて經論を集め、國に還りて之が翻譯に従事し善無畏金剛智不空の三僧は開元年間印度より來りて密教を傳へたり、時に佛教の分派は三論、法相、律、華嚴、天臺、眞言、禪

宗、淨土の諸宗ありて名僧前後輩出し其餘響延いて我日本にも及べり、然れども武宗帝
 炎は深く道教を崇びて佛教を斥け、寺院四萬を毀ち僧尼二十七萬人を還俗せしめたり。

二九 唐代に於ける道教の概畧を記せよ

答 唐は國姓李にして老子と姓を同じくせしより道士の道を信じて老子を祖先とし尊號
 を奉りて太上玄皇帝といひ、諸州に詔して觀を治めしめ、又公主を以て女冠と爲すに
 至りしが玄宗に及びて尊重殊に厚く各戸に道德經を備ふべきを命じ、帝自から註疏を造
 を崇ま館を開き崇元學生を置き又道德經を以て群經の首に列し貢擧の士に之を試みた
 り、初め東晉の道士王符老子化胡經を作り老子西域に入りて胡人を化したりと云ふや佛
 徒之を怒りて歷世論争せしが唐に至りて其の軋轢極端に達し武宗は遂に、趙歸眞の言を
 信じて痛く佛教を仰損したり凡そ秦漢以來帝王の道士の言を信じて仙藥を求むるを史
 に絶へずと雖も服餌禍を買へるは唐より甚だしきは無く、太宗、憲宗、武宗、宣宗の如
 き英主すらも皆之を免るゝ能はざりき

三〇 唐代に於ける外教の流布は如何

答 紀元後五世紀の頃基督教の一派なるネストリウス教即ち景教なるものは東羅馬帝國
 の首府コンスタンチノウポリスより逐はれてシリア波斯に入りしが其後益々東漸してへ

ラット、木鹿(メルウ)サマルカンド(薩未汗)に及び紀元六百三十二年其の僧カロホ
 ンなるもの遂に長安に入れり、是より先き支那にはバクトリアのザラツストラが創めた
 る拜火教即ち祆教と波斯の摩尼が創めたる摩尼教との稍や行はるゝありしが、太宗の波
 斯寺を立て、景教を奨励するに及び摩尼教は僅かに回紇間に行はるゝに過ぎざりし又回
 教も大食人の海路廣州杭州等に来りて通商を試むるに及び其地方に傳播せり
 蓋し耶蘇教の支那人に入りしは、唐の時代なり羅馬人カロホンの經典を奉じて長安に至り
 しに太宗の貞觀九年にして帝は房玄齡をして之を受けしめ、詔を四方に下して之を崇奉
 せしめたり。

三、五代

三一 五代とは如何な時世をいふや

答 唐の滅亡より宋の興起に至るまでを五代の代と稱す、此の時代は強大なる邦國相踵
 て支那域外に起り屢々内地に侵入せり、五代は梁、唐、晉、漢、周の五國相繼て河南の地に
 興亡せしが故なり、而して史家は前代の國號を分たんが爲めに國號の上に後字を冠せし
 め、後梁、後唐、後晉、後漢後周といふ、而して此間僅かに五十四年に過ぎずと雖も、
 八姓、十三君を経、又群雄の方隅に割據する者前後十二國に及び紛亂休止する所なく

文化全く地に落ちたり。

三三 五代の世方隅の割據する群雄の國稱を擧げよ

五代の世豪族にして國を成せるもの十二あり、即ち燕、岐、前蜀、後蜀、楚、荆南、吳、南唐、吳越、閩、南漢、北漢是なり

三三 五代の世梁初の形勢は如何

初め梁の太祖の位に即くや從來各地に割據したる藩鎮は帝王と稱し晉、岐、蜀、吳、吳越、燕、閩、楚、南漢の諸國並び立ち中には梁の正朔を奉じたるものもありしと雖も實は列國と異なる所なく、殊に晉は強大にして屢々梁と輸贏を争へり

三四 梁晋の交戦を記せよ

晋ハ李克用の子存勗に及び兵威轉だ盛んにして連に梁に勝ち又燕を滅し遂に河北を平げて益々梁に迫れり、時に梁は太祖己に崩じて子末帝位瑱に在り力を盡して晋軍を禦ぎしも其功なく存勗遂に汴を陥れて帝位に即き都を洛陽に遷しぬ是を唐後唐の莊宗帝となす

三五 後唐及晋後蜀を記せよ

後唐の莊宗岐を服し蜀を下してより漸く奢侈に耽りて國政を治めず、伶人を寵遇して宿將を疏んにければ、民心日に離背し李嗣源、將士の推す處となり、汴(洛陽)を陥れて帝位に即けり、是を明宗帝となす、明宗聲色を好まず宦官に任ぜず、兵革用ふるも罕にして海内粗小康を得しが、帝崩じて閔帝從厚嗣立するに及び、李從珂石敬瑭の盛名を思みて之を殺かんさしければ從珂先づ兵を擧げて篡立し、敬瑭は契丹と合して從珂を伐ち洛陽を陥れて帝位に即き都を汴に定む、是を晋(後晋)の高祖皇帝となす、此間荆南の節度使高李興は南平王となり西川の節度使孟知祥は後蜀を立てぬ。

三六 契丹の勃興を記せよ

契丹は東胡の遺種にして潢河(内蒙古)の北即ち鮮卑の故地に據り、元魏の始より漸く盛なりしが唐の時は叛服常なく梁の初め耶律阿保機出づるに及び奚、靺鞨、女真等を併せて帝位に即き、都を臨潢(黄河の北)に定めて孔子廟を作り、又シリア文字に倣ひ始めて契丹字を製り、之を頒行せり、是を契丹の太祖といふ、太祖南は晋を侵して其北境を畧し、西は吐谷渾、黨項等の諸部を畧して磧西諸城を取り、東は渤海を賈めて忽汗城を拔き渤海王を降して、國號を東丹後又遂に改めしが、是歲太祖崩じて次子太宗

德光位に即き果敢勇決なる述律太后政を執れり既にして太宗の石敬瑭を助けて後晋を立てしむるや、太宗は其報酬として今の直隸山西の北部に歳貢帛三十萬匹を得、臨潢を以て上京とし、幽州(今の北京)を以て南京とし、遼陽を以て東京となしぬ

三七 後晋の契丹に臣従たりし事蹟を記せよ

〔答〕 後晋の高宗石敬瑭は契丹に媚事して臣と稱し常に使聘を通じて歡心を得るに汲々たりしが、姪出帝重貴嗣立するに及び孫と稱して、臣と稱せざりき、是に於て契丹の太宗は兵を率ゐて後晋を侵すも前後三回遂に太梁を陥れて重貴を廢し國號を建て、遂に云ひ兵を縦ちて四方を剽掠せり然れども盜賊所在に蜂起し太宗は大梁に居ると僅かに三月にしく軍を旋したりしが疾を得て遂に崩じ、姪世宗帝阮述律太后及太弟を幽して位に即く、是より先河東の節度使劉知遠は太原より進みて大梁に入り自ら漢家の裔と稱して國號を漢といへり、是を後漢の高祖帝となす。

三八 後漢を記せよ

〔答〕 後漢の高祖劉知遠崩じて隱帝立つ、隱帝の時三鎮將並び反し二敵國之れに應援す、隱帝乃ち權臣郭威に命じて之を討たしむ、亂平きて後隱帝郭威を除かんを欲す、郭威兵を擧げて反し遂に隱帝の叔父劉崇之を討たんとしたれども其の已れの子劉資を立てして

開きて止む、會契丹入寇す、郭威之を拒がんとして發す、澶州に至れば部下の將士大謀して之を擁して之を擁し或は黃旗を裂きて之を其の體に被らし、或は之を扶抱して萬歳と叫ぶ、郭威乃ち自立し、新主を廢し尋て之を弑す、此に於て劉崇、後漢の十二州を取り晉陽に帝位に即く是を北漢とす、北漢は後ち宋に亡ぼされたり。

三九 北漢と後周を記せよ

〔答〕 後周の太祖は後漢の權臣郭威にして、北漢の世祖は後漢隱帝の叔父劉崇なり、當時南唐の李璟は楚を滅して湖南を取り、南漢の劉晟は嶺南十三州を取り更に交趾を征して失敗せり

四〇 後周の徑畧を記せよ

〔答〕 後周の二代世宗は太祖の養子なり、世祖の時北漢主復た契丹の援兵を藉りて入寇す、世宗親征して大に北漢、契丹の兵を高平に破る、世宗は天資英邁文武兼備の良主にして天下を一統するを以て畢生の願となし、蜀を攻めて其四州を取り、南唐を伐ちて江南の地を割き契丹を伐ちて諸州を復す不幸にして半途に病死す、年三十九、其功獨り征討の事に止まらず、政治の上にも制度の新定改革少ならず、三代恭帝の時契丹入寇す、權臣趙匡胤征討の命を受けて發す、陳橋驛に至れば將士是れに黃袍を被らして以て萬歳と

呼ぶ恭帝即ち位を譲る是を宋の太祖とす。

四一 新羅の衰亡と高麗の一統を記せよ

新羅は唐末眞聖王曼に至り、政を安幸に委れて國大に亂れ弓裔は北原に叛し、甄萱は完山に據りて、國を後百濟と稱し、韓地復三分せり、已にして弓裔の臣王建業に推されて王位に即き國を高麗と號し都を松岳（京畿道開城府）に定め、平壤を以て西京とせり、是を太祖神聖王といふ時に西紀九百十八年なり是に於てか弓裔は走り死し新羅は好を高麗に通じて後百濟に當り、後百濟先づ滅び、新羅是に次ぎ三國復た一に歸しぬ

四、 宋

四二 宋の帝業を記せよ

初代太祖は性質仁厚にして恩を以て下に臨む、西紀九百六十年後周恭帝の讓を受け帝位に即き、僭偽諸國を討滅し學を視、儒を敬し、文化勃興の基を開けり、又痛く藩鎮の跋扈を憂ひ其の權を釋き文官を以て州郡の事を司らしむ、此に至り唐朝以來の大痼疾一朝にして解く、太祖の帝業を佐けたる者を趙普といふ

四三 交趾の國狀を記せよ

宋太祖即位するや、諸將を遣りて僭偽諸國を征討せしむ。荆南、湖南、後蜀、南漢、南唐相次ぎて滅び宋の南境は交趾に接したり交趾は吳氏衰へて群雄亂を作せしが、驩州（安南國）の刺史丁部領遂に之を一統して自ら大勝王と稱し、長子丁璉は南漢の滅後宋に入貢して交趾郡王に封ぜられき、太祖崩じて弟太宗立つや吳越王は上表して其地を獻じ北漢は太原を守る能はずして降り天下始めて一に歸せり時に西紀九百七十九年なり、翌年交趾の大將桓黎丁氏の衰微に乗じて之に代り一旦宋兵を撃破したりしが其後更に好を宋に通じぬ

四四 澶淵の盟とは何ぞや

宋の太祖の南方諸州一統の後北方の遼（契丹の改稱）ハ一旦宋と好を通ぜしが宋の北漢を滅し、勢に乗じて南京を圍むや、二國の和また破れ彼我互に攻伐して宋軍概れ利あらずし、已にして遼は聖宗帝隆緒位に即き承天太后政を攝し耶律休哥南面の軍務を督し東は高麗、女眞を服し、西は黨項を破り、遂に大舉して南侵し進んで澶淵直隸省大名府を圍みぬ、時に宋は太宗の子眞宗位に在り、親ら兵に將として赴き援ひ、遂に澶淵の盟を結び宋は銀十萬兩絹二十萬匹を遼に贈り且つ宋を兄とし遼を弟とすべきを誓約して各兵を解けり

四五 西夏の勃興を記せよ

澶淵誓約の前後に當り宋の西邊に一大強國起れり、西夏即ち是なり、唐末黨項の拓跋思恭なるもの兵を起して黃巢を討じ功を以て李姓を賜ひ定難の節度使となりて夏州に治せしが、子孫相次ぎて五代に臣事し、李繼捧に至りて宋に入朝せり、然るに族弟李繼遷は銀州に據り或は遼に降りて夏王に封ぜられ、或は宋に附きて節度使となり、叛服常ならず其子德明も亦宋遼兩朝に臣事し然も本國に於ては帝と稱しき、子元昊嗣立するに及び文武官を置き蕃漢學を立て自ら蕃書を製して國人に教へ、回鶻を撃ちて悉く河西の地を取り、今の陝西甘肅の北境及内蒙古の西部を有して興慶に都し自から大夏皇帝と號せり、時に宋は仁宗帝禎位にあり、韓琦、范仲淹を用ゐて西邊守禦の任に當らしめ、僅かに西夏の南進を妨ぐるを得たりき。

四六 宋と遼夏との關係を問ふ

遼の興宗帝眞は宋の西夏と難あるを機として關南の地を求めしかば富弼使者となりて遼に至り反覆論難して地割くを拒み遂に絹十萬匹銀十萬兩を増すべきを約して通交を恢復するを得たり、翌年宋は又西夏と和し、銀綺絹茶二十五萬を贈り李元昊を冊して夏國主とせり、斯く宋は歲幣を二國致すも夏に對しては賜と云ひ、遼に對しては納と云ひ

き。

四七 宋の四代より六代までの治蹟を畧叙せよ

四代仁宗は天資慈仁、守文を旨とし萬民の涵養に務む、是れ其の屈辱を忍びて遼夏二國と和を修めたる所以なり、仁宗の在位四十二年天下治を稱す五代英宗は仁宗の子なり英宗死し太宗の曾孫神宗立つ六代神宗は英邁にして遼夏二國に對する屈辱を雪がんと欲し先づ富國強兵の策を講ず、偉人あり王安石と稱す、帝に任用さる、安石其の黨と相謀り祖宗の遺法を廢し頻りに新法を布く、其の非を論ずる者陸續輩出せしが安石は皆是れを排して新法を強行せり。

四八 宋代朋黨の軋轢を記せよ

宋は國初より黨派の争ありて大臣の交迭頻繁なりしが、仁宗に至つて最も甚だし、一は韓琦、范仲淹富弼、歐陽修等を首領とし、一は夏竦、王拱辰等を首領とし、兩黨内閣に出入するこゝ二十年間凡そ十七回に及べり是を慶曆の黨議といふ然れども韓琦、范仲淹の黨概れ勝を制し、慶曆以後は賢臣朝に滿ち、國內平穩なりしと雖も吏治愉惰にして兵備振はず宋の威徳は遂に漢唐の盛時に及ぶ能はざりしぞ遺憾なる

四九 王安石の新法とは何ぞや

〔答〕 安石神宗に任用されて參知政事となり、先づ富國の策を計る是に於て制置三司條例を立つ、即ち新法なり、曰く青苗、曰く均輸、曰く豫買、曰く保甲、曰く保馬、曰く募役、曰く市易、曰く方田均稅、又科擧の法を改めたり。

五〇 何故に新法の非難ありしか

〔答〕 王安石の制定せし新法は決して誹議すべき性質のものにあらず、されど之を行ふに其人を得ず、且つ祖法に違ひ、民情を察せざりしを以て上下是を不便とし、富弼、司馬光、蘇軾、程顥、歐陽修の徒交々起ちて新法を駁論し皆其職を罷められたり、然れども怨議愈々起り帝も亦新法を疑ふに至りしかば安石は其黨韓絳、呂惠卿を薦めて自から位を去りしも、一年ならずして再び朝に入り、相たる事二年にして致仕し、其黨代りて政を執れり、是を以て新法は依然として續行せられぬ

五一 新法の性質を畧記せよ

〔答〕 青苗の法は常平倉の糶米を以て青苗の法に作り、人戸に貸し付け、利息三分を共に秋穂の時に當つて之を收むるを謂ふ、均輸の法は發運使に命じて之を領せしめ凡そ上

供の物は皆賈を徒し、賤に就き、近きを用ひて遠きに易ふる事を得るものを謂ひ、預買の法は豫め京師にある所の倉庫の辨すべき所のものを知り、各々其便宜に蓄買して之を待つものをいふ、又保甲の法は十家を保せし、五十家を大保せし、十大保を都保せし衆の服するもの二人を選り都保正副せし凡て丁保には自ら弓箭を置き武藝を習ふ事を聽したるものをいふ、次に募役の法は人戸をして等第免役錢を輸し人を募りて役に充たしむるものをいふ、市易の法は京師に於て市易務を置き先づ官錢を出して商業を營み、以て利を得んとするものを謂ふ、保馬の法は凡そ五路の戦の馬を養はんを願ふものあれば、補償せしむる法を謂ふ、方田均稅の法は東西南北、各々千歩、四十一頃六十七畝に當る、百六十歩を一方せし、歳毎に九月を以て令して地を分たしむ、地を驗し肥瘠を計畫し分て五等せし、稅數を均足せしむる法を謂ふ

五二 新法は何人に因て廢止されしか

〔答〕 七代哲宗幼にして位に即く、祖母政を聽く之を宣仁太后といふ太后乃ち新法の反對者司馬光を相せし之を謀りて新法を廢止す、此に於て新法賛成の黨は排斥せられて新法反對の黨用ゐらる、太后は仁德高く司馬光又人望大なりし、二人既に朝にあり、天下復た太平ならんせしに光は在職八ヶ月にして死し尋で又太后も崩せり

五三 三黨の争を記せよ

【答】司馬光死して後其黨即ち新法反對の黨は統一を缺き自ら分れて三黨となる。一に洛黨、二に蜀黨、三に朔黨といふ。洛黨は程頤を首領とし蜀黨は蘇軾を首領とし、朔黨は劉摯を首領とし、而して三黨の軋轢は新法論者の利する所となる。哲宗親しく政をなすに及び紹述の論發す、紹述の論は神宗の遺志を紹述して新法を復活せしむる論なり、此に至つて新法論者復た用ゐられ其反對者又排せらる

五四 女眞の勃興を記せよ

【答】宋、遼の末運に際して東胡の別種なる女眞族は新た遼の東方に起れり女眞は其先を黑水靺鞨と云ひ、粟末靺鞨の渤海を建つるに及び之に役屬せしが、契丹の渤海を滅すに至り分れて二となり、混同江（今の松花江）の西南に居るものは籍を契丹に入れて熟女眞といひ、混同江の東に居る者は契丹に屬するのみにて生女眞と言ひしが其後遼帝興宗の諱を避け、眞を改めて直となせり、生女眞は道宗の時完顏馬古廼の始めて、之が節度使となりしより兵勢漸く強く孫阿骨打に至り遂に遼に背きて帝と稱し、國を大金と號しぬ、是を太祖武元帝となす。

五五 宋金の連合と遼の滅亡を記せよ

【答】八代徽宗の時嬖臣童貫あり、金と連合して遼を撃たん策を献じ、策用ゐられ、宋乃ち軍を出して金と共に遼を攻む、金軍は連戦連捷、遂に遼を亡ぼせしが宋軍は童貫を將として毎戦敗北せり、故に宋は金と戦利を分つに當り、前約の如くするを得ず、僅かに燕京と六州を得たりしかど歳幣四十萬と燕京代稅壹百萬緡とを金に與ふるに至り、其の得失相償はざるの結果を見たり。

五六 金人の入寇を記せよ

【答】北宋が金と共に遼を亡ぼしたるは自ら藩屏を毀ち、却りて寇敵の侵入を容易ならしめたる所爲といふべし、宋が遼の叛將亡徒を收むるに及び、金は以て口實となし、軍を出して北宋を撃つ、徽宗懼れて位を遜る、九代欽宗に至り金軍大舉して汴京を圍むに至り和を乞ひ金五百萬兩、銀五十萬兩、牛馬萬頭、表緞百萬匹を與へ且つ金主を伯父と稱し中山、太原、河間の三鎮を割き親王宰相を質とす、時に名將李綱和議を非とし、防戦を主張したるも其言用ゐられざりき。

五七 北宋の滅亡を記せよ

【答】北宋の滅亡を速きしは、金と連合して遼を亡ぼせしに因る。九代欽宗の時金軍大舉して汴京を圍むに至り和を請ひしが、幾くもなくして金人復た入寇し汴京陥り、徽宗、欽宗、后、太子宗室臣三千人皆捕はれて金に送らる。此に於て皇弟構南京に即位す、之を南宋の高宗とす、徽宗、欽宗共に金に殺せり、是に於て北宋は滅亡せり時に西紀後一千百二十七年なり。

五八 北宋滅亡の遠因は何ぞ

【答】北宋は建國の當初より外交上遼に、半途より夏に、歳々幣帛を輸りたり、國家滅亡の端實に是に發す、新法と黨議とは會々古流の厄を醸し、爲に國家の命脉を蹙めたり、蔡京の専横、童貫の跋扈、徽宗の奢侈は益々國家の衰頹を速き、金の一打撃を以て、遂に國家滅亡せり。

五九 宋室の南遷を記せよ

【答】汴京陥りて高宗南京に即位するや攻戰の主義を固執す、然るに幾くもなく中原を棄て、江を渡る、金人中原を取り長驅して高宗を逐ふ、高宗頗りに南逃して寧波に至り遂

に海に航して温州に走る、時に南宗の叛臣劉豫金の爲めに立てられ自ら帝と稱し、國を齊と號す、初め、大名府に都し後に汴京に遷る、屢々援を金に假りて南宋を攻む、より先群民戰亂に乗じて諸方に蜂起し國患を爲すこと久し。

六〇 秦檜の和議は如何

【答】南宗の高宗即位十二年都を臨安に定む、此の頃金と好和の議起る、之を首唱するものは秦檜、王倫の二人にして之を非とするものは武人一般、並に儒者なり、時に諸將の中岳飛、勳功最も盛にして威大に中原に振ふ、秦檜おもへらく、岳飛を殺さざれば和成らずと乃ち岳飛を殺す、高宗即位の十五年和議遂に成る。

六一 秦檜の和議の條件は如何

【答】和議の條件は中原は淮水を以て界とし、陝西は大散關を以て界とし、南宗は歲貢銀二十五萬兩絹二十五萬匹を金に與ふるとす、秦檜和議を以て己れの功とし、權を竊み威を弄し、多く正議の人を害せり。

六二 南宋歴代の事蹟を記せよ

【答】二代孝宗は銳意恢復を計り、師を出して金を伐らしが戦利あらずして和を議す、其

後大に内治に務む四代寧宗の時韓侂胄なるもの擁立の功を貢ひ威權を弄し僞學の名を以て趙、如愚、朱熹其他賢良の士を貶謫す、時に金は紀綱漸く弛み、兵勢日に弱し、韓侂胄之を幸とし兵を出して金を攻む、然るに宋軍敗績し金軍侵入す、南宋即ち和を請ふ、金乃ち首魁を誅罰し歲幣の銀絹各々三十萬兩犒軍費の銀三百萬兩を求む、南宋止を得ずして之に應ぜず。次で寧宗の即位二十年元人連りに金を攻めて其地を掠めしが、金は元に失ふ所を南宋に償はんとして南宋を攻む、南宋能く之を拒ぐ、五代理宗即位の九年元、南宋と兵を合せて金を伐ち、同十一年遂に之を亡ぼす、金の亡べる翌年元は遂に南宋に入寇せり。

六三 南宋の滅亡を記せよ

答 七代恭宗即位の年國都臨安陥り帝、太后、共に元人に捕はる、皇兄端宗、福州に即位し、難を海に避く即位の三年綱州に病死し、其弟昀立つ、時に端宗年十一、帝昀年八歳なり新會の崖山に遷る、其即位の二年崖山に陥り、帝海に赴きて死す此に於て南宋亡ぶ

六四 南宋滅亡の原因を記せよ

答 南宋は元人の侵寇するこゝなしとも滅亡を免かれざる原因は存せり、縱令元の起る

と無しと雖も金にして亡びんば金必らず宋を亡ぼさん、南宋は建國以來小にして兵弱く、常に強大の敵國を有し、加之君主多くは凡庸にして小人相續ぎて朝政を亂り、善類を害して自滅の策を採りしなり、

六五 南宋の末路に出でし義烈の士を擧げよ

答 南宋の末義士烈人多く輩出せり、其主なるもの文天祥、張世傑、陸秀夫、謝枋得とす蓋し宋末國歩艱難の際に當り是等義烈の士を出せしは太祖興學の結果なるべし。

六六 文天祥等の忠勳を記せよ

答 南宋の七代恭帝の時元兵勝に乗じて入寇し、諸州相繼て元^入に下る、是に於て令を四方に發して以て王に勤めしむ、時に文天祥あり、民兵二萬人を募りて宮闕を守る、張世傑も亦兵を以て入衛す、時に州郡連降し、元兵臨安を距る僅かに百里に過ぎず、天祥、世傑等能く拒ぐ、然るに宰相陳宜中和を主とし、天祥等に詔して兵を罷めしむ、已にして天祥執へられ、後屈せずして死す、元兵臨安に入る、賈餘慶帝及び皇后を奉じて之に降る、是に於て陸秀夫、張世傑等端宗を福州に立つ、元更に弘範を以て都元帥となし、李恒を副となし、師を帥めて宗を伐つ、端宗軍に崩じ、陸秀夫帝昀を立つ、之に於て陸秀夫張世傑と共に内は政務を調へ外は軍旅を籌る、既にして伯崖軍を進めて崖山に入り

世傑の舟に過らしむ、弘範軍を分ちて四軍となし、南北より世傑を夾撃す、宋軍大に潰ゆ、陸秀夫等事の去を知り、帝を抱て海に投ず、世傑更らに後舉を圖らんと欲し逃れて安南に赴かんさす、未だ至らず颶風の覆す所となりて而して死す、高宗建炎より是に至る九世百五十三年にして亡べり。

五、宋代の文化

六七 宋代の官制を記せよ

答 宋時の官制大率唐の制に因るも雖も三師三公は之を置かず、政事堂に居り、樞密使は樞密院に居り、共に天下の大勢を執る、又別に諫院を置き、諫官の職を設けて以て執政者を彈劾するの權を有せしめたり、是故に諫官の權却て首相に勝り、政治の得失人物の良否も自由其論議する所となる、是故に帝王の宰相を任ずるも必ずしも三省の長官を用ゆるにあらずして輿論の力に藉りしが如し、故に宋代に在りては言論の自由前後に超絶し、頗る立憲的の政体に類するを見る、其他財政は悉く三司に隸し、四方の大鎮には牧尹の官を置き、親王の特任さす、されど財賦甲兵の權を委任せず、州郡には牧守を置き京官を以て權知し、三年毎に交替せしめて其職を世襲するを許さず、是れ宋は唐の藩鎮に懲りたるが故に地方官の權を軽くせんが爲めに斯る手段を取りしものなるべし。

六八 宋代の兵制を問ふ

答 宋は藩鎮の弊に懲り、即位の初首として趙晉に問ひ、諸の節鎮を止め、兵權を中央政府に掌握して將帥に重權を委ねしめす而して兵員は凡て志願者を召募し唐初府兵の制の如く人民に兵役義務を負はしめず、當時兵制分つて三とす、曰く禁軍曰く廂軍、曰く鄉兵是なり禁軍は天子の近衛兵にして京師に駐屯するもの各州の兵員中より精強なるものを撰んで取る、廂軍は諸州の鎮兵にして志願者より採用するもの、鄉兵は所在の土民を團結して兵事を訓練せしめ防守の役に充てしものなり

六九 宋代の學制は如何

答 學制は都城に國子監を置き後改めて大學と稱す、大學に上内外の三舍あり、每舍各生徒を有し毎年試業を行ふ、神宗、哲宗以後其の生徒漸く多く、往々團結して黨をなし政府の所置其宜しきを得ざる時は乃ち直ちに建言する事を得宋の南遷するに及び始めて大學を抗州城内に設けたり

七〇 宋代の税制は如何

答 宋の時人民より徵集する賦税は分ちて五種とす第一種公田賦は官田を人民に耕作せ

しめ其祖を徵集するもの第二種、公田賦は民田より徵集する租税、第三種、城廓賦、宅地税の類、第四種、丁口税、人口税、第五種、雜變税牛革鹽等各地の土産より徵集するものなり、而して是等の賦税徵集の期限は毎年夏秋の二季となせり、當時歳出入の数は歳入一億五千〇八十五萬緡錢にして歳出一億二千六百七十七萬五千緡なりといふ、而るに南宋に至りて兵戈相繼ぎ屢々重幣を敵に輸して以て和を請ひしより國用益々給せず、賦税の繁多なる前代の比にあらざりしといふ。

七一 宋代の儒學を問ふ

答 秦漢以來儒學は徒らに章句訓詁の學となりしが、宋に至りて一變し、始て窮理の學となり幽玄なる哲學的の組織を備へて大に先儒の未だ言はざる所を發せり、所謂宋代性理の學是れなり、蓋し魏晉以來道佛二教の流布已に久しく學者往々之を研究し遂に性命理氣の説を創めて以て佛敎に對するに至りしなり

七二 濂洛學派とは何ぞ

答 宋代儒學の盛なるは仁宗の時に始まり、濂溪の周敦頤共城の邵雍、實に其の先輩なり、二家の學は固き道家より出でしが敦頤は是によりて太極無極の説を演じ通書及太極圖説を著し雍は是によりて天地の消長を推論し皇極經世を撰めり、次で程顥、程頤の

兄弟出で、周氏の説を祖述し一は定性書を著して明道先生と稱せられ一は易傳及春秋傳を編みて伊川先生と稱せられたり、時に關中に張載あり、洛陽の二程と相對して盛名を競へり、是より學者各々其の所見を逞ふし派を分ちて相争ひ所謂洛黨蜀黨、朔黨の目ありき

七三 朱元晦、陸象山の學術は如何

答 宋室南遷後蜀黨朔黨並に衰へて程子の學獨り盛なり、閩中の朱熹に至りて遂に之を大成せり、其學敎に居りて理を窮むるを要せし欲を去り性に反るを以て主とせり、故に之を道學又性理學といふ、著述頗る多く四書集註、小學近思錄、通鑑綱目等其重なるもの多し、同時に江西に陸象山あり、兄九齡と共に別に一派をなし、徳性を尊ぶを以て主とし、學は悟入にありと説き以て朱熹の問學を本とすに反し二派毎に相争へり、又金は中原に據ると百年文士乏しからずと雖も儒家としては僅かに趙文秉あるのみ、次で蒙古起るに及び程朱の説始めて河北に入り宋の既に亡滅に至るも猶宋學は盛に行はれたり。

七四 宋代の史學は如何

答 宋の時國史院を置き日々時政を記せしめたり、是を日曆といふ、當時史學は頗る發

達し宋祁、歐陽修の新唐書あり、薛居正の五代史、歐陽修の新五代史あり、司馬光が政治の沿革を主として編纂せる資治通鑑は事實文章共に頗る卓抜にして後世歴史家の稱する處たり、又馬端臨の文献通考は歴代の制度典章を知るに缺ぐべからざるの良書なり

七五 宋代詩學及文藻を記せよ

宋時は唐代に繼て詩文學の隆盛を極めたる時代なり而して當時其の尤も著明なるものを擧ぐれば歐陽修、蘇東坡、蘇子由、王安石、曾鞏の徒あり、蘇軾（東坡）蘇轍（子由）共に蘇洵の子にして皆文章に傑出す、之を三蘇といふ、後世、三蘇及安石、歐陽修、曾鞏の六氏を擧げて唐の韓退之、柳宗元と并稱して唐宋の八大宋と稱す、其他范中淹范祖禹皆文名あり、南宋の世に及んで岳飛、文天祥、謝枋得、陳亮等あり皆慷慨氣節の文章を以て著る而して胡詮の封事文天祥の正氣歌の如き慷慨悲壯頗る後世の傳唱する所なる而して枋得が編次に係る文章軌範は今尙世に行はれり。又宋代の詩は唐に及ばずも名匠大家も輩出頗る多く歐陽修王安石の如き文に巧みなるも共に又詩を能くせり、其他陸放翁、揚成齋、朱熹、文天祥、謝枋得等皆又詩を能くせしが就中陸放翁に至つては天成の詩人にして其作概れ神品、唐の李白、杜甫以來の名手と稱すべし。

七六 宋代の書畫は如何

宋朝第一の畫家を李公麟とし第一の書家を蔡襄とす、公麟は佛畫を能くしに山水を能くせり、太宗、王庭堅は書を善くし、徽宗、釋巨然は畫に巧みにして蘇軾、米芾は書畫兩道に達したり

七七 宋代の本草學は如何

支那にて本草の學は醫學と兼行し既に獨立の一學科となり唐以來之を講習するもの漸く多く従つて著書の世に出づるもの亦少からず、宋の初世に當り陳日華あり最も本艸に精しく、宋代諸家の本艸に關する著述を擧ぐれば、丹溪の本艸衍義、吳文炳の食物本艸、龐安時の本草補遺等最も著明なり。

七八 宋代の佛教は如何

唐より五代を経て宋に至り佛教稍々盛なるに従ひ次第に宗派の數を増すに至る、而して宋時行はれしものは三論宗あり、法相宗あり、華嚴宗あり、禪宗あり、律宗あり、天台宗あり、眞言宗あり、而して其最も行はれしを禪宗とす、其他各宗並行はれしと共に高僧碩德陸續輩出して若かり禪學を講習し、其風引いて儒者の間に及び當時の鴻儒碩學に至るまで皆其の感染する處となり。

〔答〕工業は宋代獎勵を加へしが故に江浙、江西、福建、西蜀の地は既に織物、染工、製紙、製茶等の業著るしく進歩せり。京師には綾錦院なる織物工場ありて盛んに錦綾を製出し、洛陽には絹織工場あり、江寧府には織羅務あり、梓州には綾羅場あり、大名府には縹緞工場あり是等皆官設の職工場にして盛んに錦綾を製出したり、又安徽江西は製紙を以て聞へ、江西は製陶を以て名あり、實に宋代は支那歴史中其の政治上の力の振はざりに引かへて工場製作の盛なりし時代といふべし。

七九 宋代の工業を畧記せよ

八〇 宋代外國の交通は如何

〔答〕日本と支那との交通は、菅原道真が遣唐使を廢し國權を代表するの欽差を止めしより従つて士人の支那に渡航する事を嚴禁せしかど僧侶及買人の如きは公然之を許可せしかば是等の人にして時として方物を宋に獻せしものあり且つ宋朝よりも日本に來朝するもの多く時としては本邦に歸化するものあるに至れり、而して當時外國の交通は獨り日本のみならず、近くは南洋の諸島、安南、交趾の諸國より遠くは歐洲の南部に至れり而して當時行人の最も著明なるもの之を伊太利の人ニコルキユスとす、大陸を旅行して宋に至り、漢土の風物土産を詳かにせり漢後歐洲の支那に至るもの之を以て始めとす。

第五章

近世史

一、元朝

元朝、明朝、清朝。

一 蒙古の勃興を畧記せよ

〔答〕蒙古人が支那全部を一統せしは其五代の主即ち世祖忽必烈の時でありしも其の始めて興りて國を成せしは世祖の祖父即ち太祖の時に在り、太祖姓は奇渥溫名は鐵木眞と云ふ、漠北蒙古の地に起りて諸民族を服し、遂に幹難河上に大汗の尊位に即き自稱して成吉思汗といふ、尋て金を侵し、夏を滅し、中亞の諸國を征し、波斯印度を討つ、二代の主、太宗に至り金を滅して支那内地の大半を占領し、五代の主世祖に至り南宋を亡ぼして支那の全部を一統せり、蓋し蒙古は固ま黒龍江の上流、幹難河畔に遊牧せる一種の種族にして世々賁を遼と金とに納めたりしが也速該(エスガイ)即ち元の烈祖と稱するもの出づるに及びて漸く近隣諸部を併呑し其子奇渥溫鐵木眞に至り遂に帝位に即く。時に西紀千二百〇六年なり。

(註)蒙古は中央亞細亞に帝業を創めし一大種族なれば其の勃興せし詳細記述は別に印度、朝鮮等と同じく中央亞細亞蒙古の部に譲る

二 元初の外征を記せよ (其一高麗)

答 元の世祖支那全部を一統するや勢に乗じて高麗王を介して我日本を招諭せり、是より先き高麗は權臣政を専らにし箕弒相繼ぎ契丹の遺種は南下して大同江を渡り國を立て、大遼と號し女直の遺種は遼東に據りて東眞と號せり時に高麗は高宗王位に在り東眞蒙古と結びて漸く契丹を討平するを得しが、尋て高宗の臣林衍の爲めに廢せらるゝに及び當時蒙古に質たりし太子俱は蒙古の援を得、林衍を滅して王位に上りぬ、是を元宗とす、是より高麗は全く蒙古の一屬邦の如く和州及慈悲嶺以北の地は蒙古の版圖に歸しぬ

三 元初の外征を記せよ (其二日本)

答 元朝が未だ支那を統一せざりし以前より屢々使を日本に送りしが日本は之に應ぜざりしのみならず却て其使者を斬り又元軍の對馬壹岐に寇するを防ぎて大に之れを破りしかば、世祖は征東行中書省を高麗に設け元宗を以て左丞相とし着々軍備を整へ遂に元兵十萬高麗兵一萬戰艦四千艘を派し、壹岐を取り博多に向ひしも日本軍能く防ぎて上陸する能はず偶々颶風大に起りて戰艦沈没し元兵生きて還れる者僅に三人、日本歴史に所謂

弘安の役たるものは是れなり、元の敗績と日本の富強とは當時世祖に往へたるマルコポーロの紀行によりて歐州諸國に知られたり

四 元初の外征を記せよ (其三、緬甸、安南)

答 緬甸は風に印度恒河河畔の地と交通を有し十一世紀より十三世紀に亘りて國勢頗る振ひしが、元の大理國を平げたる後使を遣はして之を招降するや國王敢て命を奉ぜず、依て世祖は乃ち兵を派して之を討平せしめたり、又安南は陳氏の祖陳照の時占城の來侵を擊退し又兀其合台と戦ひて互に勝敗ありしが遂に朝貢の約をなし、占城眞臘と共に元の封爵を受け元は安南行中書省を置きて三國を統御したり、然るに陳照の孫吟の代占城其險遠を頼みて元の命を奉ぜざりしかば世祖は道を安南に假りて之を征せんことを陳吟却て拒守の計をなし元と戦ふ事前後に回なりしが子焯立つに至り復元に入貢し占城と婚してその二州を得たり其後數年にして瓜哇も又元の侵襲を受け是に於てか蒙古の版圖は前古無比の廣大を致し東は高麗に至り西は黑海に及び北はキルギスを包み南は占城を極めたり。(中央亞細亞部参照)

五 元の世祖の内治を問ふ

答 元の世祖頗る意を内治に留め官制を改め諸官の長には必ず蒙古人を用ひ、漢人の兵

器私藏を禁じ、又文學を崇び諸宗教を厚遇し、殊に佛教の一派なる喇嘛教を契勵し其教主パヌバを以て尊師と稱す、初め世祖は屢々外國を征伐し或は多く藩主に賜與したりしかば、國用の不足を感じ爲めに聚斂の臣を用ゐて苛法を執行し、又交鈔、即ち紙幣を發行したり、然れども其後新舊交鈔の引替を罷め又毎歳多額の交鈔を濫發せしかば物價騰貴して財政日に紊亂し喇嘛教僧侶の跋扈と相表裏して以て元室の衰亡を招ぐに至れり、

六 元朝歴代の事蹟を記せよ

答 忽比烈以後の元朝歴代中著るしき事實なし、初代太祖より五代世祖に至る間は支那統一以前に屬するを以て別に蒙古勃興の部に於て詳述せん、唯世祖の天下一統後に於ては十代泰帝の時權臣燕帖木兒の謀逆ありしのみ

七 元朝の亡滅を問ふ

答 元朝の亡びしは十四代順帝の時なりし、順帝は嬉戯に耽りて政治を忽にす而して宦官權臣相表裏して朝政を亂り、變民群盜相率ゐて天下を擾亂す、時に黄河潰決し之を治むるに兵民十七萬人を役す、此に於て人心益々洶々豪傑終に並び起る、其の豪傑中最も大なるを朱元璋と云ふ、朱元璋の軍、帝都を襲ふに至り順帝夜中に出奔す、此に於て元亡ぶ、時に西紀後千三百六十八年なり、朱元璋は後に明の太祖となりし人なり。

八 元朝衰亡の重なる原因を擧げよ

答 元朝に國患七あり、一諸侯の強大、二、門族の横暴、三僧侶の驕横、四、宦官の跋扈、五、人權の優劣、六、制度の不完備、七、財政の紊亂、等なり、元來元朝は漠北に封建の制を布き諸皇族をして遠征に従はしめ征討頻繁にして勳功の内族多く且つ佛教の一派喇嘛は元主の篤く信する所にして其僧侶は甚だしく跋扈、宦官權臣相表裏して權柄を把り、朝政を紊り且つ官省の長は専ら蒙古人を用ゐて漢人を用ゐず制度は不備にして宰相の權力甚だ大なりし等の諸原因は實に國家亡滅の基となりしなり。

二、元朝の文化

九 元代に於ける外國交通を記せよ

答 元の太祖師を率ゐて諸國を征服し四方の人材を登用せしより當時東西の交通俄かに開け外國人の來りて太祖の幕下に屬するもの頗る多く、即ち阿羅思(露西亞) 太食(阿拉比亞) 猶太の諸國を始めとして遠くは英吉利、以太利、の諸國に及べり而して、就中尤も著るしきは伊國人マルコポールなり。彼は伊太利ヴェニツ人の人なりしが元に事へて功最も高し、後大陸を旅行して國に歸り亞細亞大陸旅行記を著し併せて日本の風土を記

載せり、又世祖に至り我日本に書を贈り其交通を求めしも書辭無禮なりしより再三其使を捕斬せられ、遂に大兵を擧げて日本を攻撃せしも空しく北條氏の爲めに掃蕩せられたり、是より日本との交通は遂に行はれざりしも南方亞細亞諸國交通頻繁なりし。

一〇 元朝の人材登用は如何

答 元朝の支那統一に就て重大の力ありし補佐の臣を遼人耶律楚材といふ實に元朝の元勳ともいふべき人物にして博識多才の俊傑なり。耶律楚材と共に帝業を佐けたるものは伊國人マルコポーロなり、楚材は編輯所、經籍所の總裁となり、ポーロは樞密副使となり、此の外西藏喇嘛僧八思巴なるもの帝師となり、猶太人愛薛(シヨセフ)翰林學士となり、波斯人アームツト宰輔となりたり、此の如く元は國初以來人を用ゆるに國の内外を問はず規模宏遠實に世界を併呑するの概ありしなり。

一一 元朝の宗教を概記せよ

答 世祖の支那を一統するや漢人の心を收めんを欲し一方には文學を興し一方には佛教を信ぜしめたり、是故に元朝は前代に比して文學及佛教の隆盛を見るに至れり、又回々教は唐代既に支那に入りたれども其後史上に著るべき事蹟を見ざりしが元朝に至り其部下に阿剌比亞、波斯の國人ありて是を信仰するもの多かりしが故に當時回々司天臺の設

あるに至れり。次に耶蘇教も又唐代既に支那に入りしが其後元朝に至りシユース派の耶蘇教徒も支那に入りたるを見れば同教の行はるゝに至りしは既に元代より始まりしものと如し

一二 元朝の喇嘛教を記せよ

答 元の世祖が西藏制御の一策として用ゐし喇嘛教は元と祈禱禁咒を主とせし佛教の一派にして七世紀の頃印度子ホーッより西藏に傳來せしものなり、八思巴以來帝師は歴代元の帝室の崇信を受け其の宣命は詔勅と並行し、其派の僧侶は利を貪りて飽なく近侍に營結して布施を奏請し元の社稷は遂に是が爲めに仰ぐに至れり

一三 元朝の文藝を記せよ

答 元代の詩文は概して見るに足るものなく、僅かに元好問一人あるのみ然れども戯曲小説は元代に大成して以て明清に及べり、漢以後詩に樂府の一體ありしが宋に至り、詞餘となり元に至りて戯曲となり、南北の別ありき南曲は高則誠の琵琶記を以て北曲は王實甫の西廂記を以て白眉となす、又小説には施耐庵の水滸傳七拾一卷あり、結構文章共に千古に冠絶せり、又史學には帖木兒等の編輯せる遼、金、宋、の三史あり、畫家には陳仲仁、顔珣、張嗣城あり、書家には趙子昂、鄧文原明の徒ありき。

一四 元朝の儒學を問ふ

【答】 世宋の時耶律楚材が經籍所を平陽に立て經史の編輯に従事してより其後又揚惟中太極書院を此地に起し伊洛性程の學を講じぬ。其後成字の時金履祥あり論語孟子考證の著あり英宗の時に吳澄あり易春秋筮言の著あれども要するに儒學は到底文藝の盛大なりし十一にも如かずりし。

一五 元代の政治は如何

【答】 元の太祖始め沙漠より起し部落を併呑し攻伐止む時なし、此時に當り官制の組織も又至つて單簡なりしが太宗金の地を併呑するに及び官制を設け世祖天下を一統するに及び制度を考定し、稍完備の域に進めり、今其の組織を擧ぐれば中央政府には中書省ありて民政を總轄す、長官を中書會同といふ大抵皇太子を以て是を兼れしむ、次に左右丞相あり機務を參決す、樞密院は兵事を掌るも長官を知院とし次を周知さす、御史臺は政事の得失を糾察する事を司り長官を太夫とし次を中丞といふ、其他吏部、禮部、戶部兵部、刑部あり各自部務を管理す地方部は毎路に總管あり路内政務を管理す其下每府に府尹、每縣に縣尹ありき

三 明朝

一六 明の興起を記せよ

【答】 明の太祖、姓は朱、名は元璋、江東の句容の人なり、始め僧となりしも元末の亂に際し還俗して諸豪傑と中原を争ひ、遂に能く志を達して帝業を成せり、抑も元の末主順帝の時方國珍なるもの浙江に亂を作すや、其後傑輩出し割據して國を成し自ら稱して帝王と云ふ、其一人郭子興は今の安徽に起れり、朱元璋一時之れが部將たりしが幾くもなく去りて自ら江南の地を取り、金陵を根據の地となし國を立て、吳と稱す、其後漸次方國珍及其他の諸豪傑を討滅し、更に將を遣はして元の大都燕京を攻めしむ、元主順帝乃ち北走して上都に據る、此に於て朱 璋帝位に登り國號を明と攻む實に西紀後千三百六十八年なりき

一七 明初に於ける僭偽諸國を記せよ

【答】 明主朱元璋即位の始め敵國未だ盡滅せず長城の外に元主順帝あり、雲南に元の遺族梁王あり、四川に僭偽の國夏あり、之れに加ふるに南方に諸蠻あり朱元璋將を南北に遣はして順帝を逐ひ梁王を討ち夏國を滅し、諸蠻を平けたり。又朱元璋を佐けて帝業をな

さしめたる者は劉基、宋濂等の良佐、徐達、常遇春等の名將なり。

一八 明の太祖の治を問ふ

初代太祖の政治計策中最も重要なものは左の如し。

- 一 皇族を封じて王となせし事
- 二 宰相專權の弊を除きし事
- 三 地方吏員の選任を嚴にせし事
- 四 租税を経て納税の法を寛にせし事
- 五 科擧の法を定め都鄙に學校を興せし事
- 六 大明律(刑法)を定めし事
- 七 元の胡俗を禁し唐の衣冠に復せし事
- 八 宦官參政の因を絶ちし事

一九 永樂の變とは何ぞ

太祖崩じて太孫惠帝立ち漢の七國を削平せし例に倣ひて着々諸藩王の地を削るや、燕王棣は自ら安んずる能はずして靖難の兵を起し互に勝敗ありき、己にして燕王は宦官の内應によりて京師の空虚なるを知り大擧して之を陥れ自ら帝位に上りて永樂と改元せり、是を成祖帝とす、方孝孺以下節に死する者頗る多し成祖即位以來諸侯の地位を復し州縣の租税を減免し刑罰の施用を嚴にし又儒學を奨励する等諸政多く太祖の遺謀を襲げり、大學士の漸く機務に參し他日宰相の實を有するに至りしは此頃より始めり。

二〇 明初に於ける蒙古韃靼を記せよ

明の初世元の遺族は尙和林に據りて明の境上に寇せしが順帝の子脱古思帖木兒の歿後、殺逆相次ぎて國勢衰へ千三百九十九年鬼力赤なるもの篡立して國を韃靼とし又可汗と稱せり、己にして其臣阿魯古之を殺して元の皇族本雅失里を迎へ明使を殺して其招諭に應ぜざりしかば、成祖親ら大軍を率ゐて來り攻め本雅失里を斡難河上に破りぬ、時に蒙古の瓦剌部勢ひ漸く強く本雅失里を殺し又明に通じて阿魯臺を除かんさせしかば、阿魯臺は却て明に内附して瓦剌を撃たんとを請へり、然れども幾くもなくして又背き、瓦剌瓦真哈と同じく邊境に入寇し成祖は都を北京に徙して屢々之を親征せり。

二一 明初に於ける朝鮮を記せよ

高麗は忠烈王以後國王の廢立より官名廟號等に至るまで諸事悉く元の干渉を蒙りしが十四世紀の事頃恭愍王願立つに至り始めて元の羈絆を脱をぬ、然れども當時外は倭寇及紅頭賊の來侵するあり、内は武臣の功を恃み權を争ふありて國威振はばりき尋て明起るに及び一旦其正朔を奉じたりしも恭愍帝より四傳して辛禰に至り元と通じて明を攻めんとし、崔瑩李成桂等をして兵を率ひて遼東を攻めしめたり然るに李成桂は遂に變心し、崔瑩を商峰縣に流し辛禰を江華島に遷して其子辛昌を立て復之を廢して恭讓王を立て遂

に其讓を受け使を明に遣りて國號及び封冊を受けたり、是を朝鮮の太祖康獻王とす爾後朝鮮は歴世明に朝貢して深く恭順を表したり

二二 明代に於ける倭寇とは何ぞ

答 元主忽必烈の東征後日本と元との貿易は唯商船僧侶の私に通ずるのみなりしが元來明初に至り我が西陲の船舶の支那朝鮮の沿海を剽掠するもの多く張士、成方國珍の餘黨も又之に加れり、是を倭寇といふ、高麗の恭愍王辛禰及び明の太祖は屢々使を日本に派して屢々沿海の侵畧を禁ぜられん事を請ひしも其効なく、太祖は沿海各地に防倭衛府を設けて之に備へたり既に將軍足利義滿は使を明に遣り成祖の封を受けて日本國王となり、鎮西に令して海賊の明を侵す者を捕へしめ又諸國守護に命じ商賈に勸めて明との貿易を行はしめぬ、凡そ日本の支那と大に交通するもの前後二回、前には唐と通じて其制度文物を摸倣し後には明と通じて其工藝美術を移殖せり我國の工藝美術の足利氏に至りて俄に前代に超越するに至りしは職として是れに由れり

二三 明朝歴代の重なる事件を擧げよ

答 明の二代建文帝は太祖の孫なり太祖の太子早く死せるを以て立つ、太祖の孫燕王胤傑を作し帝を逐ひて自立せり、三 成祖は都を南京より北京に遷す屢々襲征して北朝を敗

り遠く師を派して安南を畧せり、五代宗の時は明の全盛時代にして宣宗心を政治に留め租税を軽くし賢士を登用す、漢王の反逆あり外天下太平無事にして北朝の入寇もなかりし六代英宗に至り北朝瓦剌の入寇に遭ひ大敗して虜さなる此に於て帝の弟立つ即ち七代景帝なりし景帝即位の七年に疾あり英書皇城の門を奪ひて入り景帝を廢して自ら復位す、英宗以後災禍頻りに發せり、外敵の入寇するあり藩王の反するあり、群盜の起るあり、宦官の相繼て朝政を亂り、善類を害し朝廷朋黨をなして相殘害し、士氣大に銷沈するに至れり。

二四 明代藩王の反逆を記せよ

答 藩王の反するは封建の通弊なり、明代藩王の反逆を謀りしものにて最も著るしきは燕王の反、漢王の反、寧王の反とす、燕王の反は二代建文帝の時に在り漢王の反は五代宣宗の時に在り、寧王の反は十一代武宗の時にありき抑も二代建文帝の時諸王漸く横恣にして朝廷を凌ぐ、謀士數輩あり帝に勸めて諸王を廢錮竄殺せしむ。是に於て皇叔燕王は君側の賊を誅し、兄弟叔姪の究を救ふを名として兵を擧げ相戦ふ事數年、燕王遂に帝都南京を陥れ、皇帝の位に即ち即ち明の三代成帝とす、尋て五代宣宗の時皇叔漢王反す四代仁宗の時漢王怨む事あり、反を謀らん欲す、仁宗崩じ宣宗嗣ぐに及び遂に發す、奸臣を誅するを以て名とす、宣宗賢臣楊榮の言を聽き親ら兵を將めて漢王を征す。

漢王下りて亂平く、十一代武宗は小人を用ひて遊戯を事とし、政道を失ひたりしかば、盜賊蜂起し天下大に亂れたり、是より朝政小人輩の專にする處ろとなり寧王非望を抱き此輩に依り事を成さん欲し謀洩れしかば即ち兵を擧ぐ然れども遂に官軍の爲めに敗らる、當時鎮定の功最も大なる者を王守仁とす、王守仁字は伯陽、陽明山人と號す、即ち大儒王陽明是れなり、

二五 明代宦官の跋扈を記せよ

答 明の太祖大に宦官の弊を懼れて嚴密なる禁戒を施したり然れども三代成宗の時此の禁戒破れ宦官政に預る其後歷朝宦官威を弄し權を恣にして朝政を亂り國患を醸す、其甚だしき者四人あり王振(六代英宗に仕ふ)汪直(九代憲宗に仕ふ)劉瑾(十一代武宗に仕ふ)魏忠賢(十六代熹宗に仕ふ)、就中魏忠賢は驕態度なく、車馬服裝を天子に擬し朋黨の事に干渉して多くの正士を害せり

二六 明代朋黨の軋轢を記せよ

答 明の太祖天下を一統して後講學を獎勵せしが、是れ偶々朋黨の因を爲したり學者黨派をなして互に排斥非難し或は廟堂大臣を彈劾し、或は其力によりて敵派を殺害するに至れり十四代神宗の時朋黨殊に盛なり、時に東林黨、非東林黨、相攻め相撃つ、事甚だ

し、十六代熹宗の時朋黨の軋轢益々激烈を加へ東林黨一時大に勢を得しが幾くもなくして敵黨に困めらる宦官魏忠賢熹宗の乳母容氏と交りて權を専らにす、非東林黨之と結託し此附援引して其の黨與を薦め東林黨の名簿を作りて漸次に誅戮を行はしめたり。

二七 明代の外患を記せよ

答 明室が外敵としたるもの五あり一に蒙古、二に瓦剌(エーラツト)三に韃靼、四に日本人、五に滿州人はなり、蒙古は明の太祖に攻められ中原の地を失ひしが其後久しく漠北の地を有し屢々明の北邊を侵せり、三代成宗親征して之を破るこゝ數回遂に南京の北邊の守兵を送るに不便なりとて都を燕京に遷せり、又瓦剌韃靼は始め共に蒙古に屬せしが後獨立して國號を稱せり、六代英宗の時宦官王振瓦剌の怨を買ひ其酋長也先(エツセン)の入寇に遭ふ王振英宗に勸めて親征せしむ、英宗土木に到り也先の計に陥り、大敗して虜囚となり、也先乃ち英宗を擁して北歸す、是れ所謂はゆる土木の變なり、七代景帝の時也先復た寇し進みて帝都を圍む援兵四集し也先を撃ちて退く、次で十二代世宗の時韃靼の酋長卜赤(ホチ)並に其從弟俺答(アンタル)屢々入寇す、特に俺答は牛、馬、羊豚、金帛、子女を抄掠し中原の害を成すこゝ甚だしかりき當時日本人の支那東岸に貿易するもの事によりて憤怒し江蘇浙江の沿岸を侵辱し、遂に進みて南京を攻む始め日本の浪士(南北朝の時)内地に志を得ざるもの漸く遠航して朝鮮支那の沿海を侵す然

るに貿易の道漸く開くるに及び倭寇を止めて貿易に従事せしが、世宗の時に至り復た倭寇せり、是れ明人の倭寇と稱して最も恐れし所なり、尋で十四代神宗の時日本の武將豊臣秀吉兵を派して朝鮮を征せしかば明之を救ひしが大敗して和を乞へり、

二八 明末の大亂を記せよ

答 明十七代毅宗の時國事多端にして變亂内外に發し外には滿洲人の入寇あり内には關賊、獻賊等の流賊蜂起し將軍吳三桂等戰ふ毎に滿洲人の爲めに敗らる流賊の長を李自成張獻忠とす、凶歳に乗じて陝西に起り明兵と戰ひて互に勝敗ありしが年を経るに従ひ勢漸く強く、獻忠は湖南四川の各地に侵入して成都に據り、自成は陝西河南を席捲して西安に據りて國を大順と號し山西を抄掠して京師に迫れり因て朝廷は滿洲人防禦の任に當れる吳三桂を召還したれども未だ到らずして京師已に陥り、帝は萬歲山に崩じ自成帝位に登りぬ是に於て吳三桂は滿洲人に降り其援兵を藉りて李自成を討ち大に之を破る、然れども燕京は遂に滿洲の人の據る處るとなり此の後明の遺族は江南に據て、恢復の業を謀れり。

二九 明室の滅亡を記せよ

答 十七代毅宗崩する時十四代神宗の孫福王淮安に在り、立つて帝と稱す尋て遷りて南

京に都す、滿洲人江を渡りて南京を陥る、帝は太平に走り滿洲人に據らる、時に福王の子唐王福洲に在り、立て帝と稱す、其他明室の王族兵を起して割據を謀るあり、然れども滿洲人に敗られ帝も又廢にせらる是に於て神宗の孫、永明王肇慶に即位す、滿洲人廣洲を陥れて肇慶に向ふ、帝西奔して梧州に徙り北走して桂林に至る其雲南に遁れ終日緬甸に入りて蠻會に依る、吳三桂來り撃つに及び蠻會帝を執へて下る吳三桂乃ち帝を滇城に奉す其後二年帝並に太子害に遭ふ明室終に亡べり時に西絶後千六百六十三年、とす

三〇 明末鄭成功の事跡を記せよ

答 鄭成功は明の將官鄭芝龍の子なり、明室既に亡ぶと雖も其正朔は鄭氏尙ほ臺灣に奉じり初め唐王の帝たりし時芝龍廈門に據り勢尙ほ大なり帝の滿洲人に虜させらるゝに至り其招に應じて降る、然るに子成功尙ほ明室を恢復せんを欲し盛に兵を南澳に集め船艦を率ゐて江に入り都城を復する事多かりしが終に大敗して退きて臺灣に據れり、永明王の捕はれし翌年成功病みて死し子經嗣ぐ其後十九年經死し子克嗣ぐ後二年滿洲人に攻められて降る此に於て明の正朔全く絶ゆ初め鄭芝龍難を日本の平戸に避け其の地の女を娶りて成功を生む成功其主より姓を朱と賜はる故に世人之を國姓爺といふ

四、明朝の文化

三二 明代の儒學を記せよ

答 明の太祖は頗る教化を重んじ京師には國子學、地方には府州學を設け科擧には鄉試會試殿式を行ひ成祖は又四書五經大全、性理大全を編纂せしめて之を大小學校に配附せり、而して科擧經義は一に程朱の説により薛瑄以來其說益々行はれしが、王守仁出づるに及び學術始めて分れ守仁を宗とする河東派と守仁を宗とせる姚江派とは各々門戸を立て相争ひしが、守仁の説は陸象山に基き格物致知は之を心に求め之を事物に求むべからずとせり、此派を一に王學と云ふ、後顧憲成の學を東林に講ずるに及び門戸の争益々甚だしく遂に黨議を爲して傾軋するに至りぬ

三三 明代歴史學を記せよ

答 太祖即位の二年詔して元史を修めしむ民間の著書に於劉剡が纂集せる宗元通鑑あり剡は史材に富めるの士、其後に曾先之の十八史畧あり十八史を抄畧して之を編次せしもの、開國以來三千年の歴史簡約其要を得たり、蓋し十八史とは史記、漢書、東漢書、三國史、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、後魏書、北齊書、後周書、隋書、南史、北史、新唐書、五代史、

宋鑑なり。

三三 明代の文藝書畫を記せよ

答 明朝詩文大に起り宋濂方孝孺は文を以て高啓袁凱は詩を以て名ありき、十五世紀の末より十六世紀の初に亘り李攀龍(字は于鱗)王世貞(元美)の徒出で、復古を唱導し又は秦漢に詩は初唐に法るべしと説き談藝の士翕然之を宗とせしが明末歸有光、陳子龍出づるに及び力めて李王の説を排し文壇復た一變せり、史學には宋濂等が編せる元史あり、戯曲小説も又頗る盛にして西遊紀、金瓶梅等の好著あり、畫家には仇英沈周あり、文徵明は書畫共に秀でたり。

三四 明代に於ける天文地理學は如何

答 天文學は古來支那の長ずる所なり而して天文學に西洋説を注入せしは遠く唐代に始まりしが如し、降つて明に至り西洋傳教師の支那に寄留せる者漸く多きに及び當時人民の其説を排斥する者又甚だしければ、是等の徒は天文學に托して其非難を免れたり、萬曆年間陽瑪諾なるもの天問畧を著はす日月の運行より晝夜の長短晦朔、弦望交食の淺深に至るまで一に之を圖説し指證詳明極めて良著となす、剏瑪竇も又天文に通じ崇禎歷書の如きは實に其の釋譯に出でしといふ、明亡び清興るに及び世祖意を歴法に用ひ官人に

命じて更に曆書を撰せしむ、時憲曆是なり西洋天文學の行はるゝや實に是より始まるこ
いふ。又地理學は明時東西の交通開けしより西洋の學術従つて傳來し當時既に西洋の風
俗民情を記載せる地日書の如き世に出づるもの少なからず、東西洋考職方外記坤輿圖の
如き最も著名なるものなり。蓋し支那に於ける葭國地理書の權輿たり。

三五 明代の本艸學は如何 (本艸綱目)

答 本草學は明代に至りて頗る進歩の域に入りぬ、明の初方如川なるものあり頗る此學
に精通し動植物を諸國に採集し本草單方を著はす其後王倫、王蘆あり皆此學を能くす其
他張樹震、黃濟之、周憲王等あり憲王が教著本草は草木花實根幹食ふべきもの四百餘種
を記載す、其後時珍なるものあり家世医を業とす幼にして書を好む三十餘年の星霜を閱
し八百餘家を講究して一大著述をなす本草綱目是なり、博引旁搜網羅餘す處なく、實に
東洋に於ける一大植物字彙にして史家之を東洋の林那斯とす、時珍は蕪州の人字は東
壁瀨湘と號す。

三六 明代の喇嘛教を記せよ

答 喇嘛教は明の中葉宗喀巴なるもの新義を唱へてより分れて三派となり、八思巴の開
きたるを紅教と云ひて其徒は紅衣を着し、宗喀巴の創めしを黃教と云ひて其徒は黃衣を

着したり是より紅教は痛く衰へしが宗喀巴死するに及び弟子達賴喇嘛及班禪喇嘛は各々
其統を繼承し達賴は前藏に居り班禪は後藏に居り已に化身轉生を以て教を傳ふるものこ
せり

三七 明代の基督教を記せよ

答 基督教はツエスイト派のミゲルサーロ一千五百七十九年を以て澳門に來りマテ
オ、リツナーは尋で廣東に來り千六百〇一年遂に燕京に達し深く神宗の信任を得たり、爾
來諸僧陸續として支那内地に傳道し大學士徐光啓の如き有名なる信者をも得るに至れり

三八 明代の法制を問ふ (大明律)

答 支那の法律は明代に至つて最も整頓するに及びぬ、當時制定せしものは後世の所謂
大明律なるものなり律分ちて名例律、禮律、兵律、刑律、工律等となし之を小別して四百
六十條となす、刑法は笞、杖、徒、流、死の五等となし其別大率隋唐に異ならず蓋し明の法
制は其整頓遙かに隋唐の上に出しと雖も律令繁多なるが故に有司従つて文を舞はし奸を
營むの弊あり明宗、英宗以後朝廷に詔獄を設け法律上死罪に該當せざるものも時として
帝旨を以て之を投獄する等の事ありしより其法制漸く亂れて有名無實の空文となるに至
りぬ

三九 明代の兵制を問ふ

【答】 明の兵制は中央集権を主として地方分理を避けたり故に宋と同じく能く藩鎮強傲の弊を避けしと雖も亦衰弱救ふべからざるに至れり。明の兵制分ちて二とす。禁旅十二衛は即ち近衛兵にして衛所兵と稱するもの即ち全國の鎮臺兵なりし、是を以て明の初世は其兵精強なりしも後漸く惰廢し憲宗の時より十二衛は宦官を任用し衛所兵は買替苟免する事を努めて衛所常に老弱の兵を存じ緩急の用に應ずる能はざるに至れり。

四〇 明代の税制を問ふ

【答】 明時税制は分ちて祖役の二種とす。祖は田に課す、官田毎畝五升三合民田毎畝三升三合、重租田は八升五合、没官田は一斗二升を課す、又徵租の期は春秋二季とす。役は丁に課す、洪武の初一頂毎に丁夫一人を出し三十日間役に供せしむ後之を改めて百十戸を以て一里とすし里毎に二十甲を置き毎甲貧富に従ひて分ちて上中下の三等とすし力を量り役に供せしむ

四一 明代の工業を問ふ

【答】 明代官室屋宇の建築家内の用器金銀玉石の器具裝飾品等精巧を極め、建築彫刻の造

歩せる實に此時代にあり製絲織布の業は江蘇浙江、安徽等最も盛にして政府は南京に機房を設け又蘇杭に織染局を置けり又陶器製造の如き江西景德鎮に中官を派出して御用瓷器を製造せしめたり。有名なる江寧府磚塔の如き明代の建築に係り、高さ二百九十一尺皆陶を以器て製造せり又以て當時瓷器製造の盛なりしを見るべし。

四二 明代の商業を問ふ

【答】 明時の海外貿易は洪武の初舟船司を寧波、泉州、廣州の三所に設け、寧波は日本貿易場とし、泉州は琉球貿易場とし廣州は占城暹羅、西藏諸國の貿易場とす又葡萄牙人は廣東香山澳に通商し漸次繁榮に至れり其後和蘭人は臺灣を占領し淡水鷓籠に堡塞を建築し商館を開設して福州沿岸と往來通商せり、此頃露國人は既に黑龍江畔に居留地を設けて北京地方と商業を行へり又我日本の通商は明初より漸く盛にして足利氏の中世に至り其交通最も頻繁に至り大内義興細川高國等は皆商賈を派遣して貿易に従事せしめたりと云ふ

四三 泰西器物の傳來を記せよ

【答】 支那にて銃砲に火薬を使用せしは元代に始まりしが明の世祖交趾を平ぐるに及び神機鎗砲を傳へ、神機營を置けり、次で嘉靖年中佛郎機砲を傳へ、萬曆年中紅夷砲を傳ふ

共に西洋火砲なり、明以後西洋の交通盛に行はるに至り文明の利器従つて漢土に傳來するもの頗る多く時計、風琴、望遠鏡等の如き諸物は當時既に漢土に傳來せり。

五、清 朝

四四 清の領土の廣大なりし事を記せよ

答 清は西紀後千六百十八年に起り今日に至る、其領土の廣大なること支那歴代中元を除き他に之あることなし、而して支那内地の外に蒙古部、回疆部、滿州部、西藏部を併有せり、清の代歐洲の諸國漸く亞細亞の諸方を蠶食し其領土は清の領土と相接するに至れり、其境を接する國は英、露、佛、等にして亞細亞州中の國は唯日本あるのみ、近時獨逸も又一部の地を借りて漸く接近するに至れり

四五 清朝の創業を記せよ

答 清は姓を愛親覺羅と云ひ、其太祖の名を努兒哈赤(ヌルハチ)といふ、西紀後千五百五十九年滿州の赫圖阿拉に生る其先は代々蠻酋たり、太祖年二十五歳の時國人に推されて貝勒(酋長)となる、當時漢東に四蠻國あり滿州、長白山、東海、扈倫、といふ、滿州、長白山は明領瀋遼の東に在り扈倫は滿州の北に在り東海は滿州の東に在り、太祖

遠近の次第を以て此等諸國を征服す、西紀後千六百十八年太祖衆酋の勸めにより覆育列國英明皇帝と稱し之を建て、天命とす翌年大舉して明を伐つ、其順の瀋、遼二州を取り都を遼陽に遷し之を盛京と稱す、太祖薨じ二代太宗立ち朝鮮を征伐し明を攻め蒙古を伐ち、滿州を改めて清と號す、群臣に諭して滿州の言語衣服を保存せしめ、且又其子弟をして書を読み以て忠孝の道を明かにせしむ。

四六 清の太祖の雄圖を記せよ

答 太祖即位の始朝鮮を征して之を下し遂に大舉して明を征し連戦連勝向ふ處皆風を望み迎へ降る是に於て國號を立て、清と稱す、此時に當り明政已に衰へ四方群盜蜂の如く起り流族李自成等兵を擧げて四方を剽掠し荐りに諸郡を陥れ遂に京師に逼る明帝其難に死す、是に於て明將吳三桂授を清に請ひ其轡を報せんことを、清即ち兵を遣はし北京を衝き大に自成を破る、清師遂に北京に入る清因つて三桂の爵を進めて平西王とすなし令を出して官民をして服を除き髮を辮にして悉く清制に遵はしむ

四七 吳三桂の叛を記せよ

答 四代聖祖即位の初平西王吳三桂兵を擧げて叛し檄を遠近に移し清の制を廢して髮を蓄へ衣冠を明の制に復さん欲す、諸豪傑之に屬し兵勢益々熾なり、聖祖諸將を遣はし

て之を征す、勝つ能はず、而して賊勢益猖獗州郡争つて之に響應す是に於て自立して帝と稱し昭武と改元す、聖祖即ち諸將を分遣し四方より三桂を攻めしむ、諸將向ふ處る稍く勝を制し次第に州郡を回復す、三桂疆土日に蹙まり勢稍く衰へ遂に病で死し軍氣俄かに沮喪し、將士降るもの稍く多く騷亂始めて定まる。

四八 清聖祖の世に於ける著明の事蹟は何ぞ

答 鄭成功の臺灣割據、并に其の降伏、二明室の全滅、三吳三桂の反、四露西亞と黒龍江境界の議定、五朔漠の蠻商カルタンの叛、並に聖祖の三親征、六耶蘇教の禁等なりとす

四九 喝爾丹の事蹟を記せよ

答 内蒙古のサツカル、トムツト、カルタスの諸都府は太宗の時既に清に降りしがカルカス即ち外蒙古は元の後裔なる土謝圖汗、東臣汗、札薩克圖汗之を分領し又漠西にはエーラツトの四部準噶爾(シユンガル)トルバツト等相并立して猶清に降らざりきカルタン、シユンガル王となるに及び他の三部を併せ、また回部(天山南路)の亂に乗じて之を畧し更にカルカスを侵せしかば其三汗は走りて清に投せり、因て清の聖祖はカルタンに諭してその侵地を返還せしめんせしにカルタン敢て命を聽かず、進みて内蒙古を侵しければ帝は兵を遣はしてウーランブートンに克ち和を議し振旅せり已にしてカルタンは達

頼喇嘛と隙を生じ其頼むべからざるを見るや當時中央亞細亞より伊犁地方に至るまで一帯に蔓延せる回々教徒の勢援を假りて清と争はんを欲し自ら回々教を奉じ大舉してカルカスに入れり是に於て聖祖は十五萬の大軍を發し費揚古をして第一軍に將たらしめ薩布素をして第三軍に將たらしめ、自から中軍に將さしてカルタンが本據なる科布多(コブド)に向いて進み大に敵兵を破りぬ、時にカルタンは外征久しく故地シユンガには姪ツエークンアプタンの併す所となり、回部青海も又皆離畔して身を寄するに所なく遂に自ら毒を仰ぎて死し阿爾山以東の地は悉く清の版圖に歸せり。

五〇 明室の全滅を記せよ

答 明室は莊烈の崩するや兄福王由崧は南京に據り、史法可をして中原の恢復を圖らしめたり、因て清軍は南下して史可法を福州に殺し、江を渡りて南京を陥れ、福王を蕪湖に擒にし、殿に剃髮の令を布けり、是に於てか唐王聿鍵は帝位に上りて福州に都し、魯王以海は紹興に在りて監國と稱し江蘇江西之に響應しき已にして世祖は諸軍を發し碭山を平げ四川を取り、江蘇、江西を鎮定し又李自成を平げて湖廣を畧し更に浙江に入りて魯王を海上に逐ひ福建に入りて唐王を汀洲に擒にしぬ、然るに明の遺臣は更に屈する色なく、桂王由榔を肇康に立て唐王聿鍵を廣州に立てしか三王内に閱きて外清軍を防ぐ能はず唐王は執へられ、桂王は南寧に走りて亘其務を破りたりしが又破れて雲南に奔り

緬甸に入り、緬甸王に執へられ、遂に清營に送られたり。

五一 鄭成功の臺灣に據りし事蹟を記せよ

明の魯王が舟山島に據りしも清軍に破られて厦門に走り鄭成功に依るや成功の軍氣大に振ひ、使を日本に派して時の將軍徳川家綱に援兵を求め又鎮江南京を陥れたり、然れども日本は援兵を謝絶し清軍は鎮江南京を恢復し進みて明軍を撃破せしかば成功は魯王を奉じて臺灣に據りぬ、因て和蘭人は清軍と合して鄭氏の軍を破りたれども遂に臺灣を恢復する能はず、貿易は廣洲に於て之を營むとせり、幾くもなくして魯王成功相次で歿せしき雖も成功の子鄭經は猶臺灣に據りて明の正朔を奉じぬ、其後鄭經吳三桂と連和し、勢を合せて南清に威を振ひしが、清の水師提督施琅澎湖島より征服して臺灣に進み、鄭經の子克塽は衆寡敵せざるを知りて降を乞ひ、臺灣全く清の版圖に歸しぬ、

五二 黒龍江境界の議定を問ふ

吳三桂等の亂後世祖は力を北邊に用ゐて愛理城を築き使を雅克薩に遣りて露人に退去を諭し其應せざるや兵を出して之を抜き主將トホルツンを尼布楚に逐へり、然るにトホルツンは清軍の退去するに乘じ再び雅克薩に入りしかば聖祖は復大兵を派して之を圍み露西亞國帝ソホアのゴローヂンを使者として兩國境界を畫定せんを請ふに及漸く令し

て其圍を解かしめぬ、是に於て内大臣索額圖は尼布楚に於てゴローヂンと商議しヌタノナイ山脈コルビチ河アルゲン河を以て兩國の境界とし露人は雅克薩を毀ちて退去すべしとせり是れを尼布楚人の條約といふ、此條約は露國に取りて頗る不利なりしかばヒョートル大帝は常に其の改正を欲したるも本國內政の整頓に汲々たりしを以て之を改むる能はざりき。

五三 清朝の中葉以後に於ける重大事變を列記せよ

清朝は七代仁宗以後今日に至るまで凡そ一百年間國勢漸く衰へ境土漸く削らる、内には群盜蜂起して中原を擾し、外には敵國相踵で邊境を侵襲す、其敵國を稱するものは率れ白人種にして從來の歴史に於ける外敵即ち蒙古、匈奴の類に非ず、即ち亞細亞中央の異姓にしあらずして三千年の歴史上從來其試しあらざる歐羅巴人なり、即ち其の年間著大なる事變を列記すれば

- 一 白蓮教匪の亂天理教匪の變
- 二 鴉片事件
- 三 英佛連合軍北京攻撃
- 四 露清の國境協定(愛理條約)
- 五 長髮賊の亂

六 伊整事件

七 安南事件清佛戦争

八 日清戦争

九 義和團匪の亂(北清戦争列國連合軍)

五四 白蓮教匪の亂とは何ぞ

答 七代仁宗の時奸民が經呪を偽造し病を治め災を救ふを名として衆を集め以て亂をなせしものを白蓮教の亂といふ、江南、陝西四川、甘肅の諸地方是が爲め大に騷擾し凡七年にして始て鎮定せり、教匪の巨魁を劉之協、徐天徳、王三槐といふ

五五 天理教匪の亂とは何ぞ

答 天理教匪の變も又仁宗の朝の事なり、奸民太に聚り諸内官に通じ仁宗が巡幸して不在なるに乗じ宮城を襲ふ、奸民の巨魁は李文成林清といふ

五六 鴉片事件の梗概を記せよ

答 鴉片事件は八代宣宗、九代文宗二朝の間に於ける一大事件にして其原因は英國人が鴉片を清國へ輸入したりしを清國官吏之を燒棄したるに在り、之より先鴉片の輸入は清

國の禁ぜし所なるか禁は稍々弛みて宣宗の朝には其輸入二萬七千函の多きに至れり而して其鴉片を燒棄たるは兩廣總督林則徐なり、英人乃ち憤怒して廣東に寇す、清國は償金六百萬圓を出し英人の寇を罷む、會々英領印度兵三萬二千人澳門に至り寇復た發す、廣東、香港廈門等皆寇に罹る清國は銀二千六百萬兩を出し廣州福州寧波、廈門、上海、の五貿易場を開き、香港を割讓し以て英人と和せり。

五七 英佛連合軍の北京を攻撃せし顛末は如何

答 西紀後千八百五十八年廣東人英商の船を掠む、清國官吏其治罪の法を失しければ英人は佛人と兵を合せて入寇し、遂に北航して渤海に入り諸砦を破りて天津に至る、清朝大に懼れ、其強請の條件を聽て和を成す西紀後一千八百五十九年、英佛二國の公使天津に至り去年所約の事を問ふ進みて白河に至る、比ひ白河の守兵突然起りて之を砲撃す二公使僅かに身を以て免かる、翌年英佛二國は清朝の無禮を責めんとて、軍艦を派遣し渤海より天津に至り上陸して北京を攻む、清朝償金千八百萬兩を出し、牛莊、登洲、臺灣、朝州、瓊州、九江、漢口の諸港を開き以て和せり

五八 長髮賊とは如何なるものぞ

答 元來廣東廣西の地は基督教信徒殊に多し、千八百四十九年廣東の人洪秀全基督教を

利用して兵を廣西潯州府附近に起し、連りに廣西の各地を陥れて國號を立て、太平天國と云ひ自ら天王と稱しぬ、其徒皆髮を蓄ふを以て世に稱して長髮賊といふ、時に宣宗崩じて文宗帝交符嗣き咸豐を改元せり諸將を派して賊を討せしめしも賊勢甚だ猖獗にして過ぐる處殘破せざるなく、長州、岳州、武昌漢陽、皆陥り、秀全遂に南京に據りて制度律令を設け又兵を出して、屢々江北の各地を轉掠したり、時に刑部侍郎曾國藩の兵を湖南省湘鄉に起して武昌漢陽を復するに及び官軍頗る振ひしか、賊將再び此地を奪ひて勢を張り江岸、の諸州は云ふに及ばず、安徽、河南より直隸山西に至るまで皆其浸掠を被れり己にして賊軍中に内訌起りしかば、湖北巡撫胡林翼は機に乗じて漢陽武昌を復し曾國藩は又江西の諸賊を平定せり、文宗崩じて穆宗立ち同治と改元するに至り、洪秀全猶南京に據りて兵を各地に出せしかば、帝は始めて援を外人に求め、英米佛の三國は相議して其請求を容れ、米人華爾特(ワルト)英人戈登(ゴルドン)相次ぎて洋槍隊に將として毎戰奇功を奏しぬ、時に曾國藩曾國荃、左宗棠、李鴻章の諸將も又各々鄉勇を率ゐて各地を恢復し遂に南京を陥れて秀全を滅し十六年間の大亂始て平定に歸せり時に西紀一千八百六十四年なり

五九 愛理條約とは何ぞ

尼楚布の條約以後露國の東方經畧は着々其歩を進めたりしが將軍ムライヨフの東西

比利亞總督たるに及び黒龍江を採檢して江口に一城を築き時の露帝ニコラス一世の尊號を採りてニコライエヴスキと名づけたり已にしてクリミヤの役起り英佛二國の聯合艦隊は堪察加を襲ひしかば、ムラヨフは益々黒龍江地方占領の必要を感じ清に迫りて兩國境界の改定を求めたり然るに當時清は長髮賊の亂に加ふるに英佛との紛議あり廟堂頗る多事なりしかは亦北方露國と難を構ふる事を欲せず容易に黒龍江以北の地を割き、又黒龍、松花烏蘇里、三江の自由交通權を與へたり之を愛理條約といふ(一八五八年)次で露國はイグナチーフ仲裁の報酬として烏蘇里江東の地を得、境を朝鮮と接するに至れり

六〇 臺灣事件とは何ぞ

臺灣事件は十代穆宗の時なり、其原因は臺灣の蕃民が漂流せる日本人を殺害したるに在り、西紀後千八百七十四年日本政府は陸軍中將西郷從道をして兵艦五艘を率ゐて同島を征せしむ清國同島を以て其領とし撤兵を求む日本よりて參議兼内務卿大久保利通を北京に遣はして臺灣の所屬を議せしむ、議久しく決せず利道憤りて去らんす、英國公使之を仲裁して和議成る清國は撫恤銀十萬兩軍費四十萬兩を出し事熄むを得たりし

六一 伊犁事件とは何ぞ

伊犁事件は十代穆宗の代に起りて十一代今帝の朝に落着せり、露清兩國の間に係はる事件なり、初め伊犁の蕃民露商を害す、露將コルバフスキ―蕃民を討ち尋て露商の保護を名として伊犁を占領せり、清國即ち之が還附を露國に求め依て全權大使崇厚は露國に赴きリワザヤの條約を結び露國は伊犁返還の報として數回談判の末銀九百萬ルーブル及テケス河上流の地を得べきとを定め以て之を恢復したり、此の談判に與りしものは崇厚なりしも後には曾紀澤なりし

六二 安南事件とは何ぞ

安南事件は佛國と清國と安南の所屬を争ひし事なり、西紀後千八百八十三年佛人は事によりて安南を討ち之を占領して保護國となす清國乃ち異議を唱ふ且清兵は濫りに佛軍を襲撃せり、此に於て佛人償金を求めるも清朝聽かず、乃基隆を攻め、福州を襲ふ、清兵善く戦ひ、佛人志を得ず會々佛國政府變動あり遂に和を議す、清國乃ち佛國の安南保護權を是認せり

六三 日清戦争の顛末を畧記せよ

日清戦争とは日本と支那との大戦争にして西紀後一八九四年（即ち我日本明治廿七年）より其翌年に亘り初め朝鮮に内亂あり東學黨の亂といふ、朝鮮政府亂を鎮むる能はず援を清朝に乞ふ、之より先き日本清國と約して兩國の中いづれか一國が朝鮮の國事に關して兵を出す時は必らず其旨を他一國に告ぐるを以てす、是れ所謂天津條約なり、清朝は此條約により出兵の事を日本に告ぐ、日本乃ち亦兵を出す、朝鮮の亂民固より二國の大軍に敵する能はず驚怖して自ら潰散す、此に於て朝鮮の亂は局を結びたるに東洋の大亂新たに發せり、日清兩國遂に雌雄の決戦を開けり、朝鮮内地、朝鮮近海、黄河遼東、山東澎湖、皆戰場となる、日本軍は連戦連勝清軍を朝鮮より逐ひ遼東の原野を蹂躪して旅順威海の二關を畧取し澎湖の列島を占領し清の北洋水師を降して其殘艦を奪へり、清朝遂に全權大臣李鴻章を日本に派し和を請はしむ、明治二十八年三月廿一日和成る、之を馬關條約といふ、其個條左の如し

一 清國が朝鮮の獨立を認むること

二 清國が遼東半島、臺灣、澎湖島を割く事

三 清國が軍費の償金二億兩を出す事

四 清國が償金支拂の未済年間威海衛の占領を日本軍に許す事

等なりし時に露、獨、佛の三國は同盟して日本に告ぐるに日本が遼東を有するは東洋將來の平和を妨ぐるが故に之を清國に返還すべきを以てす日本之れを聽く清國は遼東還附

の報として三千萬兩を出す此に於て日清戦争の終局を告ぐ

六四 北清戦争の顛末を記せよ

答 日清の戦役了りて間もなく義和團と稱する一種の暴民北京附近に蜂起して列國公使館を包圍し、各國居留民に危害を加ふるの報類りなりしかば、大沽沖に集中せし列國軍艦は會議を開きて北京救援に向ひしが清國軍隊は義和團匪と合同して列國軍に抗敵し遂に一大戦争の端を開くに至りぬ所謂北清戦争なり、茲に於て各國政府は陸續本國より軍隊を派遣して聯合軍を組織し、天津より進んで北京を陥れ、遂によく公使館を救援せり、此の役六月上旬より起りて九月十五日に至る殆んど四個月に亘り各國の軍隊合計十萬以上及び其中日本軍尤も優勢なりし。

六、清朝の文化

六五 清朝の文化の梗概を記せよ

答 清國は領土廣く民種多きも能く統一して其文物も大に興れり、之より清國は明の遺制を襲ふも雖も力めて滿洲の國俗を保たんとせしを以て稍や蠻習夷俗を免かれざるが如し、然れども乾隆康熙の朝に於ては文物、頗る隆興して一代の偉觀たりし。

六六 清の官制を記せよ

答 官制は内閣を中心として大學士、協辦大學士、其職務に參し、吏、戶、禮、兵、刑、工六部の衙門之に隸し各々政務を分擔し軍機處は軍國の大事を處決し、總理衙門は外交の事を掌り、都察院は官吏を糾劾し、理藩院は内外蒙古部、天山南北路、西藏、青海等の政令を掌り道政使司は章奏を通達す、又地方には數省に總督あり、各省に巡撫ありて政令を統へ布政使は財政を掌り按察使は刑獄を理し、其他道臺知府、知州、知縣ありて民治を掌れり、但し滿州には將軍都統あり軍民を治め、別に盛京省には戶、禮、兵、刑、工五部の侍部あり、凡そ京官の人員は滿人漢人の數必ず相等しく而して人材の登用は多く癩試、會試の法に依れり

六七 清國の兵制を記せよ

答 兵制は陸軍を分ちて八旗、綠旗、鄉勇の三とし水師を分ちて北洋、南洋、長江、福建、廣東の五とす、八旗には滿州八旗蒙古八旗漢軍八旗あり、或は京師を護衛し又は地方に駐防す、每旗皆都統ありて之を統轄す、綠旗は明の滅後漢人を編制して各省に駐屯せしめたるものにして提督、總兵之を指揮す、鄉勇は長髮賊の亂に際して始めて召募せらるものにして亂後各省に置かるゝに至りぬ

六八 清國の財政を問ふ

【答】 財政は京師と地方とに分れ糧糧、造幣、關稅、鹽稅、茶稅、人參稅は政府の國庫に入るべき收入にして戸部之を掌り地賦丁賦、雜賦、耗羨は各省の收入に歸して布政使之を掌れり、地賦は夏稅、秋糧といひて毎歲二期に徵收し丁賦は成丁、未成丁、富戶、貧戶等の別を立て之を課し雜賦は課、租、稅、貢の四に分れ耗羨は地賦丁賦の定額外に課するものなり。

六九 清代の學術を問ふ

【答】 明末以來學者漸く性理の空疎なるを厭ひ古義を推備して臆淵の說を排斥するの學風起り顧炎武の如き實に其の稱首なり、是を考證學派と稱す、聖祖高宗出づるに及びて大に文學を獎勵し佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典、大清會典、四庫全書總目提要等を敕撰して經史の研究に資せしめしより考證學は益々盛行し岡若璩、毛奇齡、戴震等の諸大家前後輩出せり詩文小説戲曲も又盛行はれ多く名家を出す即ち小説に於ては紅樓夢の如き戲曲には李笠翁の笠翁十種曲の如き、又小説批評家には雷名ある金聖嘆の如き共に一代の巨匠たり。

七〇 清朝の歴史學は如何

【答】 清朝歴史の編纂されしもの少からず乾隆帝の批評を加へられたる御批通鑑、輯覽、張廷玉等の明史、徐乾學の資治通鑑後篇、畢沅の續資治通鑑等の如し、又趙翼が二十二史劄記は考證正確にして論斷頗る適切なり地理學は明時東西の交通開けしより頗る進み勅選大清一統志、十八省通誌あり民間には顧炎武の天下軍國利病書顧祖禹の讀史方輿紀要等あり。

七一 清代の詩文を問ふ

【答】 清の聖祖學を好み儒を尚びしより經學文章漸く盛んなるに至れり、經學は宋及び明に比して劣れり雖も詩文に至りては亦見るべきあり文章には侯方域、魏叔子、五瓊、袁枚、方苞等其著名なるものとす詩賦に至りても又往々大家を出す一々歴指するに違あらず

七二 清代の宗教を問ふ

【答】 清の世佛教衰微し道教喇嘛教回々教耶蘇教並び行はる、喇嘛教の行はるゝ所は西藏蒙古にして回々教の行はるゝ所は内地の北方新疆なり。

七三 道教を記せよ

答 道教は道學より起りしものにして老聃を祖とす、後佛教に擬し偶像を設け三皇を主となし老子を以て之に配し其修養所説仙丹符籙等の術あり修養は山林泉石の間に氣を絞リ神を養ふをいふ、仙丹は所謂長生不死の藥にして符籙は神符を書し門戸に貼し或は携帶し或は病者に與ふれば平癒すべしといふ道教を奉ずるものを道士といふ頭髮を束れ黄衣黄冠の道服を着し妻を娶らず肉を啗らばす以て戒を修すといふ。

七四 喇嘛教を記せよ

答 喇嘛教は釋迦を以て宗とす故に佛教の一たりされど今は別に一派を組織せり、喇嘛に二種あり黄教と紅教と西藏蒙古、滿州に行はれず直隸山西、甘肅四川の各地に及へり紅教は本元印度より傳來す袈裟の法式により紅色の禪衣を服する教徒なるを以て名あり専ら密咒を持し呪巫をなす

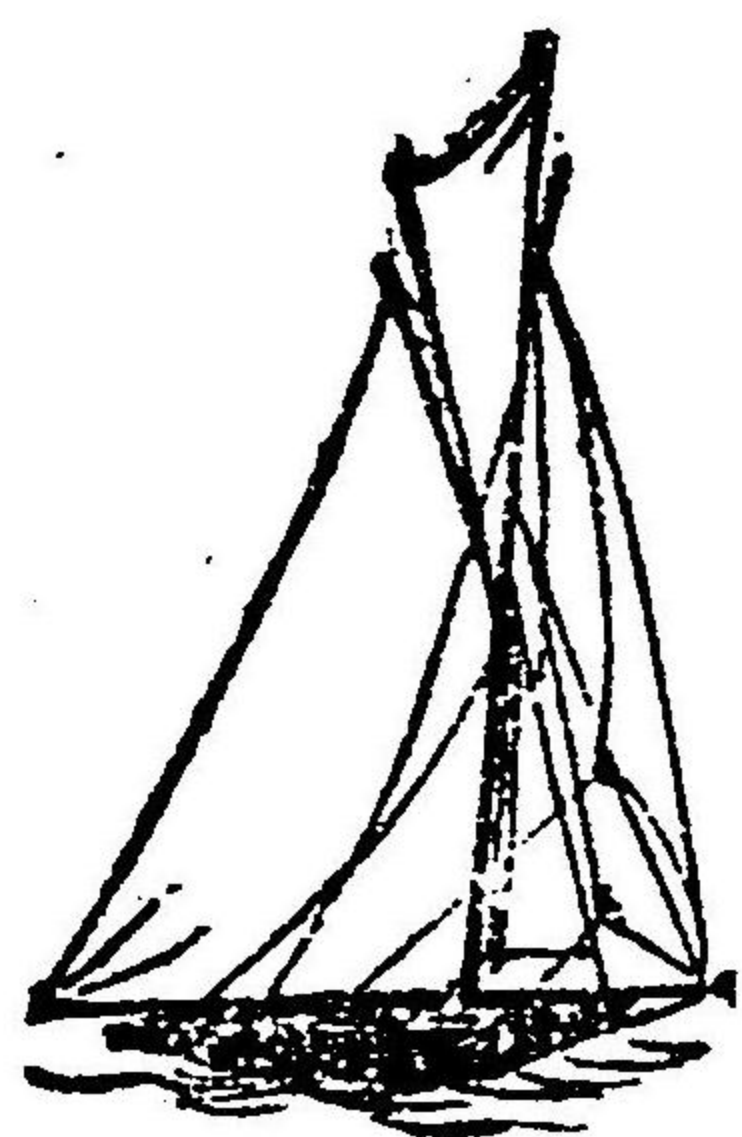
七五 回々教を記せよ

答 回々教は喇嘛に次で頗る支那に行はる、回々教の經典をコーランといふ一週一次必ず寺院に集念し經を會し禮拜す、死者あれば白布を以て之を包み埋葬するに棺槨を用ひ

す而して其徒は極めて親睦にして未識の人と雖も危急相扶援すされど他教の人と婚嫁をなさず是れ不淨なるを厭ひてなり

七六 清代の商業を記せよ

答 近代の支那は歐洲諸國に迫られて漸く内地を開放して富源を發す、沿海の船業、礦物の發掘、鐵道の布設は諸國が相争ひて特權を求むる處なり、獨逸は千八百九十七年膠州灣を占領し翌年其借地權を得、以て商工業の根據地を開き尋て露國は旅順口を借り滿洲鐵道布設の權を得、英國は威海衛を借りて從來の便宜を倍益し佛國は廣州灣を借り且又東京鐵道延長の權を得たり



第六章

亞細亞各邦史

- 中央亞細亞——(蒙古各部の盛衰)
- 西部亞細亞——(阿富汗、波斯、土耳其等)
- 朝鮮
- 印度
- 後印度——(暹羅、緬甸、安南)
- 歐人東漸史——(印度方面)
- 歐人東漸史——(中央亞細亞方面)
- 東亞最近史——(日、清、韓關係)

一 中央亞細亞

一 中央亞細亞に興亡せし各民族の歴史的類別並に地理的興廢の跡を示せ

答 中央亞細亞に興廢せし各民族は土耳其種、西藏種、蒙古種の三大人種にして上下三千餘の間是等の各人種勢力消長あり隆替興亡の跡類繁を極めたるが如し、而して支那歴代の朝廷一として是等夷人種の侵入に苦しめられざるはなく眞に歴代支那本部の患たりし今是れが歴史的類別を示せば左の如し先づ

▲土耳其種にありては。

- 一 種 嚮 (秦漢以前中央亞細亞より支那本部へ侵入せしもの)
- 二 匈奴 (漢の世に内外の蒙古部より支那本部へ侵入せしもの)
- 三 突厥 (六朝の終より唐代に至り内外蒙古部に威を振ひしもの)
- 四 回紇 (唐代の末中央亞細亞より長安に侵入せしもの)

▲西藏種にありては

- 一 氏 (六朝の際西藏部より支那本部に入り建國せしもの)
- 二 羌 (六朝の際天山南路より支那本部へ入り建國せしもの)
- 三 月氏 (天山北路より起り西藏より印度に入り大月氏を建てしもの)
- 四 吐蕃 (唐代西藏に興隆して版圖廣大を致したるもの)
- 五 黨項 (唐の代青海の東南部に興り唐と交通せしもの)

▲蒙古種にありては

- 一 東胡

二 柔然 (六朝の際漠北より起りて支那本部へ侵入せしもの)

三 烏桓

四 鮮卑 (六朝の際蒙古部より支那本部へ侵入して建國せしもの)

五 契丹 (宋朝の時支那の北部に興起せしもの)

蒙古 (宋朝の末中央亞細亞に起り宋を滅して支那全部を統一せしもの)

二 獯鬻とは何ぞ

答 元と中央亞細亞に生息せし古代の土耳其種民族にして周の世に支那本部へ移る史に曰く周の始祖を棄といふ唐虞の際后稷となりて部に封ぜらる、古公亶父に至り獯鬻の患を避けて屹山の下に移り始めて國を周と號せり云々又周の末世諸侯の紛争に乗じ勢を逞くして内地の各處に雜居し將さに漢族を壓倒せんとし北狄赤狄の屬皆此獯鬻の一種なり。

三 匈奴とは何ぞ

答 蒙古地方に遊牧せる土耳其種の一派にして殷周の際には獯鬻猥狁と稱し戰國の際には常に燕趙秦三國の患を爲せり、秦の始皇長城を増築して匈奴の侵入を防ぎ、蒙恬をして三十萬の兵を率ゐて討伐せしめぬ、下つて漢代に至り冒頓大單于出づるに及び、東は蒙古種の東胡を滅し西は西藏の月氏を走らし南は支那本部に迫り勢力強大漢朝も爲めに

金帛酒食を遣りて和親を請に至る是れ匈奴の全盛時代なりき(支那本部中古代の頂參看)爾來漢と交戦熇和一消一長して東漢の世に至り分裂して稍衰微せり

四 突厥とは何ぞ

答 突厥は匈奴の支族にして姓を阿史那と稱し世々金山(甘肅)の南に居りて六朝の始め柔然に仕へしが伊利可汗出づるに及び始めて柔然と絶ちて之を擊破し遂に柔然を滅し居を外蒙古斤山に下し其領土頗る廣大を致し六朝の際周齊二國と婚を通じ隋の初め東西二國に分れ、東部突厥は隋と隙を生じ煬帝を雁門に圍みし事あり、次で唐の高祖は創業の際東突厥の援を借りて功を收めしを以て即位以來贈遺甚だ厚かりし、又西突厥は隋末に至り大に疆域を拓き東は金山に至り西は裏海に臨み版圖廣大を致せしが唐の太宗以後唐威の振張するに従ひ漸次微弱となれり

五 回紇とは何ぞ

答 匈奴の苗裔の一種にして東突厥の衰亡に乗じて國を起し一時唐に附屬せし唐の中世に至り骨力裴邇なるもの最も強大にして玄宗の封册を受けて懷仁可汗となり突厥を滅し悉く突厥の故地を奄有せり

六 氏及び羌を記せよ

答 氏、羌は西域種にして後漢以來今の甘肅、陝西地方に雜居せしが晋初に至り氏の王蒲洪は畧陽(甘肅)に起り羌の酋長姚弋は南安(甘肅)に起り南北朝の際後涼、南涼の國を建てたり。

七 吐蕃とは何ぞ

答 西域種の一派にして唐の高祖の代吐谷渾を滅し黨項を役屬し、其版圖北は突厥に抵り南は天竺に接し東は松州(四川)に至り國勢大に振ひしが玄宗帝の爲めに破られしも安氏の亂起るに及び間に乘じて唐の東北境を蠶食し遂に長安に進入せり尋で宣宗の世に至つて稍々衰微せり。

八 柔然とは何ぞ

答 柔然は蒙古の一種東胡の苗裔なり六朝の始め社崙可汗なるもの出て漢北より起りて高車(甘肅)の地を奪ひ荐りに諸部を吞併し其版圖東は高句麗に接し西は焉耆に界し南は數々魏を侵せり、尋で太武帝魏の爲めに親征されて大敗せり

九 烏桓、鮮卑及月氏を記せよ

答 支那春秋の代、匈奴の東東胡を滅し西西域の月氏を破るや東胡の餘衆は東に散じ、烏桓山、鮮卑山(共に内蒙古に在り)を保ちて烏桓鮮卑の二族となり、又月氏の餘衆は西に遷りて今の伊犁地方に入り再び轉じて中央亞細亞に遁れ遂に大月氏と稱し近隣地方を破りて頗る雄大となりしが、漢の武帝の時張騫大月氏に使し、西域諸國と交通の端を開けり(支那本部中古紀参照)又鮮卑は其後稍々強大となり西漢の末世に至り悉く匈奴の故地を併せ分れて東西中の三部となりしが魏の曹操の烏桓を破るに及び魏に降りて中國に雜居し司馬懿の公孫淵を伐つに當り兵を出して之を助け晋の始め慕容、拓跋等は遼東より涼州に至る間に蔓延し慕容は遼西に寇して自から鮮卑の大單于と稱し又拓跋氏は拓跋祿官の可汗となり尋で二氏共に中華に國を建てたり(支那本部六朝期参照)

一〇 契丹とは何ぞ

答 支那本部近古史中宋の世に詳述せり

一一 蒙古の勃興を畧叙せよ

答 蒙古は元幹難河の上流に遊牧せる一種族にして世々遼金に貢を納れしが也速該に至

り近隣を併呑し勢始めて強大なり長子鐵木真繼ぐに及び金の爲めに韃靼を征服し兵を西して乃滿等を降し、西夏を掠奪し遂に幹難河上に大汗の位に即き成吉思汗と號し更に諸部を統御し道路を修め糧食を備へ大に爲す所あらんさせり。

一一一 成吉思汗の雄圖並に蒙古大汗の活動を畧記せよ

成吉思汗が斜難河上に即位して以來支那を一統するに至るまでの運動を摘記すれば左の如し

- 一 成吉思汗は西夏を征して其主を降し更に其翌年金を攻めて今の直隸山西、山東の地を席捲して燕京に向ひ之を降し耶律楚材を得て臣となす。(千二百十一年)
- 二 蒙古の使者隊商の西域(花刺子模)に赴きて殺さるゝや兩國の平和破れ成吉思汗大兵を率ゐて首府カラコロムを發し行くゝ諸部を征服してサマルカンドに到りモハメツドを逐ひ、ヘラツドを屠り、西は裏海の邊傍に至り、南は信度河の彼岸に至り其近地を征服して還へれり(千二百十八年)
- 三 モハメツド連戦敗北して裏海の一島に逃るゝや成吉思汗の二將は之を逐ふて北進し高加索山脈を踰へて阿蘭金察を伐ち破り又之を助けたる露西亞諸侯の軍を破りクリムに至りて還れり
- 四 成吉思汗西方亞細亞を征服して歸るや又直ちに兵を出して西夏を攻めて之を滅

し進んで金を侵し六盤山に至り病を獲て死せり(千二百二十五年)

- 五 成吉思汗の死後遺命により四子其版圖を分領し長子はキルクス荒原より露西亞に至る間の地を得て欽察(キンヂヤツプ)國の基礎をなし次子は西遼の故地を得、三子は乃滿の故地を得四子は蒙古の本土を得て各々帝位に即きぬ
- 六 成吉思汗の第三子窩闊臺(太宗)宋と通じて金を挾撃し之を包圍して討滅す(千二百三十四年)
- 七 金亡滅の翌年窩闊臺はクリルタイ會議(蒙古諸族を統一する同盟會議)を開きて歐洲侵畧の議を決し其長兄の子拔都(バットー)を以て元帥としアルガリヤを滅し、露西亞に入りカザン、莫斯科の兩府を陥れ、ウラツミールを取り、ノウゴロツトに向ひ且其一軍は波蘭(ポーランド)に侵入し瑞典に進みシコレイデ侯、ハインリツヒ及びチユートン騎士の軍をワールスタツトに破りモルダビアを過ぎて匈牙利(ハンガリー)に向ひし本軍に會し、又別に一隊を派して奧地利のノイスタツトに到らしめたり、是に於て歐洲諸國震駭し羅馬法皇は檄を飛ばして將さに十字軍を起さんさせり、偶々窩闊臺の計至りしかば拔都元帥は軍を旋しぬ
- 八 窩闊臺の死後蒙哥(憲宗)立に至り東は高麗を征し南は太弟忽必烈をして大理吐蕃を伐たしめ、其の將をして交趾を平げしめ、亞は弟旭烈兀をして彼斯小亞

細亞を蹂躪せしめぬ

九 時に南宋は衰微の極に至りしかば蒙古は三道より宋を侵す宋忽必烈に依り地を割き幣を納めん事を請ひしが偶々蒙哥の計に接せしかば忽必烈は其請を許し和林に歸つて帝位に即く即ち世祖皇帝なり次で都を燕京に定め國を大元と稱す、是れ實に元朝の祖なり

十 其後蒙古は旭烈兀をして西域回教諸邦の征服に従ひしめ彼斯より埃及に向ひ更に北に轉じてアルメニヤを略したり、

十一 尋で蒙古は南宋を攻めて揚子江沿岸の諸城を奪ひ、文天祥等の兵を撃退して西走せしめ遂に崖山の一戦に依つて南宋を全滅せしめ茲に支那全土を統一するに至れり(一千二百七十九年)

十二 高麗を征服して屬邦となし使者を日本に送りて招諭せしも日本應ぜざりしを以て兵十萬戰艦四千艘を派して日本に寇せり

十三 蒙古は大理を平げたる後使を緬甸に遣はして招降するや國王命を奉ぜざりしかば忽必烈帝は兵を派して之を征服せしめ遂に其封爵を授け安南行中書省を置きて統御し、尋で瓜哇も又其の侵襲を受けたり是に於て蒙古の版圖は前古に超越ししかば高麗に至り西は黒海に及び北はキルギスを包み、南は占城を極め世界史あつて以て未曾有の大版圖を掩有するに至れり。

一三 蒙古諸王の領土の消長を記せよ

答 初め蒙哥の位に即くや察合臺、窩闊臺兩家の諸王皆不平あり因て蒙哥は諸王を邊地に封し窩闊臺の孫海都(ハイツ)も亦金山の北に貶せられしが、其後諸王の爲めに奉ぜられて大汗となり察合臺國の八剌(バラット)と結びて元の直轄地なる土耳其斯坦を占領し又欽察國の忙哥帖木兒汗(マンガテムールカン)と稱して元に抗し尋で海都は機に乗じて波斯に入り伊蘭汗と戦ひて大敗し尋で其子察八兒(チャパール)の代に至り元の成宗に降れり。

又伊蘭國は旭烈兀の子孫世々位を襲ぎにて元室に忠誠なりしが三傳して合贊汗(ガザン)に至り専ら内治に務め回基二教を優遇して好を歐洲列國の通じ國勢頗る盛なりき、

又欽察國は拔都の死後子孫、相繼まで汗位に上り大に基督教徒を虐待し羅馬法皇アリサンドロ四世の十字軍を起して欽察を攻めんとするや別兒可汗は直ちに波蘭に入り國都を陥れしが是より欽察は東歐諸國政治上の一主動力となり又漸く歐洲の文明に浸染せしが忙哥帖木兒の子脱々に至り埃及土耳其莫斯科等と通婚して國勢頗る盛大なりき

又察合臺國は八剌汗の子都哇(ツァ)汗位に在りしが是れより全く獨立したり此の以前元は嶺北行中書省を和林に置きて蒙古諸王の全領土を統轄せしめたり。

一四 帖木兒の興起を記せよ

答 蒙古の察臺國は都哇汗の死後三十餘年にして國內大に亂れしかば成吉思汗の後裔を稱する帖木兒は乘すべしとして兵を擧げまづ月祖伯人(ウスマック)を逐ひ次で花刺を略し撒馬兒罕(サマルカンド)に汗位に即きぬ時に西紀千二百七十年にして成吉思汗即位後百七十年、忽必烈が元の帝位に即き後百十年實に明の太祖即位の翌年なりし。

一五 帖木兒の雄圖を記せよ

答 これより帖木兒は伊蘭國を征してイスパハンに進み更に阿母河(アム)に軍を進めて圖克達密西汗を破り、アルメニヤ、ゲオルギヤを略し、又高加索山脈を越えて露國に入りオルガ河の下流よりアゾフ海濱に至るの地を陥れ。尋で西征の師を起し印度河を渡りてパンチヤブに侵入しアルヒを陥れ進んで恒河に至る。時に撒馬兒罕(サマルカンド)に於ける土耳其人の一派は成吉思汗の中央亞細亞征服に際しイェニウームに遁れしが十三世紀の晩年その酋長オットマンのニコメヂアを略して建國の基を定めしにより是をオットマン土耳其族(今の土耳其朝廷)と稱すムラード一世の時其兵頗る強くアドリアノールを取りて之に據り其子バヤーシードは更に希臘を侵しマセドニヤを略し將さに東羅馬帝國の首府コンスタンチノールを陥れんとし其版圖東はユーフラテス河に至り西は

ドノツ河を起へてトラキアに及び茲に於て帖木兒は兵を率いて先づゲメギルアを征定しバヤーシードはコンスタンチノールの圍を解きて東に還り帖木兒の軍を迎撃し大敗して其擒となれり時に千四百〇二年尋で帖木兒は明を襲はんと欲して東征の途に上りしも途中疾を得て歿せり是れより凡そ百二十年を経て帖木兒五世の孫フェルガナ王ババルに至りサマルカンドより北印度に入り莫臥兒帝國を建設せり。以上蒙古成吉思汗の勃興より莫臥兒帝國建設に至るまで通じて三百二十年其の間中央亞細亞に於ける蒙古人種の勢力最も優大にして且つ其の運動の活潑なる至る處ろの諸民族を征服して其版圖を廣め、遂に西部亞細亞より歐洲の東部に其の威名を轟かすに至れり。

二、西部亞細亞

一六 西方亞細亞諸國の興廢を畧記せよ

答 四方亞細亞とはチカリス、ユーフラテス河域の地、裏海、アラル海の南方、印度河の西北方に位する土地即ち今の阿富汗斯坦、波斯、土耳其斯坦地方の總稱にして其事變は多く西洋歴史に屬するを以て東洋歴史として記する部分に極めて尠く、其概畧に過ぎず、今、往昔より此の土地の全部又は大部を統一したる邦國及び人種を示せば左の如し

一 前バビロン國

- 二 アツシリア國
- 三 後マビロン國
- 四 彼斯王國
- 五 歷山大王及其繼續者
- 六 回々教徒
- 七 蒙古朝廷
- 八 オットマン朝廷

一七 歷山大王の事跡を畧叙せよ

答 歷山王は初に歐羅巴のマセトン國王なり大王の父希臘を攻めて其地を取る大王は其國人并に希臘人を率ゐて亞細亞に入り彼斯を亡せり、歐人にして亞細亞に侵入せしは歷山を以て初とす、歷山の死後其將セリウナス波斯の故に王となり其子孫繼續して數世に及べり。是れ紀元前百三十年頃にして西漢の武帝の世支那人張騫初めて此の地に來れり

一八 回々教徒を記せよ

答 回々教徒は亞拉比亞人にしてマホメットの教を信する者なり、此教徒は西紀後六百二十二年を以て其國の紀元とす回々教は耶蘇教と同じく猶太教より出で、一神を奉ずる

宗教なり此教徒は宣教を征伐を事をし遂に大國をなせり阿弗利加の北部歐洲の南部亞細亞の西部全體其領地となる。

一九 蒙古人の征服を記せよ

答 鐵木眞、帖木兒等西亞諸國を征服せし蒙古人の事歴は中央亞細亞部に詳かなるを以て茲には唯其概畧を記さん曰く帖木兒が、蒙古王族の領地たりし彼斯より起つて祖業を復興せし時其の領地東は萬里の長城に起り、西は地中海に及びて中央亞細亞の全土を掩有し其命令は印度并に歐洲東都に行はる、而して其の都は中央亞細亞のサマルカンドなりし。

二〇 オットマン帝國を記せよ

答 西紀後十三世紀の末土耳其人の一派オットマン人種は裏海の北方に在りしか蒙古人の侵襲を受けて西遷し小亞細亞に入り、漸く此の地を蠶食して遂に海に航して歐洲に侵入せり尋てオットマン人種は帖木兒に破られ小亞細亞は其所領となる、帖木兒死してオットマン人種勢を復し遂に東羅馬帝國を亡しコンスタンチノープルに都し國號を建て、土耳其帝國といふ、其後領地大に加はり埃及も其有に歸し西方亞細亞チカラス河附近に及べり。